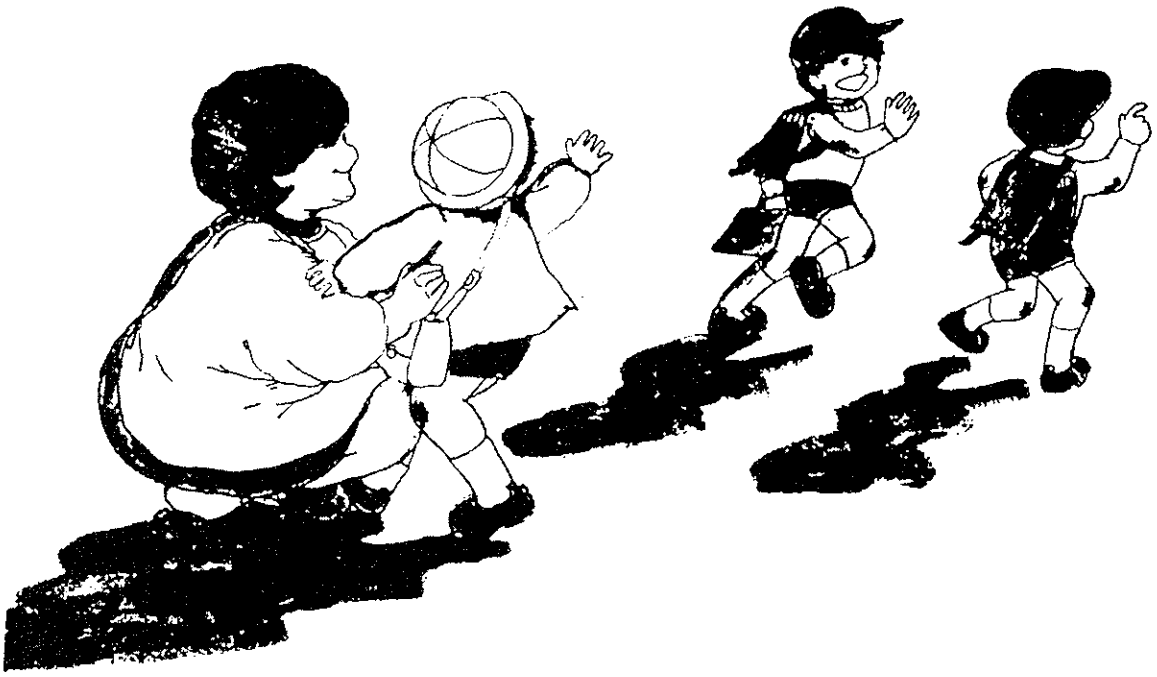
望ましい家庭教育をめざして

福岡県における小学生をもつ父親・母親の養育態度・行動の実態（その2）

昭和56年度 家庭教育総合セミナー報告書



福岡県教育委員会

はじめに

子どもたちの成長・発達は単に家庭のみでなく、家庭外の要因（地域性、友だち関係、学校の教師など）からも多くの影響をうけていることはいうまでもありません。しかし、家庭は子どもたちの生活基盤であり、子どもたちの人格の発達や基本的な生活習慣を培う場として重要な役割を担っているといえます。

本来、家庭で行われる教育はあくまでも私的な営みであり、家庭の実態に即して行われるべきものでありますが、県教育委員会としては、家庭教育が子どもの発達段階に応じ、その時期に適した教育が行われなければ効果があがらないという基本的立場にたち、家庭教育のあり方についての資料や学習の機会を提供する事業を展開しています。

そのひとつとして、県教育委員会では、昭和54年度から５か年計画で「家庭教育総合セミナー事業」を実施し、家庭教育にかかわる具体的問題を実証的に調査研究をすすめています。

昭和54年度は、県内各地で実施された家庭教育に関する調査の分析、それを踏まえて昨年度は県下7地区、19小学校の児童の父親・母親約 8,000名を対象に「子どものしつけに関するアンケート調査」を実施しました。

本年度は、昨年度の調査をもとに「小学生をもつ―あなたの子育てのために」という家庭教育に関する啓蒙・啓発のための小冊子を作成し、県下市町村教育委員会及び小・中学校等へ配布しました。

昨年度は、調査内容が膨大であったため中間的報告（子どもの属性に関するもののみ）になりました。今後の家庭教育を考えていく上では、単に子どもの属性だけでなく、あらゆる角度から調査・検討し、研究していく必要があります。その意味から親の属性（地域・年代・学歴・職業・母親の職業の有無等）についての調査も重要な要因と考えられます。そこで、今年度は昨年度の調査をもとに親の属性を中心とした資料として本報告書を作成しました。

今後の望ましい家庭教育のあり方については、あらゆる場や機会に十分討議される必要があると思われますが、その時の研究資料としてこの冊子が活用されることを願っています。

最後に、この調査に御協力いただいた学校や父母の皆さんに心より感謝申し上げます。また、この事業をすすめるにあたって御多忙中にもかかわらず、終始熱心に御指導・御助言をくださった家庭教育総合セミナー事業企画研究委員並びに関係者の方がたに厚くお礼申し上げます。

昭和 57 年 3 月

福岡県教育庁指導第二部社会教育課
課長　高木康生

目　　次

はじめに
Ⅰ．家庭教育総合セミナー事業の概要
Ⅱ．家庭教育総合セミナー事業第３年次を終って
Ⅲ．福岡県における小学生をもつ父親・母親の養育態度・行動の実態調査（その２）
序　章　調査の概要
1．調査の目的 …… 7
2．調査の方法 …… 8
3．分析の基本的な視点 …… 12
第１章　子どもの基本的生活習慣に対する親の養育態度・行動の実態
1．世話の実態 …… 13
2．授与の実態 …… 16
3．受容の実態 …… 18
4．叱責の実態 …… 21
5．本章のまとめ …… 23
第２章　子どもの遊びに対する親の養育態度・行動の実態
1．世話の実態 …… 25
2．授与の実態 …… 29
3．叱責の実態 …… 32
4．干渉の実態 …… 36
5．本章のまとめ …… 39
第３章　子どもの学習に対する親の養育態度・行動の実態
1．世話の実態 …… 41
2．授与の実態 …… 46
3．干渉の実態 …… 52
5．本章のまとめ …… 55
第４章　子どものその他の生活領域に対する親のかかわり方
1．おこづかいの実態 …… 56
2．手伝いの実態 …… 57
3．家庭における「きまり」の有無の実態 …… 58

4．家庭における性教育の実態 …… 59
5．子どもの帰宅時における親の在宅の実態 …… 60
6．本章のまとめ …… 62
第5章　子どもの養育に対する親の意識の実態
1．子どものしつけに対する親の悩みの実態 …… 64
2．子どものしつけについての親の学習の実態 …… 70
3．子どものしつけについての親の自己評価 …… 72
4．本章のまとめ …… 76
第6章　結論と今後の課題 …… 77
—「無意識の過保護」と「一部放任」—

引用文献・参考文献 …… 80
本調査で使用した質問紙 …… 81
調査協力校名 …… 85

※ 表紙絵　筑紫野市山口小学校教諭　三角真理子 作

Ⅰ　家庭教育総合セミナー事業の概要

1．趣　　旨

現代社会において、次代を担う子どもたちを健全に育成していくことは重要な課題であります。なかでも、子どもたちの生活基盤である家庭は、子どもの成長発達に重要な役割をもつものと思われます。

しかし、近年の社会構造の変化、とりわけ都市化現象による生活環境の変化、情報のはんらん、就労婦人の増加等は、新たに家庭教育に関する問題を生じているといえます。核家族化や少子化等による親の過保護や過干渉な養育態度・行動の状況もそのひとつの現われだと思います。

このような意味から、福岡県教育委員会では昭和54年度から５か年計画で当面する家庭教育に関する諸問題を具体的・実証的に調査研究し、今後の望ましい家庭教育のあり方を研究していくため「家庭教育総合セミナー事業」を実施するものであります。

なお、「家庭教育総合セミナー事業」の推進は次の３事業で実施しています。

(1)　企画研究委員会の開催

学識経験者及び現場指導者等による委員会を構成し、家庭教育に係る諸問題について調査研究を行うとともに地域別家庭教育総合セミナーの企画や研究のまとめを行う。

(2)　地域別家庭教育総合セミナーの実施

企画研究委員会での調査研究結果をもとに、家庭教育に係る諸問題について広く意見を聞き、家庭教育のあり方についての啓蒙及び意識の高揚を図る。

(3)　資料の作成・配布

企画研究委員会での調査研究や、地域別家庭教育総合セミナーでの討議の結果を連携させ、望ましい家庭教育のあり方をめざす資料を作成し配布する。

2．事業の全体計画

家庭教育総合セミナー事業５か年計画は次のとおりです。

年　次(年度)	内　　容
1　年　次 (54年度)	●県内で過去５年間に実施された家庭教育に関する調査資料の調査研究 ●地域別家庭教育総合セミナーの実施 ●児童観に係るアンケート調査 ●報告書の作成・配布

年　次(年度)	内　　容
2　年　次 (55年度)	●小学生をもつ親を対象とした養育態度・行動についての調査研究 「子どものしつけについてのアンケート」調査 ●地域別家庭教育総合セミナーの実施 ●報告書の作成・配布
3　年　次 (56年度)	●２年次の調査の分析・まとめ（継続） ●小学生をもつ親を対象とした養育態度・行動についての調査研究 ●地域別家庭教育総合セミナーの実施 ●家庭教育啓発資料「小学生をもつ―あなたの子育てのために」の作成・配布 ●報告書の作成・配布
4・年　次 (57年度)	●中学生の生活実態及び中学生をもつ親を対象とした養育態度・行動についての調査研究
5　年　次 (58年度)	●２～４年次に調査した実態をもとに、さらに総合的な観点からの調査研究を行い、家庭教育の指針となる資料を作成する。

3．本年度事業

(1) 企画研究委員会の開催

ア．企画研究委員会（委員　12名）　　6　回

イ．専門委員会（委員　6名）　　4　回

（専門委員会は企画研究委員の中から選出した委員で構成し、会の効果的運営を図るための企画・立案を行う）

ウ．主な内容

○　小学生をもつ親を対象とした養育態度・行動についての調査研究

○　地域別家庭教育総合セミナーの企画

○　家庭教育啓発資料「小学生をもつ―あなたの子育てのために」の作成

○　昨年度調査の分析・まとめ（報告書作成）

エ．昨年度調査の概要

○　調査対象　　県下７地区、19小学校の小学生をもつ父親・母親

○　サンプル数　　7,812名（回収率　96.9％）

○　調査時期　　昭和55年９月22日～27日の一週間

(2) 地域別家庭教育総合セミナー事業「これからの家庭教育を考えるつどい」の実施

ア．研究テーマ　「心身ともにたくましい子どもを育てるための親のあり方」

イ．方　法　問題提起、講演、シンポジウム

ウ．会場・期日・参加者数

地区	会場	期日	参加者数
筑後北部	浮羽町公民館	7月26日(日)	400名
筑後南部	大和町中央公民館	8月30日(日)	600名
北九州	戸畑市民会館	2月19日(金)	400名
福岡	県庁講堂	2月23日(火)	200名
筑豊・京築	直方市中央公民館	3月14日(日)	250名

(3) 資料の作成・配布

○家庭教育啓発資料「小学生をもつ―あなたの子育てのために」の作成

○調査結果を中心とした資料（本資料）の作成

○県内市町村教育委員会、小学校、中学校、社会教育関係団体等への配布

4．昭和56年度企画研究委員名

（委員はアイウエオ……順）

	氏名	所属・役職	専門分野
委員長	古味堯通	佐賀大学教授	教育学
委員	入江建次	九州大谷短期大学助教授	臨床心理学
〃	岡部弘道	九州大学健康科学センター教授	保健体育学
〃	小島義男	福岡県経営者協会総務部長	産業・経済界
〃	貞光康子	福岡市中央区役所青少年相談員	社会教育関係
〃	詫摩スミ子	北九州市立筒井小学校長	学校教育関係
〃	秦政春	福岡教育大学講師	教育社会学
〃	三浦清一郎	福岡教育大学助教授	社会教育学
〃	三谷勝彌	那珂川町立岩戸北小学校長	学校教育関係
〃	宮原和子	近畿大学女子短期大学助教授	発達心理学
〃	村田勝重	西日本新聞社筑豊総局記者	マスコミ関係
〃	横山正幸	福岡教育大学助教授	児童心理学

Ⅱ　家庭教育総合セミナー事業第３年次を終って

家庭教育総合セミナー企画研究委員会
委員長　古　味　堯　通

1．変貌する地域社会の意識

この調査を整理している間にも、青少年の非行は、統計上ますます激増の一途をたどってまいりました。国も自治体も事態を憂慮し、各地で多様な企画がもたれていることは、マスコミの報道によって御承知の通りであります。

その中で、家庭教育総合セミナーの事業もその一翼を担ってまいりました。昭和56年度は前年度の報告書をさらに要約して、「あなたの子育てのために」という小冊子を編集したのに続いて、この度この報告書を作成いたしました。前回取り上げなかった地域別、年代別、学歴別、職業別、母親の職業の有無別等について、それぞれ分析がなされております。

一方、福岡市がこのほど実施した市民意識調査のなかでも、青少年の非行問題への関心度はきわめて高く、子を持つ親だけでなく、ほとんどの市民が老若を問わず関心を持っていることがわかりましたが、特に主婦の92.8％が目立ち、やはりお母さんたちは子供が心配なのだ、と新聞は報じていました。

さて、その調査ですが、「親・家庭」、「学校教育」、「地域・社会」、「子供自身」の中で、圧倒的に「親・家庭」に責任があるという答えが返ってきました。何よりも親がしっかりせねばと指摘され、「子供のしつけができない親が急増している」、「親のしつけが甘い」と、まずは〝しつけ不足〟を全員が指摘しています。

福岡県の家庭教育総合セミナーの報告書ではこの点を指摘し、それをくわしく分析して検討を続けてまいりました。今後ともこの報告書が研修会や御家庭で参考にしていただければ幸いです。

さて、研修会ですが、昨年福岡県や佐賀県の各地で、ＰＴＡの研修会に参りまして、「子供の環境浄化」という分科会の報告をきいておりますと、会員の発表の中にきまって、地域共同体の何かが崩れていきつつあることが、少年非行の原因ではないか、という指摘がありました。それが農村部の人からもいわれるのをきいておりますと、変貌する農村、人口増が続く都市とも共通に、ベットタウン化して、地域が単なるねぐらに転落しているさまがわかります。筑豊では「炭住改良と町づくり」と題して、旧炭住の物質的空間が良くなる一方で、人間関係が希薄になりそうだと警告する報告書も出ています。「子供のしつけができない親が急増している」ということも、親はただ単に親として真空地帯で子供のしつけをしているわけではありませんので、親が住んでいる地域や、親がどのような生き方をしているのかということと深くかかわりあっていると思われます。つまり親に責任があるという主

張は、もう一歩深くつきつめると、背後にある地域社会にいきつきます。「子供のしつけができない親が増えている」という意見は、地域社会が子供をしつけることができなくなりつつあるということになります。地域による差がみられない、という結果がでる質問項目では、今日の社会がおしなべてそういう課題を背負っていると理解できます。

ＰＴＡの父親・母親はそれを肌で感じ、ある人は共同体の崩壊、都市化現象のせいだといい、また他の人は地域の目、地域の規制力が衰えたという表現をします。たしかに戦前、私共の少年時代には、農村を中心としてその周辺の町々でも、「世間様に申しわけない」、「世間を騒がせた」、「世間が許さぬ」ということばが、親たちの口からきかれました。一方では「ばちがあたる」という、いまでは死語になった感があることばもひんぱんに使われていました。自分の家、よその家、世間という水平的関係と、神仏と個人という垂直的関係の意識がそのようなことばを生んだものと思われます。「ばちがあたる」というとき、それは対人関係から出てくるのではなく、何かを明確には意識していないけれども、絶対者的なものを予想させる宗教的雰囲気をオブラートに包んだ感じでありました。先日の新聞はロンドン支局からの感動をこめたレポートを掲載していました。タイトルには「バチガアタル」、「忘れられゆく言葉」、「古き良き日本の思考とともに」と書かれています。ロンドン在住の、父が日系二世で、母親が一世の自称「二世半」のアメリカ生まれの女性は、「日本語」が全くしゃべれない。だけど「おかあさんが幼ない時教えてくれた二つの言葉を明確に覚えている」。それが「ガマン」と「バチガアタル」の二つだった。おそらく激しい労働と苦難の人生が背後に予想されます。天草地方に残っている「諸難儀」ということばと同じ背景であります。天草のひとびとは、諸難儀ということばによって互いの労苦をいたわる、ぎりぎりの線での共同体意識を支えていました。

戦後36年かけて、変貌するこの国の社会は、農村地域の最深部の一点まで、いま変貌させようとしているのでしょうか。

2．どう対処するか

福岡都市圏の俗にいうベットタウンで、子供会育成会の役員や区の評議員や公民館長等を勤めたわたしのささやかな経験からいえば、農村部の婦人方はいつも全体的配慮ができます。家を留守にして、夫と共に外で働いていることが多かったから、皆で子供を見守ろうとする姿勢が身についていて、子供のことを中心にして地域の全般のことに配慮がゆきとどいています。しかし、農村で長い年月をかけて築いたそのような生活のスタイルが、時代の流れの中で、例えば、会社のマイクロバスに乗って、パートで働く婦人の就業人口の増加という今日の社会的変動の中で、うまく型を変えて転移し、生かされているかといえば、どうもうまくいっていない、というところに問題があるように思えます。しつけの問題は社会の変貌と生活のスタイルの変化にともなって、かっての「古き良き日本の思考」（前出の新聞の表現によれば）が、新しい地域社会の生活の中に、うまく転移していないところにあるのか

もしれません。また全体的配慮（この場合の反対概念は、最先に自分のことを考える、或いは自己中心的）というものは、学歴や教養と関係がない。学歴や教養なら団地や新興住宅街の転入組の御婦人の方がある場合もあるかもしれないが、体で全体的配慮というものを学んでいない、とその時期わたしは教えられましたが、さてそれらを今日の地域社会の変貌の中でどう対処していったらよいか知りたいものであります。おそらく違ったスタイルで芽生えているし、育っていっているものもありましょう。ボランティア活動という形式が増えているのも承知しています。新しい家庭像を求めて、という研修会がひらかれているのも最近の特徴の一つであります。父親像という人間像の問題がどこどこの公民館などで議論になること自体に心強さを覚えます。この報告書をはじめ、日本のいたるところで行政の手引書が出されたり、夏の暑い最中に汗を流しながら、あるいは冬の寒い体育館で、「子供の環境の浄化を求めて」というような研修会を世界のどこでやっているのだろうかと思うとき、一瞬、同胞に対する熱い信頼がよみがえることがあります。先進工業社会がかかえる共通の問題―家庭の崩壊、離婚の増加、子育ての困難、青少年の非行、国の活力の低下―も、もしかすると、さる外国人学者がいうように、日本社会はうまく乗り越えるかもしれないと思う瞬間があります。不安はありますが、このような調査をもとにして、一歩前進するより他はないと思われます。

福岡県における小学生をもつ父親・母親の養育態度・行動の実態報告（その２）

序章　調査の概要

1．調査の目的

近年子どもたちについて自主性がない、耐性がない、集中力・根気がない、思いやりがない、責任感がない等、さまざまな問題性が各方面から指摘されている。むしろこれらの指摘のなかには、科学的根拠が必ずしも十分でないものもある。しかし、いわゆる現代っ子が心身の両面で、過去とは比較にならないほど深刻な状態にあることは、真に子どもを知るものなら今日誰も否定しないであろう。子どもの万引や窃盗、強盗、自殺、学校内暴力や家庭内暴力、子どもの性犯罪など新聞やテレビをにぎわしている、子どものさまざまな反社会的行動や非社会的行動は、こうした問題性が具体的に顕現した、まさに象徴的な現象であると言っても過言ではないのである。

こうした状況が生み出されてきた原因は一つではない。おそらくさまざまな要因が複雑に絡みあって引き起こされてきているものと考えられる。しかしその中で最も重要な要因の一つとして親の養育態度・行動、つまり子どもに対する日頃の親の接し方が挙げられよう。養育態度・行動にはいくつかの類型があるが、今日の子どもに関して特に問題にしなければならないのは、過保護と呼ばれる養育態度・行動である。

稲村博氏（1979）は、その著「ティーンエイジャー」の中で現代の子どもの自殺や非行など様々な問題行動に共通する特徴と一般の子どもたちがもっている問題性の特徴を指摘したあと、その原因について次のように述べている。「今日の子どもたちがさまざまな問題行動に陥り、しかもその内容が質的変化をとげていること、および子ども全般がさまざまの好ましくない徴候を呈してきたことについて、原因の最大のものは家庭の親子関係に求められるように思う。(中略) 今日のわが国の親子関係は一般にまことに問題が多いように思う。一言にしていえば、きわめて不自然なことである。しかもその不自然さが、以前の時代のような貧困とか、親の欠損とかいうのではなく、むしろ親の考え方と、過保護で甘やかせすぎの養育態度にあるのが特徴である。親はともすると利己的な考えを持ち、それにもとづいて子どもに愛情も物質も与えすぎ、世話をやきすぎ、干渉しすぎ、そして期待をかけすぎている。そうした甘やかせすぎ、与えすぎ、期待のかけすぎを愛情と錯覚しているところに問題があると思われる。これによって子どもは不自然にゆがんで成長し、またさまざまの問題行動に陥るのである。その意味では親子関係の不自然さこそが今日の問題の根本だというべきであろう」かくして稲村氏は過保護についてまず取り上げ、続けて次のように指摘している。「子どもをとりまく不自然な状況のうち、今日まずあげなければならないのは、親や社会の過保護である。子どもたちは、過剰に保護され、甘やかされ、世話をやかれている。それが乳児期に行われるのは当然だし、豊かな愛情で包み込むのが正しいことはいうまでもないが、問題は子どもが幼児期になり、学童期になり、思春期を迎えても、基本的には乳児に対すると同じ態度をとり続けていることである」

また、平井信義氏（1979）は、家庭内暴力の原因に関して、まず母子関係の問題を取り上げ、次のように述べている。「その養育態度を検討してみると、子どもへの奉仕が多いことである。母親は、問題が起きるまで、奉仕に務めている。子どもが入浴中に着替えの衣類を全部揃えてあげていた者もいる。朝食のときに卵の殻を割り、カラザを取り除いて、子どもに差し出していた母親もいる。その他、中学生になっても、学校での忘れ物がないようにと、かばんの中を点検し、不足があればそれを補っていた母親もいる。小学校4年生になっても、衣類の着替えを手伝っていた母親もある。こうした奉仕をたとえて言えば、殿様に仕える侍女のようであり、それはやがて子どもからの要求となり、子どもの言いなりにしていたために、暴君のような心ができあがったと言える。(中略) 過保護とは、子どもに「まかせる」ことができず、口を出したり、手を差しのべてしまう養育態度であるから、子どもには自分で自分の問題を処理する経験がきわめて乏しくなる。つまり、自主性の発達は著しく遅れている。何らかの困難があれば、母親が援助してくれることを期待しているのである。このように過保護を受けてきた子どもは、思春期以後になると、さまざまな困難の前に立たされることになるから、挫折する。学校においても、社会の中でも自主的に行動しなければならない場面が急激に多くなるが、そうした困難に出会うと、自己処理の能力が弱いから、不安が著しくなり、その不安に耐えられず、家庭へ逃避するようになる。それが、登校拒否の発生につながる。」

このように過保護な養育態度・行動は、子どもの健全な発達を歪める極めて問題の養育態度・行動と言うことができるのである。しかもこの態度・行動は、今日かなり一般的であることが専門家を含む多くの人々によって示唆されている。しかし、現実にはその実態は必ずしも明らかではない。そこで本調査では、親の養育態度のうち、特にこの過保護な養育態度・行動に注目し、福岡県におけるその実態を明らかにして、これからの適切な子育てのあり方について、手がかりを得ようとするものである。

2．調査の方法

(1) 調査対象

本調査は福岡県下7地区、19校の小学生を持つ両親(家庭)を対象として行われた。回収数は3,906組、7,812サンプルで、回収率は96.9%であった。但し有効サンプル数は、7,156、すなわち父親が記入したもの3,365サンプル、母親が記入したもの 3,791サンプルで、その有効率は、91.6%であった。なお残りの 656サンプルは、記入者が指定された者（父親ないし母親）以外か、不明のもので以下の集計では除外された。なお調査対象者を記入対象児となっている子どもの学年、性別、兄弟の有無、兄弟の位置という子どもの側の条件によって分類すると、表1、2、3、4のとおりであった。

表１．学年別サンプル数

学　年	1	2	3	4	5	6	計
父	429	495	485	517	670	760	3,356 (9)
母	497	547	529	573	761	872	3,779 (12)
計	926	1,042	1,014	1,090	1,431	1,632	7,135 (21)

(　)はＮＡ・不明

表２．男女別(学年別)サンプル数

	性別＼学年	1	2	3	4	5	6	計
父	男	215	264	229	267	315	384	1,674
	女	211	230	255	245	345	370	1,656
	小　計	426	494	484	512	660	754	3,330 (35)
母	男	240	284	246	293	367	442	1,872
	女	250	260	281	275	384	423	1,873
	小　計	490	544	527	568	751	865	3,745 (46)
計		916	1,038	1,011	1,080	1,411	1,619	7,075 (81)

(　)はＮＡ・不明

表３．兄弟の有無(学年別)サンプル数

	区分＼学年	1	2	3	4	5	6	計
父	ひとりっ子	54	38	33	36	45	52	258
	兄弟有	375	456	449	477	624	704	3,085
	小　計	429	494	482	513	669	756	3,343 (22)
母	ひとりっ子	68	59	48	45	62	70	352
	兄弟有	428	487	479	524	697	796	3,411
	小　計	496	546	527	569	759	866	3,763 (28)
計		925	1,040	1,009	1,082	1,428	1,622	7,106 (50)

(　)はＮＡ・不明

表４．兄弟の位置(学年別)サンプル数(ひとりっ子は長子)

	区分＼学年	1	2	3	4	5	6	計
父	長　子	308	342	303	272	299	365	1,889
	長子以外	121	152	178	243	371	394	1,459
	小　計	429	494	481	515	670	759	3,348 (17)
母	長　子	362	393	329	293	343	408	2,128
	長子以外	134	153	196	278	417	460	1,638
	小　計	496	546	525	571	760	868	3,766 (25)
計		925	1,040	1,006	1,086	1,430	1,627	7,114 (42)

(　)はＮＡ・不明

また、親の側の条件（地域・年代・学歴・職業・母親の職業の有無）により対象者を分類すると次の表6、表7、表8、表9のとおりであった。

表5．地域別(学年別)サンプル数

	地域＼学年	1	2	3	4	5	6	計
父	都市団地	100	89	102	103	108	97	599
	商業	95	99	105	103	146	155	703
	工業	26	54	49	56	76	94	355
	過疎	23	36	26	34	60	69	248
	農村	79	87	65	71	93	93	488
	漁村	44	55	63	66	94	85	407
	旧産炭地	62	75	75	84	93	167	556
	小計	429	495	485	517	670	760	3,356 (9)
母	都市団地	118	99	110	111	115	111	664
	商業	101	111	115	118	171	176	792
	工業	45	56	52	60	93	100	406
	過疎	24	38	25	41	70	88	286
	農村	79	93	82	77	98	103	532
	漁村	55	64	64	77	102	98	460
	旧産炭地	75	86	81	89	112	196	639
	小計	497	547	529	573	761	872	3,779 (12)
計		926	1,042	1,014	1,090	1,431	1,632	7,135 (21)

（　）はＮＡ・不明

表6．記入者の年代別サンプル数

	①10代	②20代	③30代	④40代	⑤50代	⑥60代	⑦70代	計
父	0	30	1,669	1,502	115	9	2	3,333 (32)
母	0	179	2,629	936	35	0	0	3,779 (12)
計	0	215	4,298	2,438	150	9	2	7,112 (44)

（　）はＮＡ・不明

表7．学歴別サンプル数

	中学校卒	高校卒	短大・高専卒	大学卒	計
父	1,057	1,471	123	498	3,149 (216)
母	1,300	1,959	231	84	3,574 (217)
計	2,357	3,430	354	582	6,723 (433)

（　）はＮＡ・不明

表8　職業別サンプル数

	管理的・専門的職業	事務的職業	販売・家事サービスの職業	保安・運輸・通信の職業	農業・林業漁業の職業	技能工・生産工程・単純労働・採石等職業	その他	無　職	計
父	669	266	580	346	362	671	203	36	3,133 (232)
母	267	311	644	25	426	296	226	963	3,158 (633)
計	936	577	1,224	371	788	967	429	999	6,291 (865)

(　)はＮＡ・不明

表9　母親の職業の有無別サンプル数

	主婦専業	専業の仕事をもっている	パートの仕事をもっている	計
母	1,278	1,480	574	3,332 (459)

(　)はＮＡ・不明

(2) 調査の方法

本調査は、質問総数45項目からなる質問紙「小学生のしつけについてのアンケート」によって行われた。この質問紙には、父親用と母親用があったが、質問の構成と内容は、母親用が45項目の他に１項目付加されていたことを除けば、全く同じものであった。

質問紙の構成は、基本的には子どもの生活領域とそれに対する親の側の養育態度・行動という観点から考えられた。すなわち、質問紙は子どもの生活領域を基本的生活の領域、遊びの領域、学習の領域、その他の領域という４つの側面に区分し、これらの各領域に対する親の側の養育態度・行動の領域を世話、授与（物をどの程度与えているか）、干渉、受容（子どもの要求をどの程度受け入れているか）、叱責という５つの側面に区分して、実態を明らかにするように構成した。なお、これには付加的な質問として、子どものしつけに対する親の自己評価、子どものしつけで困っていること、悩んでいること等の質問項目を用意した。表10は、質問紙の構成を示したものである。これらの質問項目の具体的内容は、本文ならびに本報告の最後に付してある。

表10　質問紙の構成

子どもの生活領域	親の行動領域	質問項目
基本的生活領域	●世話(指示)　●受容　●授与 ●叱責　●干渉	12問
遊びの領域	●世話　●叱責 ●授与　●干渉	11問
学習の領域	●世話　●干渉　●授与	7問
その他の領域 ●手伝い ●約束ごと 他	●おこづかい　●性教育　●手伝い ●親の在宅 ●「きまり」の有無	6問
	●自己評価　●困っている領域 ●重視している領域 他	9問

(3) 調査の実施方法と時期

実施にあたっては、質問紙を直接、協力校に持参し、学校を通じて各家庭に配布し、回収した。実施時期は昭和55年９月下旬である。

3．分析の基本的な視点

結果の分析は、昨年度報告書と同様、基本的には(2)で説明した質問紙の構成に従って行った。

昨年度の報告書では、学年別、性別・兄弟の有無別・兄弟の位置別に見た傾向など、記入者の子どもの属性による分析に限定した説明のみに終っていたので、今回の報告書では、それ以外の条件、すなわち記入者（親）の地域・年代・学歴・職業・母親の職業の有無などの親の属性を中心に分析した。

なお、本来なら一つの質問項目に対する親の養育態度・行動と同じ傾向をもつ親が、他の質問項目にどのような養育態度・行動を示しているか、またその傾向はどうなっているかとか、昨年分析した子どもの属性に対する親の養育態度・行動と親の属性に対する養育態度・行動との相関関係とかのクロス分析が必要であったが、今回の分析にあたっては、親の属性別に、それぞれの質問項目に対する親の具体的養育態度・行動の数値を百分率で表わし、その傾向を見るにとどめた。

※ 表 記 方 法

文章及び図表の表記方法は下表のとおりとする。

	文章・図表の表記	分類
学歴	中卒	中学校卒（義務教育学校卒）
	高卒	高校卒（旧制中学校・新制高校を含む）
	短大卒	短大・高専卒
	大卒	大学以上卒（旧制高専を含む）
職業	管理的・専門的職業	管理的職業（管理的公務員、会社・団体の役員、等） 専門的・技術的職業（技術者、教育の職業、医療保健の職業、芸術家、芸能家、等）
	事務的職業	事務的職業（会計事務員、作業的事務員、運輸通信事務員、一般事務員、等）
	販売・家事サービスの職業	販売及び類似の職業　　家事サービスの職業
	保安・運輸・通信の職業	保安の職業（自衛隊、警察官、海上保安官、鉄道公安職員、消防署、守衛、監視員、等） 運輸・通信・公益供給の職業（鉄道機関士、自動車運転手、通信の職業、等）
	農業・林業・漁業の職業	農業、林業及び類似の職業（農耕、養蚕、養蜂、林業の職業、等） 漁業の職業
	技能工・生産工程・単純労働・採石等職業	技能工、生産工程の職業（金属材料製造、加工、組立、印刷製本、飲食料品製造、建築業、等）　単純労働の職業　採掘・採石の職業
	その他	その他

第１章　子どもの基本的生活習慣に対する親の養育態度・行動の実態

基本的生活習慣（食事や着脱衣・睡眠等々に関する習慣）の確立は、社会生活を送るうえでの基本的な問題であると同時に、人間の発達にとって非常に重要な意味をもっている。

それは、子どもが単に身のまわりのことを自分自身ですることができるようになるということだけではなく、そうした行動を通じて、社会に生きる人間としての基本的な行動様式を学習していくことを意味しているからである。

ところで、こうした基本的生活習慣の確立は、子どもの発達段階からみて幼児期末までにかなり身につくといわれている。したがって、小学生段階になれば、少なくとも、基本的生活習慣に関する限り自分自身で十分できるはずなのである。

ところが、昨年（55年度）の報告書で明らかにしたように基本的生活習慣に関する事がらを自分自身で行っている子どもは、極めて少数であった。ほとんどの場合、親がこれに手をかしているのである。つまり、基本的生活習慣に関して、親の関与のしすぎがかなり明らかなのである。

それでは、こうした基本的生活習慣に対する親の関与のしかたは、親の属性によって違いがあるのであろうか。ここでは基本的生活習慣のさまざまな側面について検討してみることにしよう。

１．世話の実態

ふとんのあげおろし、着がえの準備、整理整とん等々といった日常生活のなかで比較的習慣的な行動であるとされる事がらについて、親はどのようなかたちで関与しているのであろうか。親のもつさまざまな属性からこの点を検討してみよう。

地域別にみた場合、こうした日常的な行動への親の関与のしかたに、地域差はほとんどない。一例として、朝子どもを起こしてやる親の割合をみてみるといずれの地域についても、母親が６割近く、父親が２割程度といった具合である。

親の年代別の特徴をみてみると、父親については「20代」の者が他の世代の父親と比べた場合、世話をしている割合がやや高いようである。ちなみに、着がえの準備に関する図１－１をみると、「20代」では「よくある」、「時々ある」を合わせて16.7％であるが、「30代」では11.6％、「40代」8.5％、「50代」9.7％といった傾向にある。つまり、若い世代の父親ほど子どもの世話をしているということである。

それでは、母親についてはどうであろうか。図１－２に示した父親と同じ質問項目の世話の実態をみてみると、やはりここでも「20代」の母親の割合が最も高くなっている。すなわち、「よくある」、「時々ある」を合わせて、「20代」70.4％、「30代」54.6％、「40代」44.7％、「50代」51.5％といった具合に並んでいるのである。もっとも、若い世代の方が、子どもの学年段階が低いであろうし、その分世話をする割合が高いということもあり得よう。

図１－１

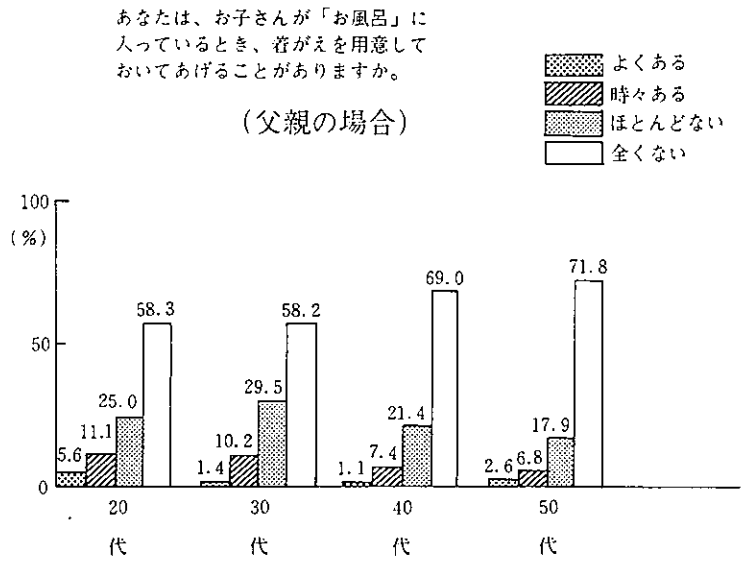
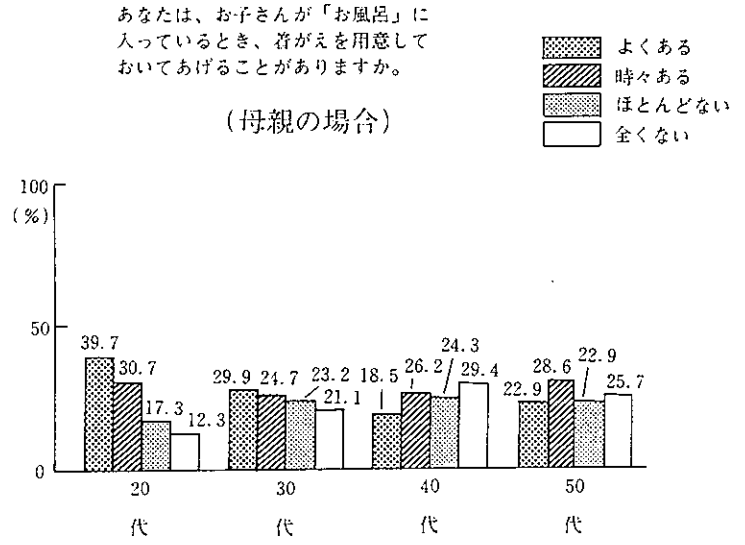


図１－２



次に、学歴による差異があるのかどうかみてみよう。父親、母親ともに、学歴による違いは全くない。一応参考のために、子どもが起きた後、ふとんのあとしまつ（ベットのあとしまつ）をした者の割合を図１－３と図１－４に示しておいた。いずれの学歴をみても、父親の場合は10％程度、母親の場合は55％程度が、これに関する世話をしているようである。

それでは職業による差異はあるであろうか。親の職業を一応７つに分類し、世話の程度が異なるのかどうかをみてみよう。結論から先にいえば、職業による違いは全くない。ちなみに図１－５に子どもが学校に行く準備を親がどの位手伝っているのかを示したものである。

図１－３　あなたは、今朝お子さんのふとんをたたんだり、押入れにあげたり（ベットの場合はふとんのあとしまつ）してあげましたか。

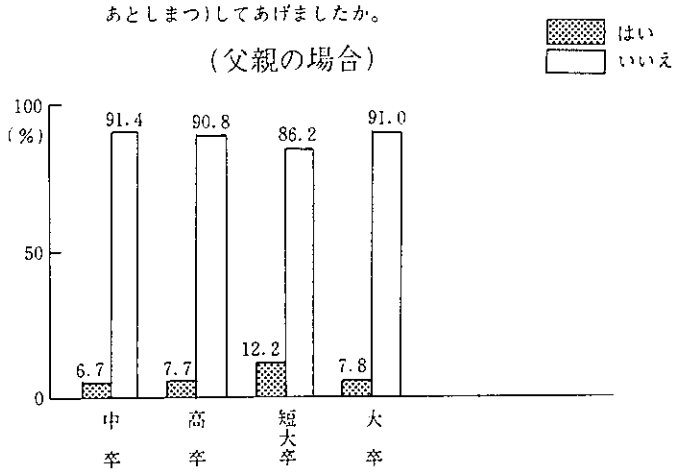


図１－４　あなたは、今朝お子さんのふとんをたたんだり、押入れにあげたり（ベットの場合はふとんのあとしまつ）してあげましたか。

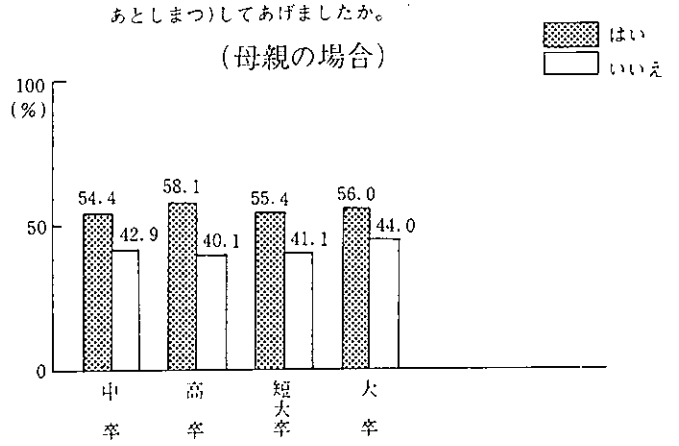
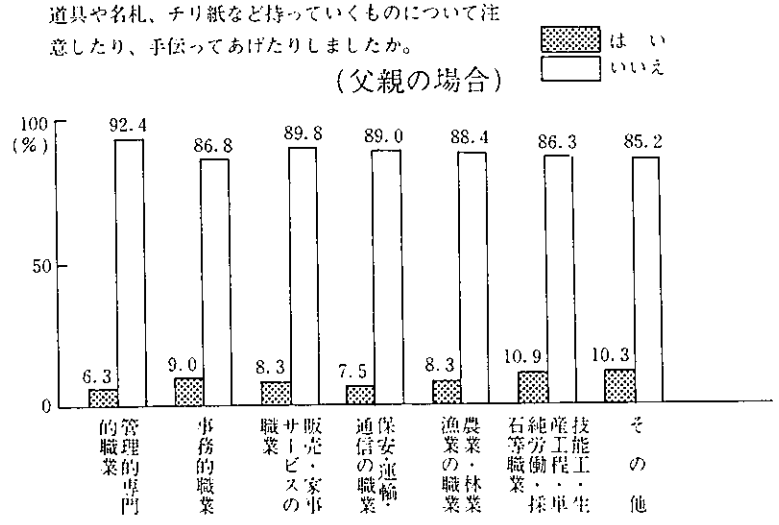


図１－５　あなたは、今朝お子さんが学校に出かける前、勉強道具や名札、チリ紙など持っていくものについて注意したり、手伝ってあげたりしましたか。



さらに、母親の職業の有無、例えば「主婦専業」であるとか、「パート」の仕事をもっているとか、ないしは「専業の仕事」をもっているといった違いが、子どもの世話に差異をもたらしているのかどうかをみてみよう。いずれの項目をみても、世話をしている割合は、「主婦専業」が最も高く、次いで「パート」、「専業の仕事」をもっている者といった順位で並んでいる。しかし、この世話をしている割合の差異も際立って大きいというわけではなく、「主婦専業」と「専業の仕事」をもっている者との割合の差異は、最大14.4%といった程度である。一応、この差異の最も大きいふとんのあとしまつ（ベットのあとしまつ）に関する世話の実態を示したのが図1－6である。

最後に、子どもの成績に関しては、親が子どもの成績を「下位」と思っているグループの父親、母親の方が、より子どもの世話をしている傾向が強いようである。参考までに、就寝前のふとん・ベッドの整理について、母親がどの程度これに関与しているのかを示したのが図1－7である。

図1－6

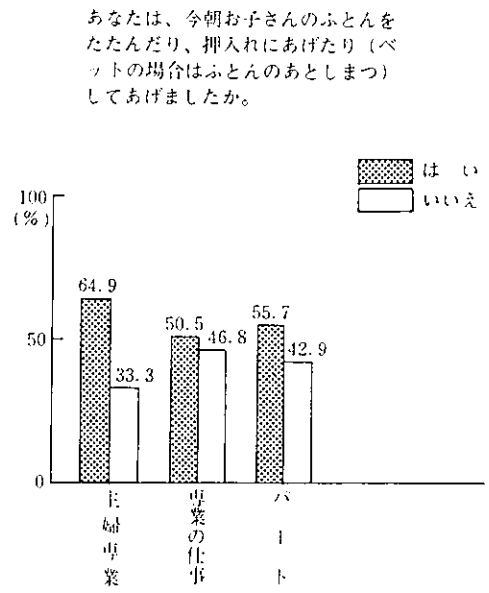
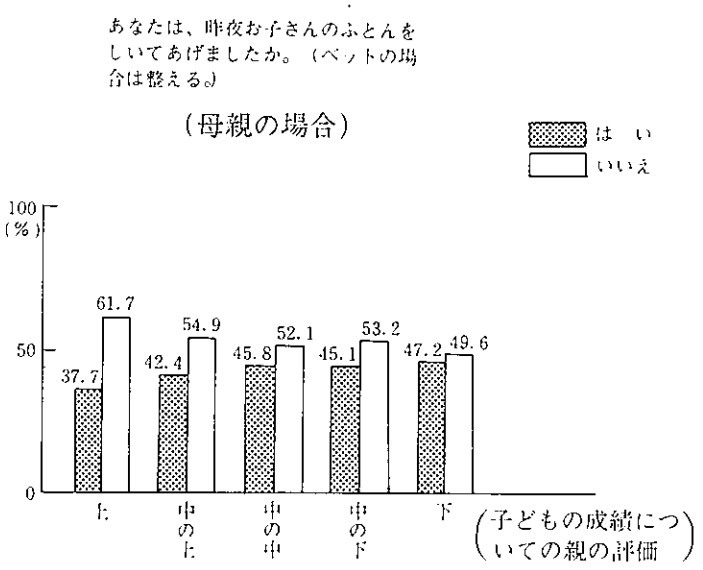


図1－7



2．授与の実態

子どもが特に要求していないにもかかわらず、ものを与えると答えた親は、「母親」78.0%、「父親」44.5%といった具合である。

子どもが要求していないにもかかわらず、これだけのものを与えているのであるから、要求すればどの程度になるかはおよそ推察がつく。それでは、こうした子どもへの授与に関して、親の属性別の差異はみられるのであろうか。

なお、これに関しては地域差、父親の職業による差異、及び子どもの成績についての親の評価による違いはほとんど認められない。

図１－８

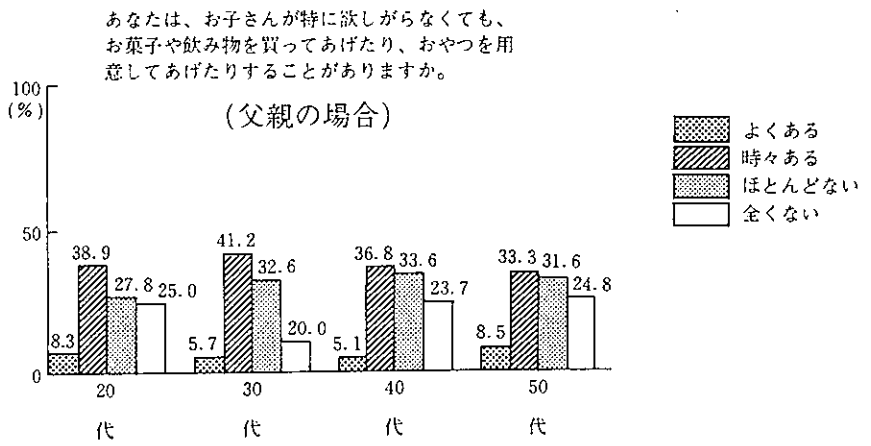


図１－９

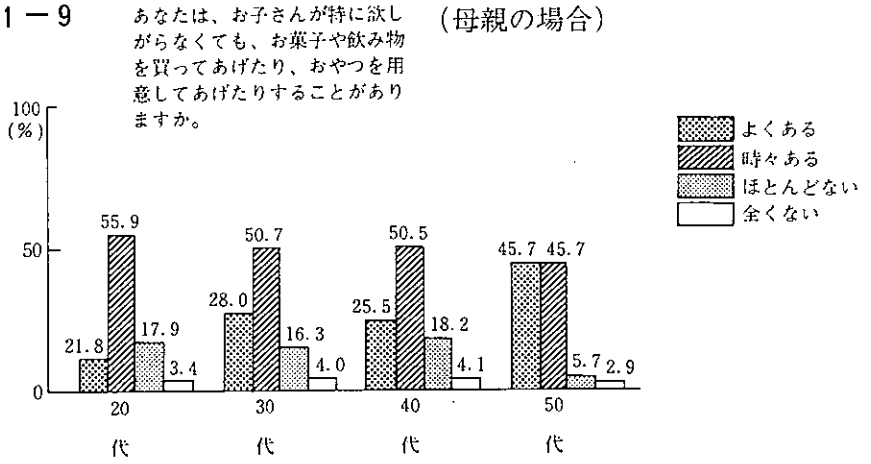
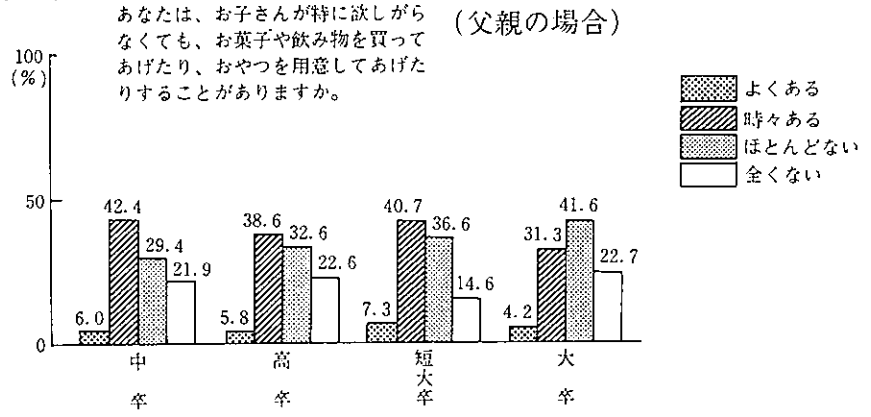


図１－10



親の年代別にみてみよう。図１－８は父親の年代別、図１－９は母親の年代別に示した授与の実態である。

父親の年代別の割合をみると、若い世代ではものを与える傾向がやや強く、「40代」・「50代」では低下する傾向がある。母親については、「20代」から「40代」までほとんど変わらず８割程度を占めている。しかし「50代」になると９割をこえている。

では、学歴についてはどんな傾向がみられるのであろうか。

これについては、図１―10と図１―11に示している。父親では、「中卒」「高卒」「短大卒」では、ものを与えることが「よくある」「時々ある」を合わせて４割台であるのに対して、「大卒」ではこれが３割台に低下している。しかし、母親の学歴別の差異は全く認められない。

また、母親が職業をもっているかどうかといった違いと、子どもへのものの与え方の実態について

図１―11

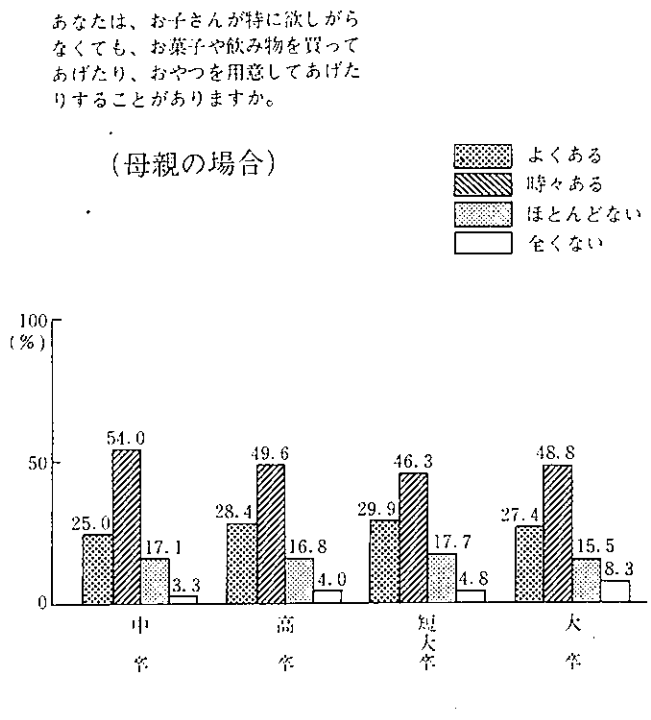
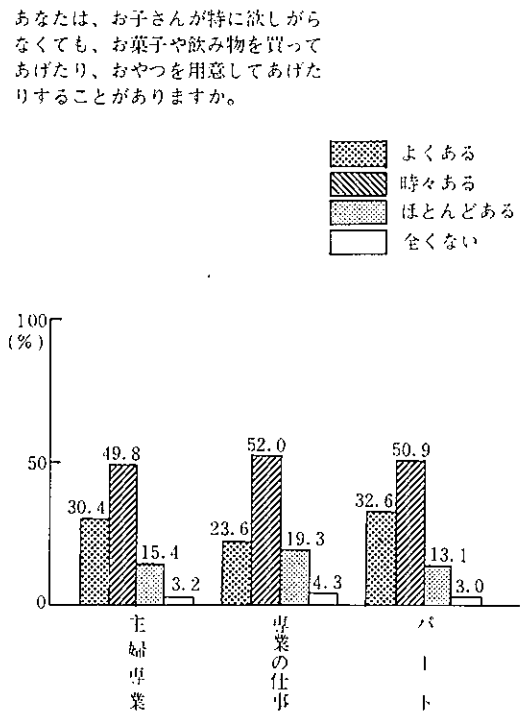


図１―12



は、「パート」の者が最も多く83.5%次いで「主婦専業」80.2%、そして「専業の仕事」をもっている者75.6%といった具合に並んでいる。「専業の仕事」をもっている者の割合が最も低いが、いずれにしてもかなりの子どもにものを与えている傾向の強いことは否定できないだろう。

３．受容の実態

子どもの様々な要求を親はどの程度受容しているのであろうか。むろん、子どもの要求といっても多様であろうが、要求の種類によっては、親がこれを無批判に受容することは好ましいものではない。

一例として、食事の際、子どもが食べ物に文句を言ったら仕方なく残させるかどうかみてみると、(図１―13)「父親」では「よくある」「時々ある」を合わせて41.1%、「母親」では49.4%もの者がこうした子どもの要求を受容している。食べ物の好き嫌いに対するしつけは、家庭教育のなかでもかな

り中心的な領域でもあり、しかも子どもの健康上の側面を考えれば安易に妥協すべき問題ではない。しかし、父親で4割以上、母親にいたっては半数もの親がこうした子どもの要求に妥協しているのである。

それでは、こうした子どもの要求の受容に対して親の属性別の差異は見られるのであろうか。

まず、地域別にみてみると、図1—14、図1—15に示したような実態が明らかである。父親の「よくある」「時々ある」とを合わせた数値は、「都市団地」がやや低く、「過疎地域」が他と比べた場合や

図1—13

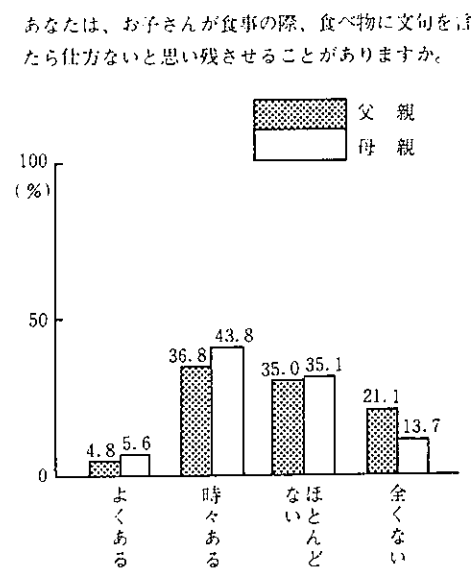


図1—14

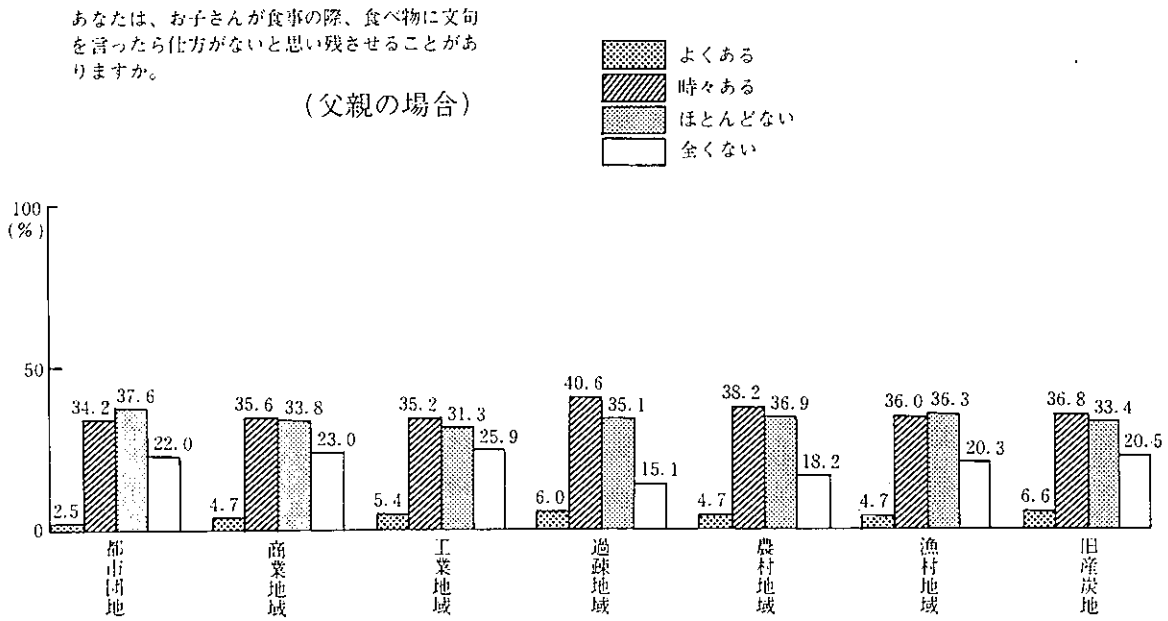
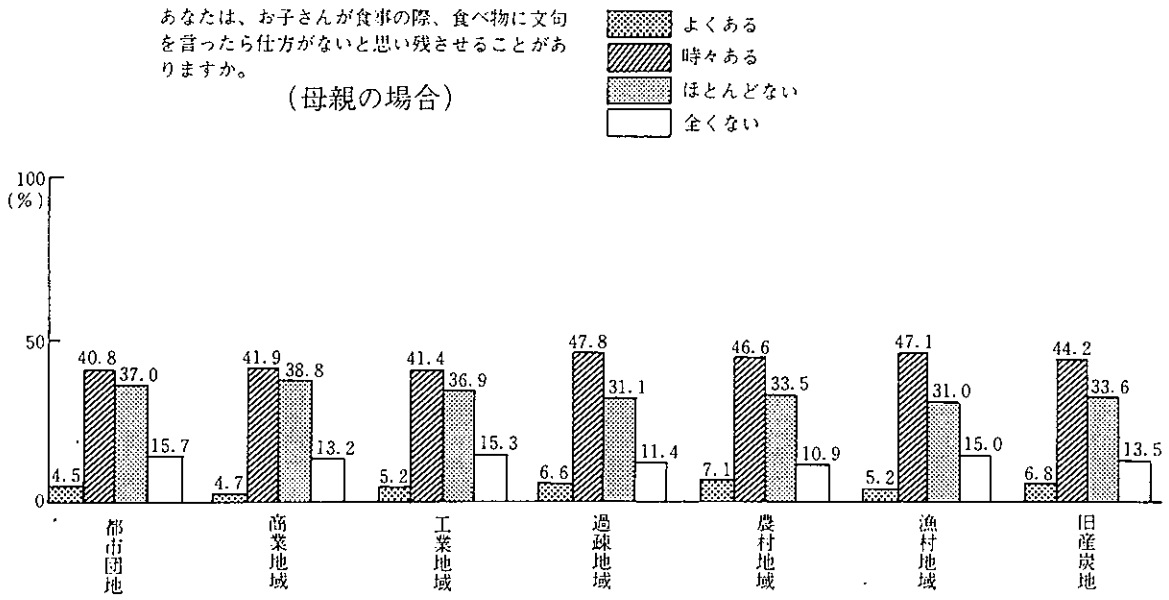


図１－15



や高い割合になっている。母親をみてみると、これまた「過疎地域」が最も高く、「よくある」、「時々ある」を合わせて54.4％となっている。次いで、「農村、漁村地域」といった具合に並んでおり、ここでも「都市団地」が最低の割合を示している。

こうした結果を全体的にみると、父母とも「都市部」より、むしろ「過疎地域」、「農村地域」、「漁村地域」といった「ローカル」な地域の方が子どもの要求を受容する傾向が強いようである。

年代別では、母親の側に世代の差異が全く見られない。これに対して、父親では、子どもの要求を受容する割合が最も少ないのは20代である。受容することが「よくある」、「時々ある」を合わせた数値を示しておくと、「20代」30.6％、「30代」40.2％、「40代」42.0％、「50代」45.3％、といった具合である。「20代」の父親にも厳しい姿勢をもって臨んでいる者が多いが、これは一般的に言って所得の程度も関係しているのではないかと考えられる。

学歴別でみると図１－16、図１－17に示したとおりである。父親、母親ともに「短大卒」、「大卒」が子どものこの種の要求を受容する者の割合が減少している。少なくとも、この結果に関する限り、「中卒」の親が子どもにとって最も「甘い親」ということになりそうである。

図１－16

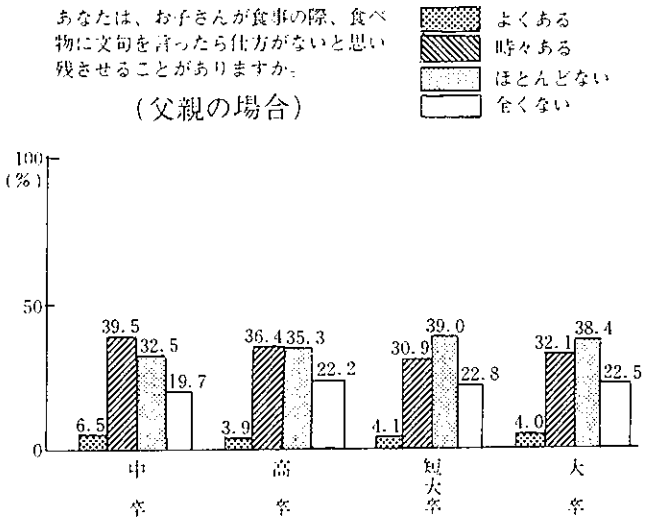
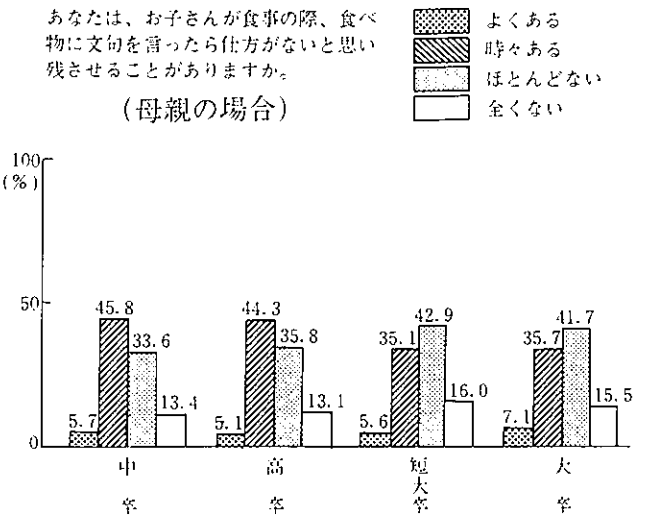


図１－17



職業別では、子どもの要求を受容している割合が「農業・林業・漁業の職業」が高く「管理的・専門的職業」及び「事務的職業」で低くなっている。一応職業別に、この割合（「よくある」、「時々ある」を合わせた数値）を示すと「管理的・専門的職業」36.8%、「事務的職業」38.7%、「販売・家事サービスの職業」42.6%「保安・運輸・通信の職業」44.5%、「農業・林業・漁業の職業」40.4%、「技能工・生産工程・単純労働・採石等の職業」41.8%といった具合である。

なお、母親の職業別及び子どもの成績についての親の評価による違いは全く認められない。

4．叱責の実態

食べ物を粗末にしたり、文句を言ったり、或いは残したりした時、何らかの指導が必要なことはいうまでもない。そして、そこには当然ある種の叱責が含まれることもあり得よう。そこで、こうした子どもの行為に対して叱っているかどうかを見ると「よく叱る」、「時々叱る」を合せて、「父親」では91.8%、「母親」は94.6%と、両親ともにその割合はかなり高い。それでは、これについて親の属性別の差異はどの程度みられるのであろうか。

まず地域別では、父親、母親とも差異はほとんどみられない。ただ、父親の場合、ほとんどの地域で、「よく叱る」、「時々叱る」を合せて90%をこえているのに対し、「過疎地域」だけが80%台に止まっている。すでに述べたように「過疎地域」では子どもの要求を受容する割合が最も高かったが、ここでも子どもに対する「甘さ」の一端がうかがえる。しかし、母親の側では、こうした差異は皆無である。

学歴別にみると、下の図１—18、図１—19に示したように、その差異が比較的明らかである。

図１—18　あなたは、お子さんが食べ物をそまつにしたり、文句を言ったり、好き嫌いしたり、残したりしたときしかっていますか。

（父親の場合）

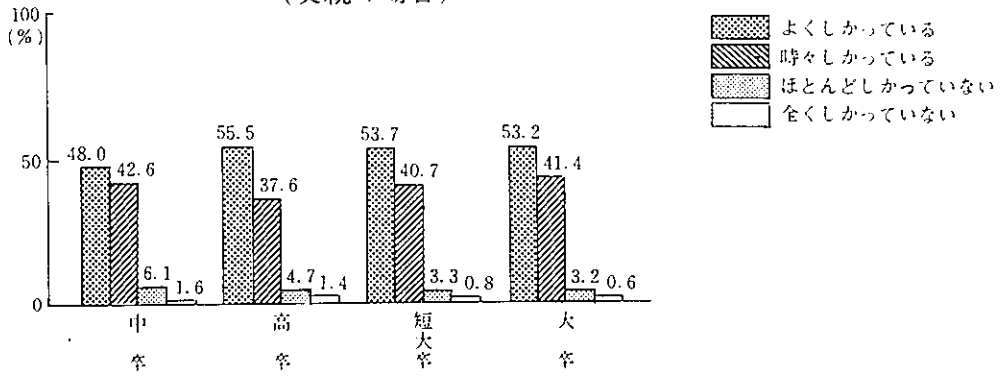
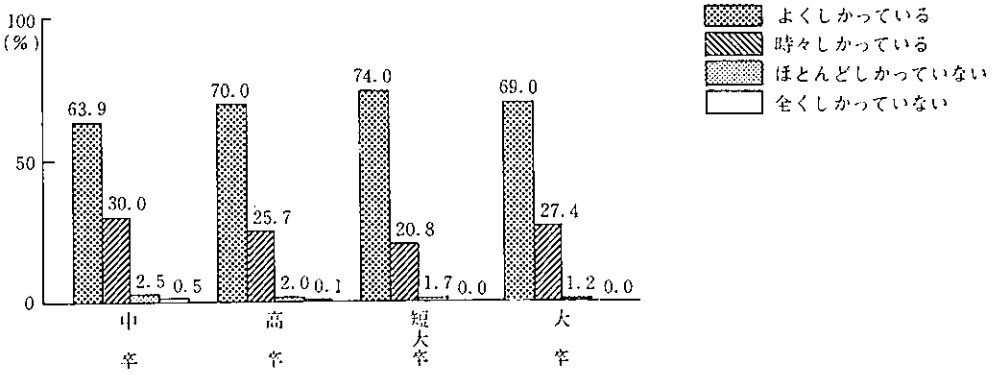


図１—19　あなたは、お子さんが食べ物をそまつにしたり、文句を言ったり、好き嫌いしたり、残したりしたときしかっていますか。

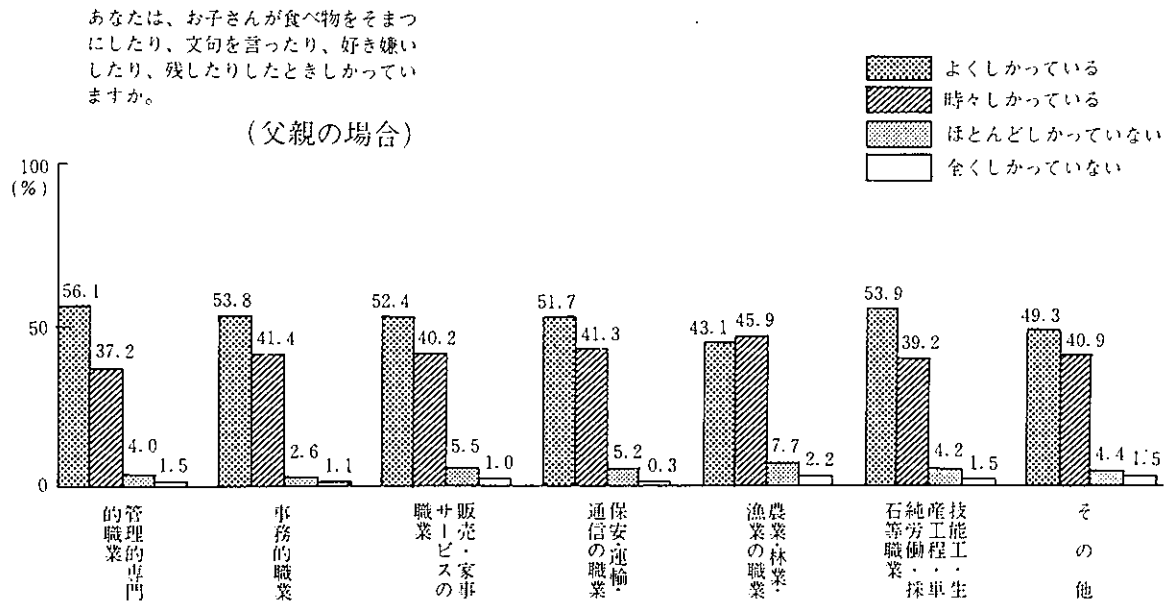
（母親の場合）



「よく叱る」、「時々叱る」を合わせた割合でみると、父親が「中卒」90.6%、「高卒」93.1%、「短大卒」94.4%、「大卒」94.6%といった具合に、その割合が増加している。母親の場合も全く同様の傾向にあり、「中卒」93.9%、「高卒」95.7%、「短大卒」94.8%「大卒」96.4%といった割合である。ここでも子どもに対する受容と同様の傾向がみられる。

また図１—20の職業別にみた場合も、子どもへの受容の傾向と比較的類似した傾向にある。というのは、子どもへの受容の割合が最も高かった「農業・林業・漁業の職業」が、最も子どもを叱っている割合が低いという結果がみられる。一応、「よく叱る」と答えた割合をみてみると、他の職業がいずれも50%をこえているのに対し、「農業・林業・漁業の職業」だけは43.1%に止まっているほどである。

図１－20



そして、「よく叱る」割合の高い職業は、「管理的・専門的職業」56.1％であり、子どもへの受容の割合が最も低い職業であることから子どもに厳しい親といえそうである。
の割合が高いといえそうである。

なお、こうした叱責の実態について、親の年代による違い、母親の職業の有無による違い、そして子どもの成績についての親の評価による違いは、ほとんど認められない。

５．本章のまとめ

基本的生活習慣の幾つかの領域について、親の関与のしかたに、親の属性別の差異がいかなる形で出ているのかをみてきた。

ここで、これまでの結果をまとめておこう。

先ず全体としてみる限り、基本的生活習慣に関する親の関与のしかたが、属性によって際立って違っているというようなことはない。むしろ、いかなる属性を持つ親であっても、こうした基本的生活習慣に関する事がらは、小学生になれば、十分自分でできるという前提にたてば、親の世話のし過ぎ、関与のし過ぎがかなり顕著であるといわざるを得ない。ただ、親の属性別の違いが全体的にそれほど大きくはないといっても、詳細に検討していくといくつかの特徴が明らかである。その一つは、親の年代による差異である。子どもの身の回りの事について、かなり世話をしているのは若い父親、母親である。しかし、ものを与えたり、子どもの要求を受容したりすることについては、年代が高い母親、父親の方が、どうも「甘い」ようである。より厳密にいえば、こういった傾向の背後にある、子どもの年齢、ないしは学年、そして親の所得の問題等を考慮すべき必要があることはいうまでもない。

また、子どもに対する授与、受容については、地域、学歴、職業による差異が若干認められる。こうした領域については、「ローカルな地域」より「都市部」の方が、「農業・林業・漁業の職業」より「管理的・専門的職業」、ないしは「事務的職業」の方が、そして「短大卒」、「大卒」の親の方が、厳しい親がやや多いようである。こうした差異がいかなる理由で出てくるのかについては今後の緻密な検討をまつほかはないが、少なくとも数値のうえでは以上のような傾向が明らかに認められるのである。

いづれにしても、どんな属性をもつ親をみても基本的生活習慣の幾つかの領域について子どもの世話をかなりしており、子どもにものを与え、子どもの要求を受容している親が大多数を占めていることは否定のしようもない。親だから当然といってしまえばそれまでだが、我々はもう一度子どもがすでに自分でできることを親がしてしまうことの問題を考う直す必要があると思われる。

第２章　子どもの遊びに対する親の養育態度・行動の実態

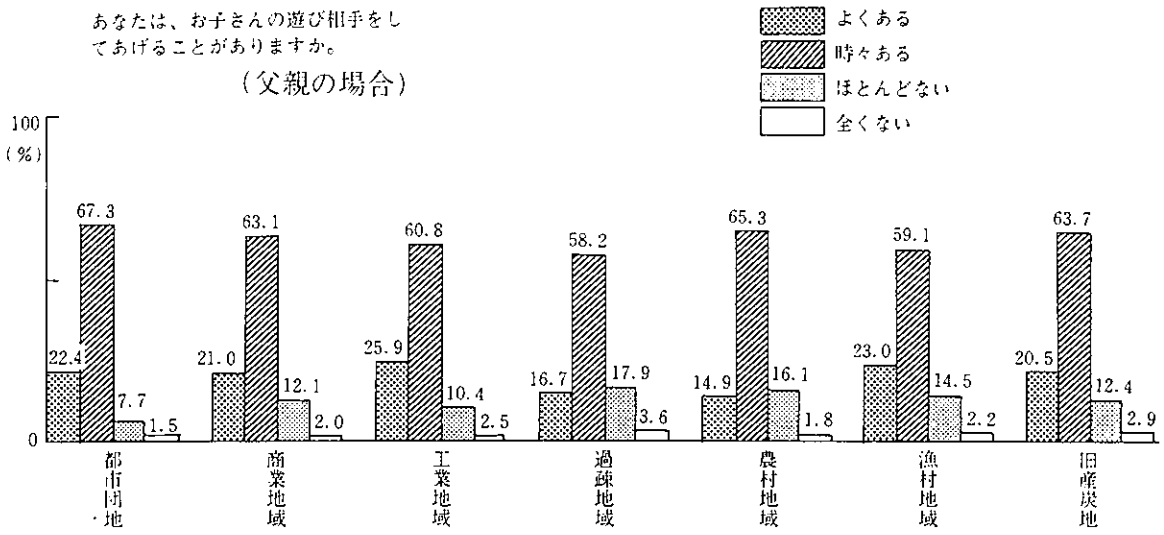
例えば、「子どもにとって遊びは生活そのものである」あるいは「子どもは遊びの中から生活の仕方を学ぶ」といわれるように、子どもが大人の世界から離れ、自主的・自発的な意志に基づいて、子ども同志で活発に遊びを実現していくことは、子どもの精神的・身体的・社会的諸能力の発達に極めて重要な意義をもっている。ところが、最近の子どもたちは「巣ごもり」あるいは「無遊病」などといわれるように、遊びの内容自体が変化するとともに、あまり遊ばない、遊べない状態になってきている。ある人は、遊び体験の不足が、運動能力の低下はもちろん、非行や暴力の一因をなしていると指摘している。この意味で、子どもの遊びに対する親の養育態度・行動のあり方は非常に重要な意義をもつと考えられる。

１．世話の実態

前回の報告で明らかにしたように、子どもの遊び相手をしている親の場合は、「よくある」、「時々ある」とを合わせてみると、父親83.9％、母親70.6％と、どちらも非常に高く、特に父親でそれが著しい。このことは子どもの属性として「ひとりっ子」や「長子」の場合にそれが顕著であったことからもわかるように、近年の核家族化により近隣や家庭自体での子どもの数が減少し、遊び相手が少なくなったこと、それに伴ない遊びの内容が質的に変化したこと、あるいは子どもの遊びへの親の介入の増大やそれに関する考え方の変化、などによるものと考えられる。ところが、母親よりも日ごろ接触の少ないはずの父親が高い割合であるというのは、父親が日ごろ子どもと触れ合いのないことの「罪ほろぼし」として遊び相手を心掛けていることによるのだろうか、あるいは、父親自身が「甘い父親」になってきたためであろうか。他方、母親の割合が父親より低いということは、もっと子どもの遊び相手をすべきであると思っているが、現実にはそこまで手がまわっていないという判断に基づくものであろうか。いずれにせよ、両親が子どもの遊びに積極的に関与し、それに強い関心を抱いていることは確かである。

これに関連して、子どもとよく遊んでいる両親の属性として、地域別では、父親、母親共に「過疎」や「農業地域」よりも「都市団地」や「工業地域」がかなり多い。（図２－１）

図２－１



年代別では、父親の場合、「30代」、「40代」また、母親では若い年代の者ほど、あるいは、仕事をもつ母親よりも「主婦専業」が、そして、学歴別では、両親共に「短大卒」、「大卒」の者、職業別では、「農業・林業・漁業の職業」や「技能工・生産工程・単純労働・採石等職業」よりも、「管理的・専門的職業」や「事務的職業」の者がいずれも遊び相手をする者が多く、その差は大きい。

この結果、特に生活時間が規則的で余裕のある者ほど子どもの遊び相手を多くしている、しすぎている傾向にあることが指摘される。

次に、「子どもが家に友だちを連れてきて遊んでいる時、お菓子や飲み物を持って行ってあげる」という世話をみると、「必ず」、「だいたい」持っていくを合わせると母親で５割、父親では１割以下あった。接触機会の多い母親が高いことは当然であるが、母親の学歴などでは差がなく、子どもがひとりっ子、「工業地域」（図２－２）、高い年代、（図２－３）、「主婦専業」の母親、などでかなり世話をしている割合が高い。

図２－２

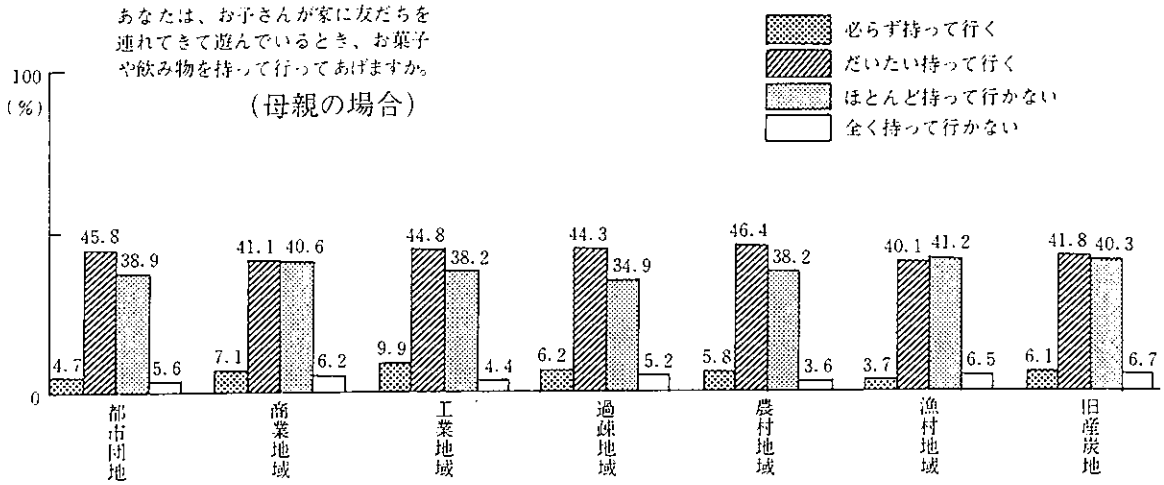
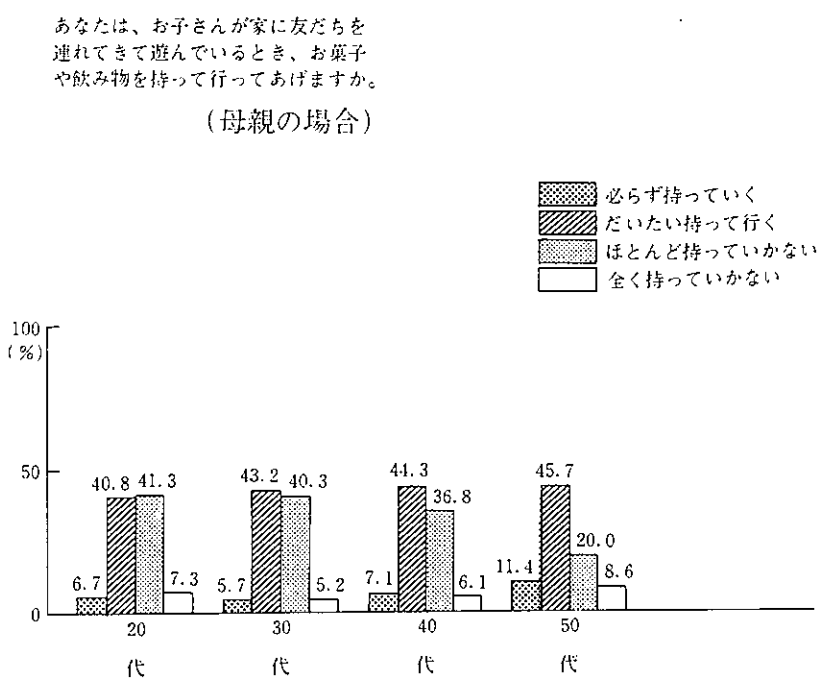


図２－３



この実態は、子どもがひとりっ子で大事と思うほど、また母親が時間的に余裕があるほど世話をしていることを示すが、このような世話は、子どもの友だちを「お客様」として「接待」し、さらに子どもたちの「社会」を監視し、介入するという可能性をもっている、という点でそのいきすぎに注意する必要がある。

最後に、「子どもがいつも見ているテレビ番組を忘れて遊んでいる時、『○○が始まったよ』などと教えてやる」親の割合をみると、この割合は、先の二つの項目より低くなっている。しかし、それでも前回の報告で明らかにされた、母親の３人に１人、父親の４人に１人がテレビ番組の開始を教えているという事実は、注目に値しよう。子どもがテレビを忘れるほどに自主的・積極的に遊びに没頭しているのをテレビという受動的・消極的な行動に変えるべき必要があるのかどうか疑問であり、またそれを知らせるのはあまりに「親切すぎる」とも考えられる。

両親の属性でみると、それを教えてやる親の割合は、まず地域別には「農村地域・漁村地域」や「過疎地域」よりも「旧産炭地」・「都市団地」・「工業地域」などの親ほど、年代別には「20代」の若い年代ほど、学歴別には「大卒」の親より「中卒」の親ほど、職業別には「農業・林業・漁業の職業」や「管理的・専門的職業」より「事務的職業」や「技能工・生産工程・単純労働・採石等職業」、「保安・運輸・通信の職業」の親ほど、それぞれ顕著であり、それは父親と母親に共通している。

図２－４

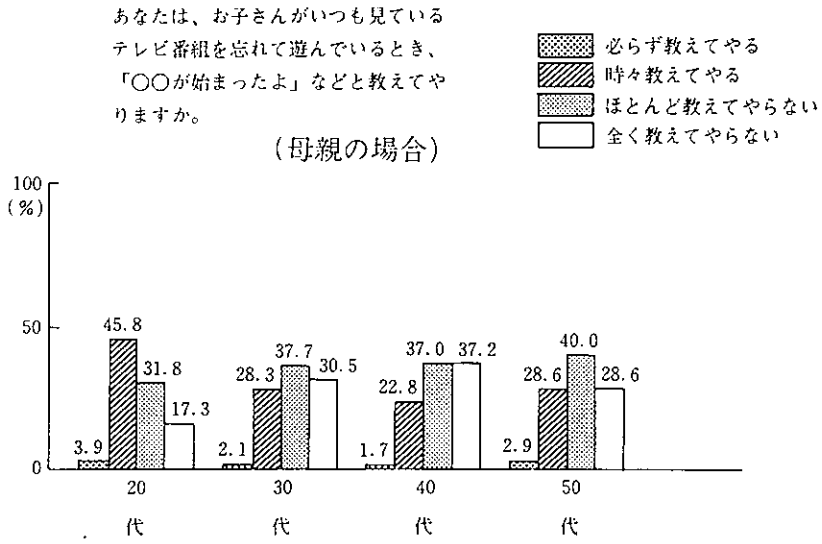
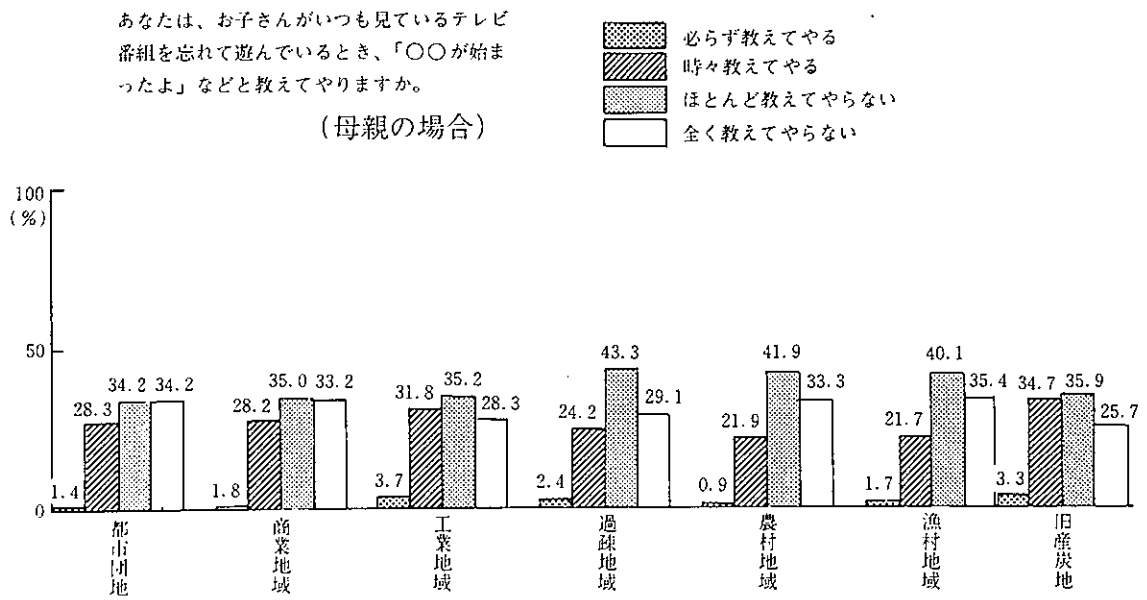


図２－５



特に図２－４、図２－５に示されるように、年代別と地域別の差異が大きく、母親の場合、「40代」24.5％に対し「20代」で49.7％、「農業地域」22.8％・「漁業地域」23.4％に対し「旧産炭地」38.0％・「工業地域」35.5％である。このように両親の属性により大きな差があるが、「20代」などの「テレビ番組の開始」を知らせることの多い親は、子どもに対して「世話のやきすぎ」と同様に、親自身が「テレビにふり回された」生活であることを示すものであろう。

なお、これらの世話の実態を子どもの成績別でみると、父親・母親共に、成績が「上位」と思っている子どもの親ほど子どもの遊び相手をし、友だちにお菓子などを与え、またテレビの開始を知らせる傾向が強い。

2．授与の実態

前回の報告によると、「子どもが特に欲しがらなくてもオモチャやマンガの本などを買ってあげる」親の割合は、「よくある」、「時々ある」を合わせてみると、「父親」27.1％、「母親」13.5％と、父親がかなり高かった。この父親と母親のちがいについては、さらに父親は長子に、母親はひとりっ子にオモチャなどを与える傾向が強い(従って、甘い)ことが認められたが、特に興味深いことは、「オモチャなど」については、母親より父親の方が甘いのに対して、第３章での「勉強に関係あるもの」においては、「父親」33.2％に対し「母親」45.8％と、逆に母親の方が甘いことであった。この差異により、両親の間の関心の差異をみることができるが、遊びにかかわるものの授与によって「子どもの歓心を買う」態度という点では、母親より父親が甘く、今日よく言われる「甘い父親」の一面をみることができる。

この実態を両親の属性によってみると、学歴別では著しい差異はないが、地域別、年代別、職業別などではかなりの違いがある。

まず地域別では、母親より父親でその差が顕著であり、特に「旧産炭地」や「漁業地域」の父親の授与の比率は、「過疎地域」や「工業地域」の父親よりもかなり高い。(図２－６)

次に年代別では、母親では差はないが、父親の場合、「20代」の父親44.5％をはじめ若い年代ほど授与の割合が高い（図２－７)。

そして職業別には、父親、母親共に、「技能工・生産工程・単純労働・採石等職業」など、あるいは「保安・運輸・通信の職業」などに従事する親は他の職業の親に比べて、授与がやや高く、これに関連してパートをもつ母親が「主婦専業」の者よりやや高い。

図２－６　あなたは、お子さんが特に欲しがらなくても、オモチャやマンガの本などを買ってあげることがありますか。

（父親の場合）

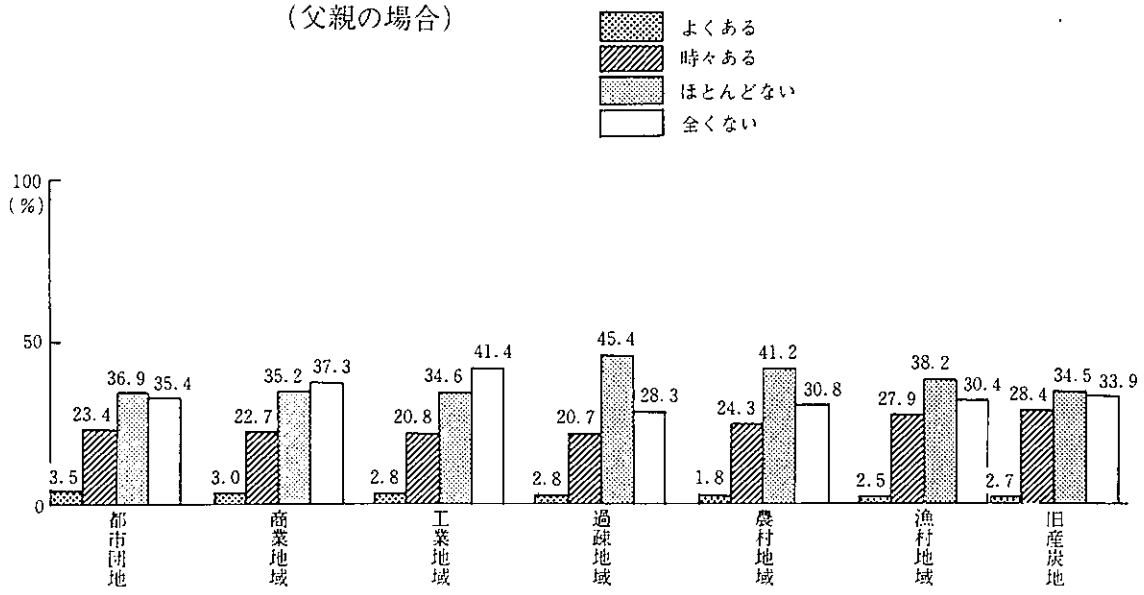
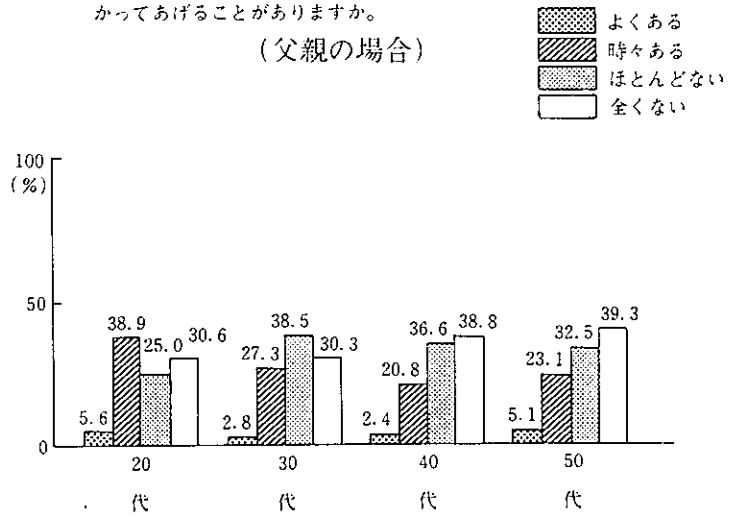


図２－７　あなたは、お子さんが特に欲しがらなくても、オモチャやマンガの本などをかってあげることがありますか。

（父親の場合）



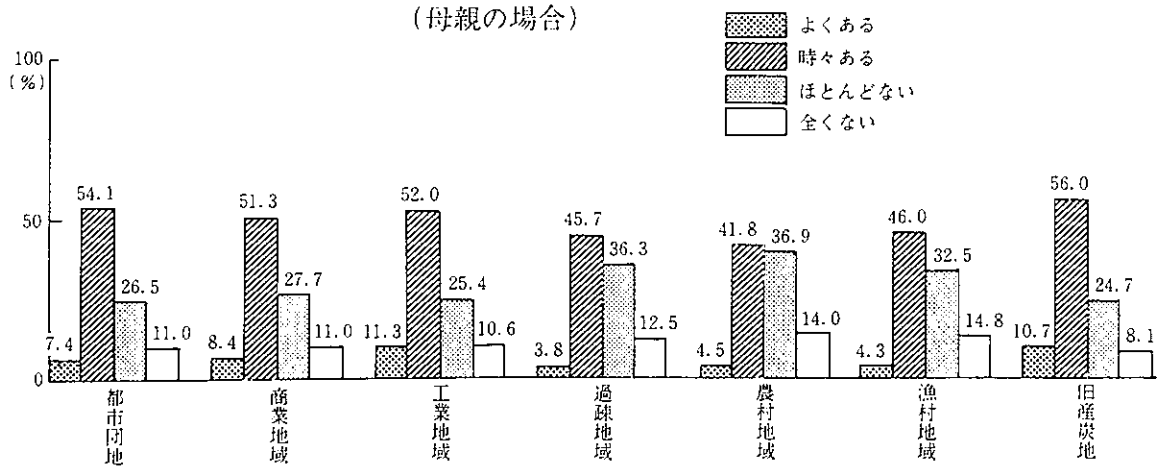
しかし、このような父親と母親における個々の属性別差異よりも、前記の父親と母親の間の差異の方が大きいことが繰り返し指摘されてよいだろう。

次に授与に関する他の質問、つまり「子どもが要求しなくてもレジャー施設やデパートなど喜びそうなところに連れていってあげる」親についてみてみよう。図２－８はこの結果である。父親・母親共に、子どもを連れていく割合は、「旧産炭地」が約７割と非常に高く、そして「都市団地」や「工業地域」のそれもかなり高い。しかし、職業的特性のためか、「農業地域」や「過疎地域」ではその割合は２人に１人以下にすぎない。

年代別にみると、父親、母親共に、「20代」の親の「連れていく」割合が著しく高く、「よくある」、「時々ある」を合わせると、「父親」では72.3％（４人に３人）、「母親」では66.4％（３人に１人）である。この比率は「30代」・「50代」・「40代」の順に低下しているところから、概して年代が高くなる

図２－８　あなたは、お子さんが特に要求しなくても遊園地などのレジャー施設やデパートなど、お子さんの喜びそうなところへ連れていってあげることがありますか。

（母親の場合）



につれ、連れていく割合が低下しているといえる。図２－９は、年代別にみた母親の場合である。

学歴別には、父親・母親共に、「短大卒」の親が連れていく比率が最も高く（父親７割、母親６割弱）、これに次いで「高卒」が高い。逆に「中卒」と「大卒」のそれはやゝ低いが、特に、「中卒」の父親と「大卒」の母親は著しく低い（図２－10）。

職業別にみると、父親では「管理的・事務的職業」あるいは「技能工・生産工程・単純労働・採石等職業」、「事務的職業」の親で子どもを連れていく割合がかなり高いが、逆に「農業・林業・漁業の職業」の親のそれは著しく低い（44.8%）。母親においてもほぼ同様の傾向である（図２－11、図２－12）。母親の職業の有無別では、「主婦専業」の親が「パート」や「専業の仕事」をもつ親に比べてやや高い割合である。

図２－９

あなたは、お子さんが特に要求しなくても遊園地などのレジャー施設やデパートなど、お子さんの喜びそうなところへ連れていってあげることがありますか。

（母親の場合）

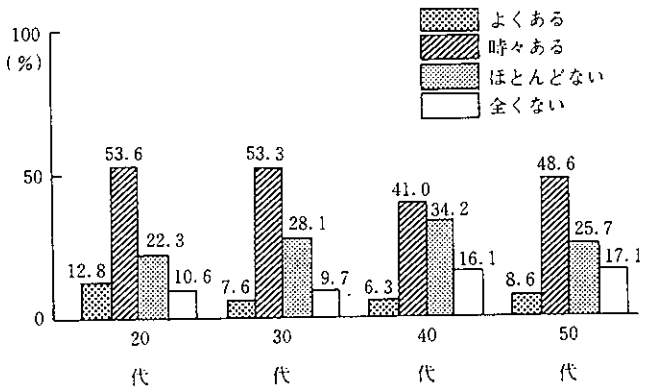


図２－10

あなたは、お子さんが特に要求しなくても遊園地などのレジャー施設やデパートなど、お子さんの喜びそうなところへ連れていってあげることがありますか。

（母親の場合）

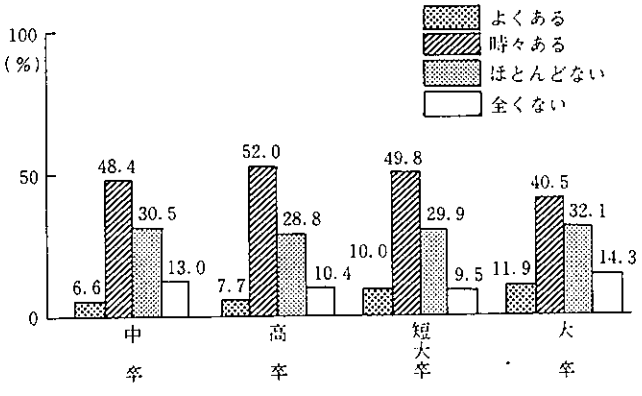


図２－11 あなたは、お子さんが特に要求しなくても遊園地などのレジャー施設やデパーなど、お子さんの喜びそうなところへ連れていってあげることがありますか。

（父親の場合）

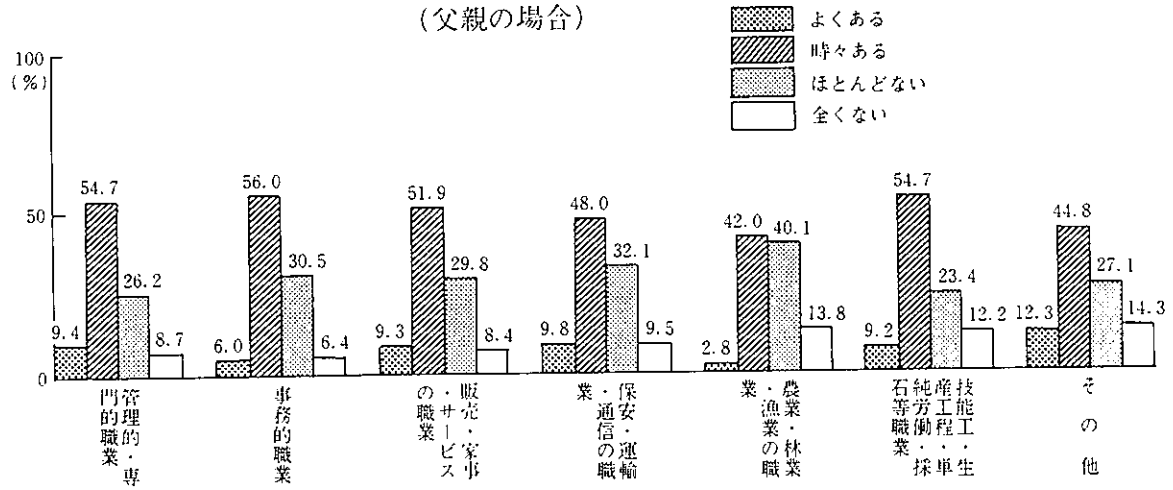
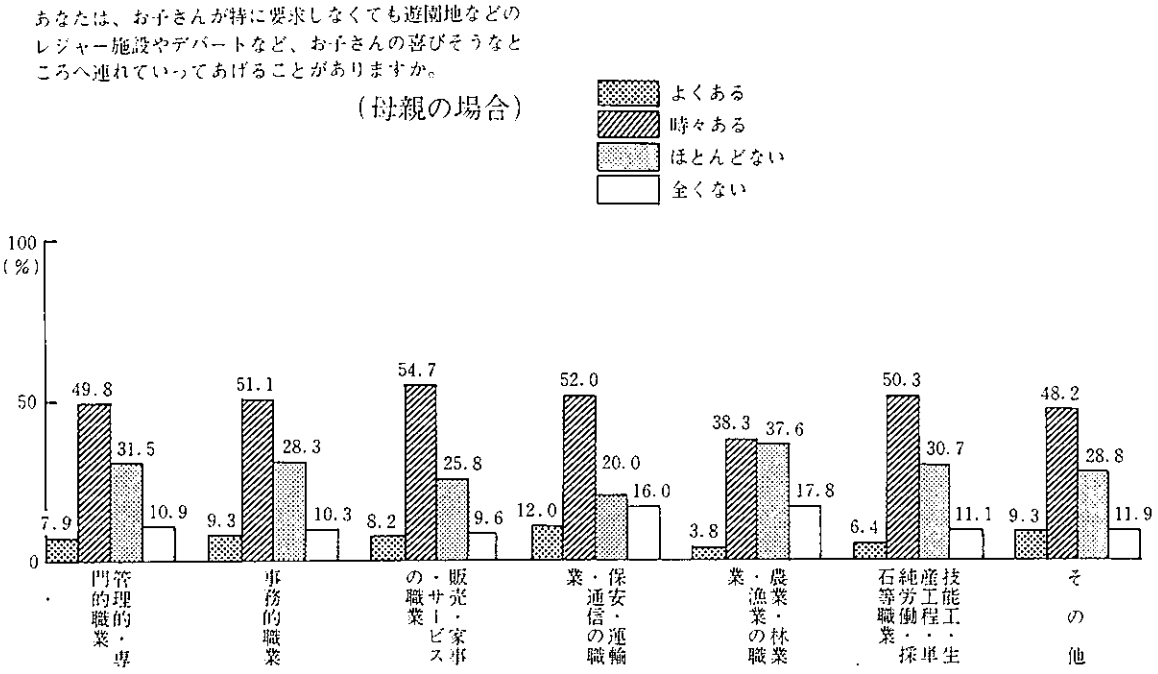


図２－12



以上、二つの質問項目によって授与の実態をみたが、要約すると、母親よりも父親の方が授与の頻度・程度が高く、以下同様に、子どもが低学年である親、ひとりっ子や長子の親、そして両親の属性については、年代別には「20代」、職業別には「管理的・専門的職業」、地域別には「旧産炭地」や「都市団地」の居住者などがいずれも授与の程度が高い傾向にある。

なお、このような授与の実態を子どもの成績別にみると、「オモチャなどを買う」ことは、親が成績が「中位」と思っている子どもの親ほど、一方「レジャー施設などに連れていく」ことは、成績が「上位」にあると思っている子どもの親ほど、それぞれの割合が高い。

3．叱責の実態

すでに、子どもに対して親が世話や授与をしすぎる傾向にあることが示唆された。しかし逆に、子どもが遊びすぎ、やらねばならないことを忘れた場合、親はどんな態度をとっているだろうか。子どもを積極的に遊ばせることと同様に、遊びにけじめをもたせ、そして必要ならはっきりと叱責することも不可欠であろう。このような遊びにかかわる叱責の実態を、二つの質問項目の結果に基づいて検討したい。

まず、「遊びすぎて宿題などを忘れてやらなかった」場合、前回の報告では、注意したり叱ったりする親は、「よくある」、「時々ある」を合わせて、「父親」は77.7％、「母親」では83.7％であった。一方、「遊びすぎて手伝いなどを忘れてやらなかった」場合のそれは、「父親」では71.9％、「母親」では81.1％である。つまり両方共、父親よりも母親の叱責が多くなっている。（図２－13、図２－14）

図２－13

あなたは、お子さんが遊びすぎて宿題など、勉強を忘れてやらなかったとき、しかったり強く注意したりすることがあります。

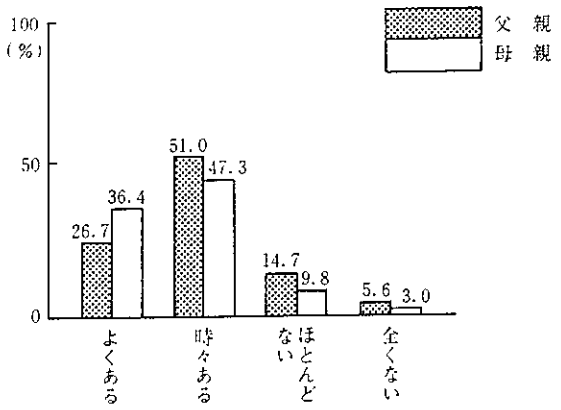
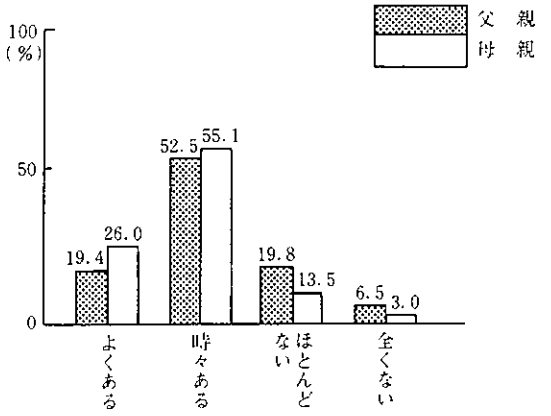


図２－14

あなたは、お子さんが遊びすぎて手伝いなどきめられたことを忘れてやらなかったとき、しかったり、強く注意したりすることがあります。



これは子どもへの接触は母親が多いことによるとも考えられるが、それだけでは世話や授与については母親より父親が高いという結果と矛盾している。その意味では、この叱責に関しても母親より父親の方が「甘い」ということができる。一方、前回の報告から特に注目しておくべき点は、子どもが遊びすぎて宿題や手伝いなどを忘れても父親の２～３割、母親の２割弱は「全く」あるいは「ほとんど」注意や叱責をしていないということ、換言すれば、それらをはっきりと注意し叱る親は、わずかに２～３割程度にすぎないということであった。さらにいえば、宿題を忘れた場合と手伝いなどを忘れた場合とでは、叱責の態度が異なることも、親の態度に一貫性がないという点で問題があろう。

さて、両親の属性でみた場合、実態はどうであろうか。

まず、地域別でみると、父親・母親共にほぼ共通して「過疎地域」や「農業地域」で叱る割合がや、高く、逆に「都市団地」や「商業地域」の親が低くなっている。その他の地域では一貫した傾向はあまり認められない。なお前記の傾向は、宿題や勉強よりも手伝いなどの決められたことを忘れた場合において顕著であるが、それは「都市団地」や「商業地域」の親（特に父親）は手伝いなどを忘れてもあまり厳しく叱らないことを意味するものである。（図２－15）

図２－15　あなたは、お子さんが遊びすぎて宿題など勉強を忘れてやらなかったとき、しかったり、強く注意したりすることがありますか。

（父親の場合）

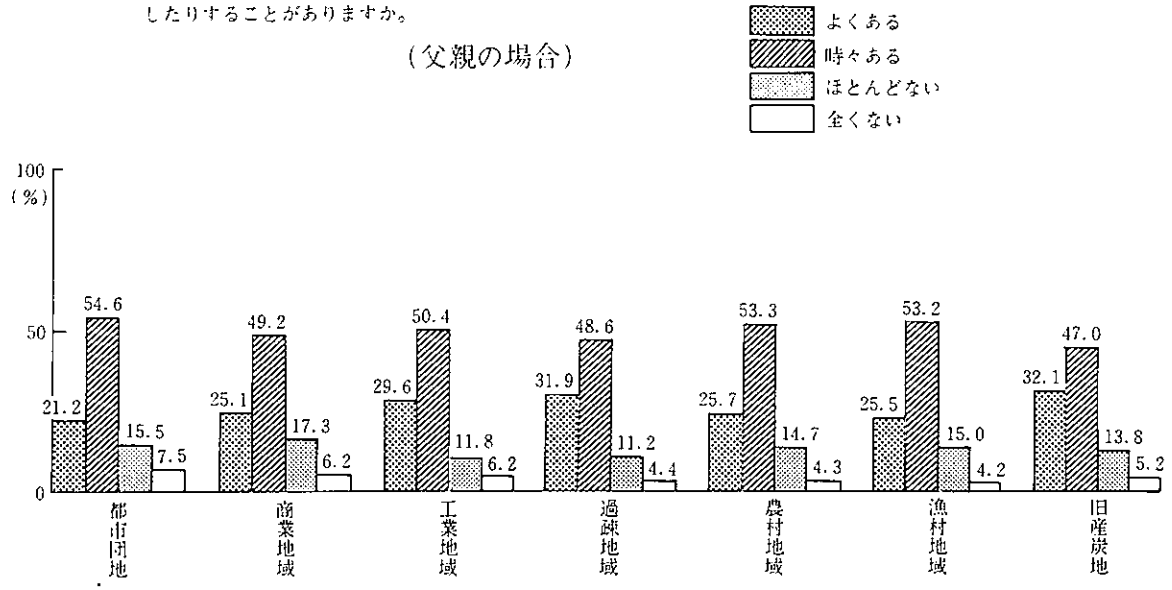
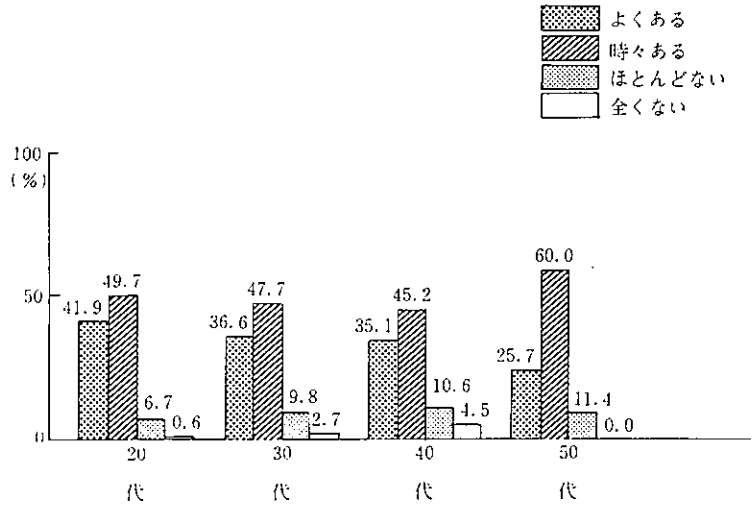


図２－16　あなたは、お子さんが遊びすぎて宿題など勉強を忘れてやらなかったとき、しかったり、強く注意したりすることがありますか。

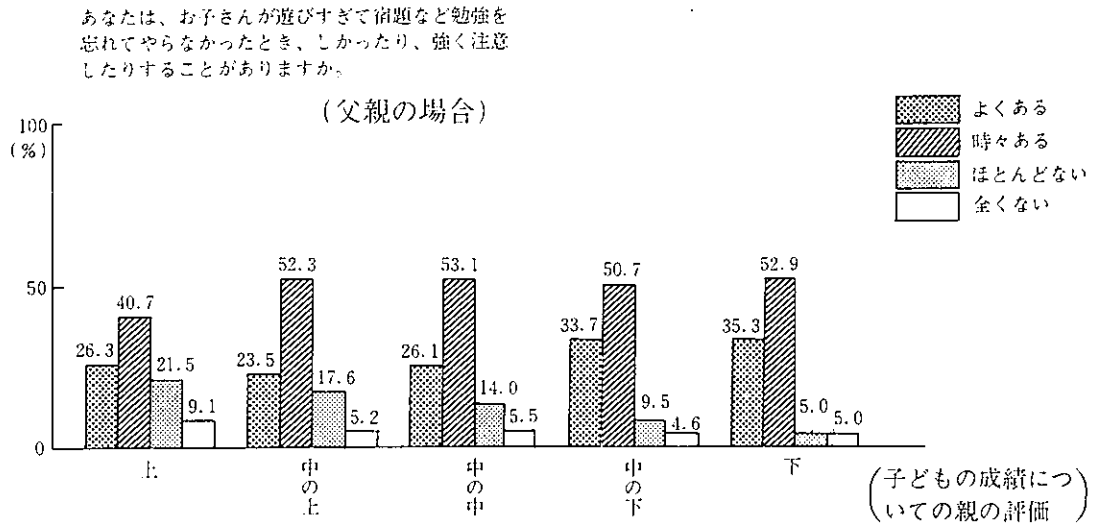
（母親の場合）



次に年代別にみると、まず父親では、「20代」の親で手伝いを忘れた場合の叱責がや、少ないが、概して年代差は少ない。一方母親では、図２－16のように、例えば「20代」の親では宿題の場合９割以上が叱るように、「40代」や「50代」に比べると「20代」など若い世代が、特に手伝いよりも宿題や勉強を忘れた場合に叱責することが著しく多い。もっとも、「40代」以上の母親があまり叱らないとみるべきか、若い母親が宿題や勉強を重視しすぎているとみるべきかは、議論の分かれるところであろう。

学歴別には、「高卒」の父親はかなりよく叱るが、逆に「短大卒」の母親はあまり叱らないこと、そして宿題などを忘れた場合には「中卒」、「高卒」の親の叱責がや、多いこと、などが指摘されるが、それらの差はいずれも少ない。

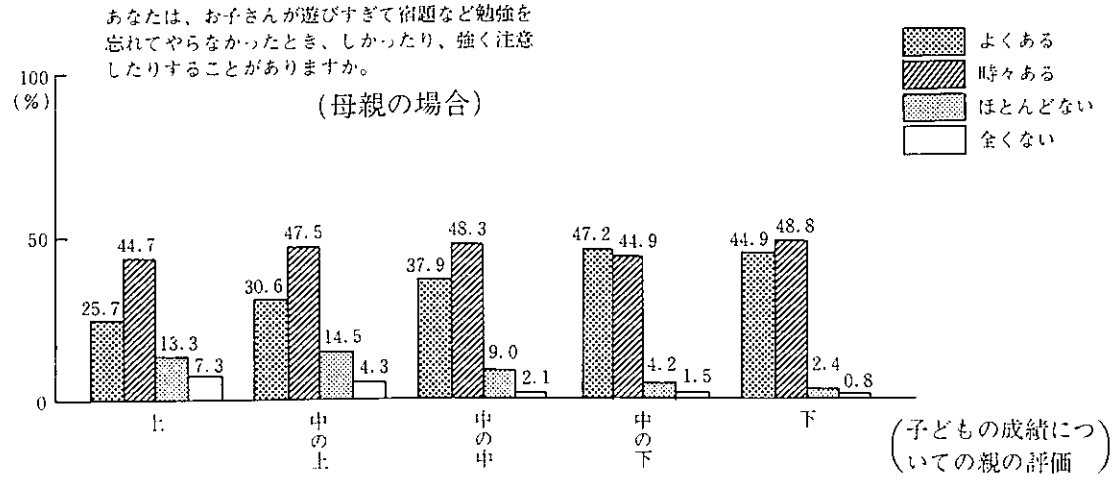
図２－17



さらに、職業別にみると、父親の場合、宿題と手伝いの両方において、「事務的職業」、ついで「管理的・専門的職業」の親の叱る割合が高く、逆に「販売・家事サービスの職業」の親でそれが低い。一方、母親の場合も同様な傾向がみられるが、「管理的・専門的職業」や「事務的職業」の親の叱る割合がより著しい。また母親の職業の有無別でみると、「よくある」、「時々ある」を合わせた場合にはまったく差はないが、「よくある」のみでは、宿題および手伝い共に、「専業の仕事」、「パート」、「主婦専業」の順にやっ叱る割合が高い。

最後に、子どもの成績別に両親の叱責の程度をみると、図２－17、図２－18のように、「宿題や勉強を忘れた」場合、両親共に子どもの成績が「下位」と思っている親ほど叱り、「上位」と思っている親との差は大きい。一方、「手伝いなどを忘れた」場合では、同様な傾向が両親共にみられるが、その差は極めて小さい。

図２－18



4．干渉の実態

遊びは、本来、自主的・自発的な自由な活動であり、それゆえにこそ子どもの精神的・社会的な発達に大きな意義がある。従って、親が子どもの遊びに過度に注意したり、干渉したり、制限を加えることは、そのような遊び自体の特性を破壊し、また遊びへの子どもの意欲を失なわせ、そして遊べない子どもにしてしまうおそれがある。ここでは干渉の実態を、「遊びの内容や遊び方への注意」、「誰と遊ぶか、友だちの選択への注意」、「子どものケンカなどへの仲裁」、「テレビ番組の内容への注意」という４つの視点から考察してみよう。

前回の報告では、子どもの遊びにさまざまな点で積極的に注意し、干渉している両親の姿が浮き彫りにされた。つまり、「遊びの内容」では約６割、「テレビの内容」では約５割、「遊ぶ友だち」では３割弱、そして「ケンカの仲裁」では２割前後が、各々注意し干渉しているのである。また、父親と母親では一部に若干の違いはあったものの、その差は極めて小さく、従って基本的には共通する傾向が認められた。さらに、前回の報告では「遊ぶ内容」と「ケンカ」への注意は高学年になるほど低下するのに対し、「遊ぶ友だち」と「テレビ」についての注意は多くなること、あるいは概してひとりっ子や長子の場合に注意が多いこと、などが指摘された。

そこでこの干渉の実態を両親の属性別に検討してみよう。

まず地域別では、全体では顕著な差異はないが、父親よりも母親の間で、また「遊ぶ内容」（図２―19）と「友だち」への注意で、地域差がみられる。そして全般的には、「過疎地域」と「旧産炭地」の地域の父親および「工業地域」と「旧産炭地」の地域の母親の注意がや、多く、逆に「都市団地」と「工業地域」の父親および「都市団地」と「漁業地域」の母親のそれは少ない。

図２―19

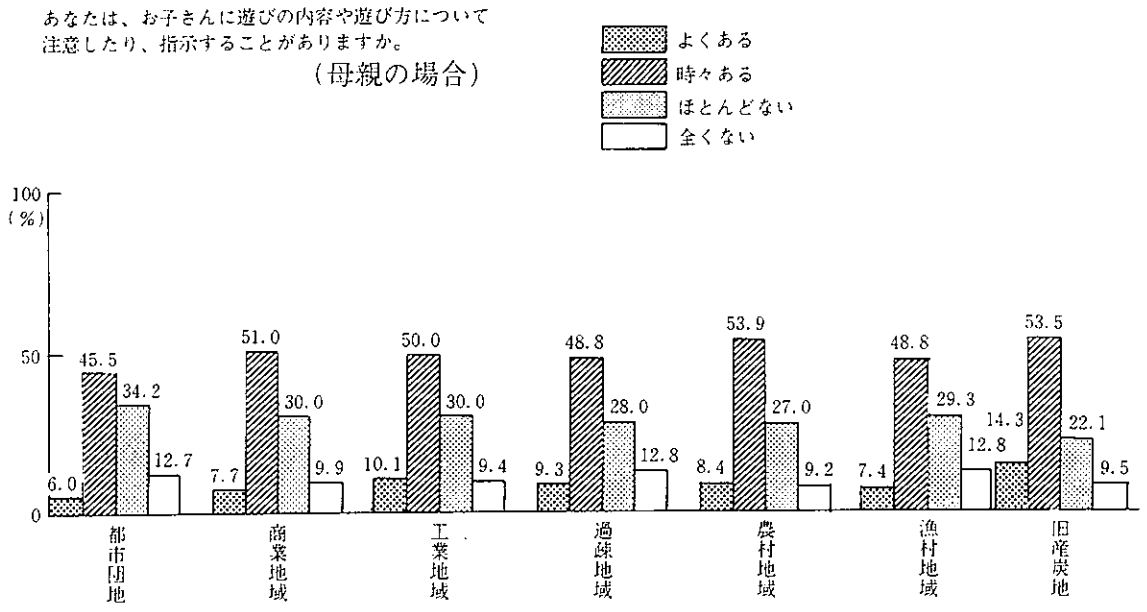


図２－20　あなたは、お子さんが誰と遊ぶかについて注意したり、指示することがありますか。
（母親の場合）

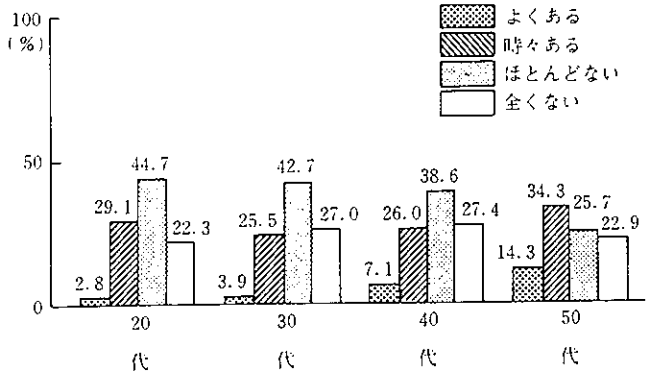


図２－21　あなたは、お子さんが見ているテレビ番場の内容について注意したり、指示したりすることがありますか。
（母親の場合）

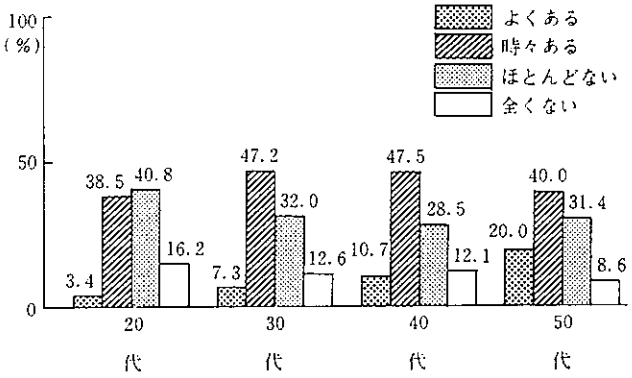


図２－22　あなたは、お子さんが誰と遊ぶかについて注意したり、指示することがありますか。
（母親の場合）

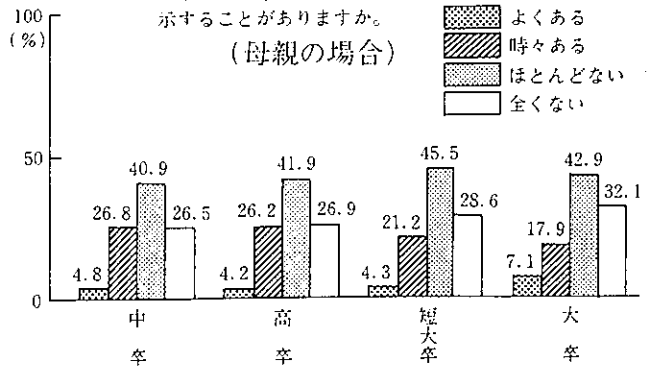
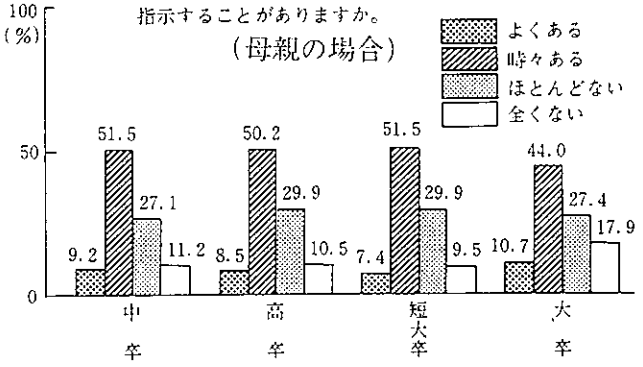


図２－23　あなたは、お子さんに遊びの内容や遊び方について注意したり指示することがありますか。
（母親の場合）



注意・干渉の項目別にみると、まず「遊ぶ内容」と「友だち」では父親・母親共に「旧産炭地」の親の注意は多いが、「都市団地」や「漁業地域」の親の注意は少ない。「ケンカ」についてもほぼ同様であるが、特に「漁業地域」の母親の干渉が少ない。「テレビ」への注意では地域差はほとんどないが、父親・母親共に、「工業地域」の親でそれが多い。

次に年代別で見てみよう。「ケンカ」の注意は「20代」の父親と母親が他の年代に比べて著しく多く、そして「友だち」と「テレビ」への注意は父親・母親共に年代が上がるにつれて著しく多くなり、若い世代の親の注意は非常に少ない、という２点が顕著な特徴として指摘される(図２－20、図２－21)。「遊ぶ内容」では、年代別、父母別に一貫した傾向はないが、「30代」の父親および「20代」の母親で注意が多く、逆に「20代」の父親でそれが非常に少ない。

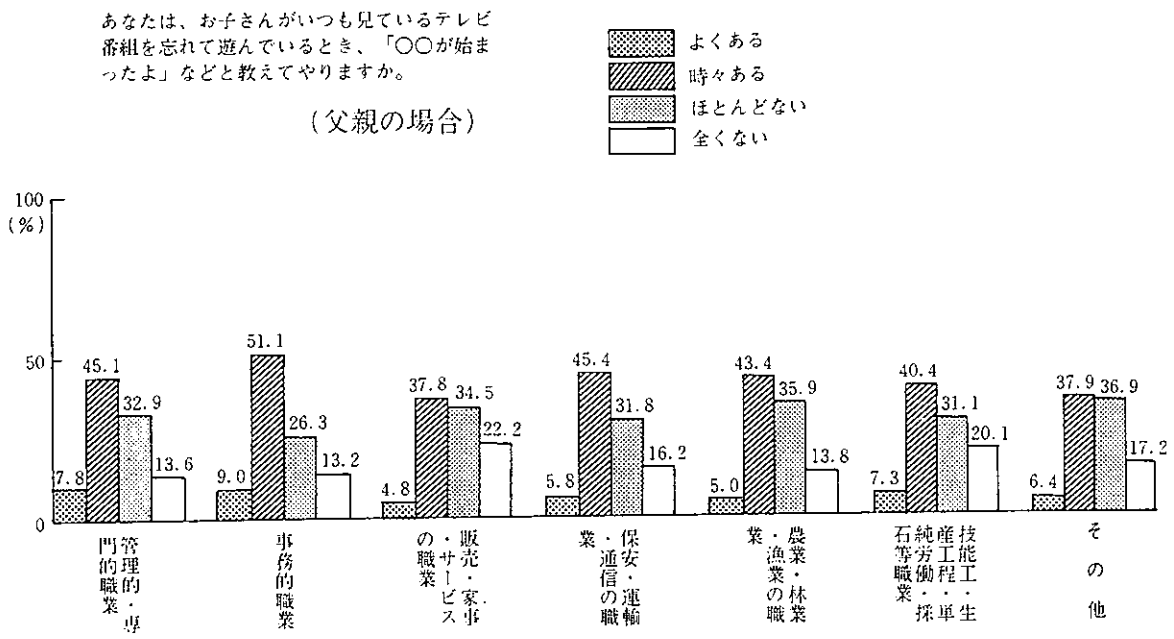
学歴別では、「遊ぶ内容」、「友だち」、「ケンカ」においては父親も母親も「中卒」が高い割合を示している。(図２－22)。この３項目において、「高卒」「短大卒」「大卒」の間には顕著な差異はないが、「大卒」の父親の「友だち」への注意、また「大卒」の母親の「遊ぶ内容」への注意は、共にや、少ない（図２－23)。だが、「テレビの内容」への注意は父親・母親共に、「短大卒」、「大卒」、「高卒」、「中卒」の順に干渉が多く、前の結果とは正反対の傾向にある。

職業別にみると、父親・母親共に注意の内容に応じてその程度が多様であり、明確な傾向をみることはできない。だが、相対的には、父親・母親共に「管理的・専門的職業」と「技能工・生産工程・単純労働・採石等職業」の親の注意がやや多い。特に、父親の場合「友だち」と「ケンカ」には差はないが、「遊ぶ内容」への注意は「管理的・専門的職業」の父親が著しく多く、そして「テレビ」への注意は「事務的職業」の者が非常に多く、逆に、「販売・家事サービスの職業」、「農業・林業・漁業の職業」、「技能工・生産工程・単純労働・採石等職業」のそれはかなり少ないこともあげられる（図2―24)。

さらに、母親の職業の有無別によると、わずかな差であるが、「主婦専業」と「専業の仕事」をもつ母親との間に、正反対の傾向がみられ、例えば、「主婦専業」の母親は「遊ぶ内容」と「友だち」への注意は少ないが、「テレビ」と「ケンカ」への注意は多いのに対し、「専業の仕事」を持つ母親はそれとは逆の傾向を示している。

最後に、親の干渉を子どもの成績別でみると、「テレビ」では父親・母親共にほとんど違いはないが、他の3項目では成績によりかなりの相違がみられる。つまり、「遊ぶ内容」、「友だち」、「ケンカ」については、父親も母親も、子どもの成績が「下位」と思っている親ほど注意が多く、逆に「上位」と思っている親ほどそれが少なくなっている。特にそれは「友だち」と「ケンカ」において、そして父親よりも母親において、その差が著しい。

図2―24



5．本章のまとめ

すでに指摘したように、子どもの精神的・身体的・社会的な発達のために、遊びは極めて重要な意義を担った活動である。そしてその意義は、子どもが大人の世界から離れ、自主的・自発的に独自の「世界」を形成して、子ども同志で遊ぶことの中から実現される面が強い。従って、子どもの遊びに親が必要以上に関与することは、遊び自体を破壊し、その意義を失なわせることになりかねない。

近年、核家族化などの傾向により、近隣や家族自体の子どもの数が減少したことによって、あるいは遊び場所の減少などによる遊び自体の変質によって、子どもの遊びは大きく変化し、最近の子どもたちには、巣ごもりあるいは無遊病などといわれる状態も指摘されている。このような子どもの遊び状況において、子どもの遊びに対する親の養育態度・行動のあり方は非常に重要な意義をもつと考えられる。

本章では、子どもの遊びに対する親のかかわり、特に養育態度・行動を、いくつかの視点から考察したが、これまでの結果を総合してみると、子どもの遊びに対する親の世話のしすぎ、過剰な関与、あるいは甘さ、などの傾向がはっきりと指摘され、いわゆる「過保護」であることが明らかにされた。もちろん、子どもの属性によって、そして両親の属性によって、あるいは世話や授与などの内容によって、個々にはかなりの相違点がある。

この相違点や多様性のため、両親の属性別に共通したパターン・傾向を指摘することは、かなり困難であるが、非常に概括的にまとめると、次の点が指摘されよう。

まず行動の面では、子どもの遊びに親は非常に積極的に関与し、子どもの遊びの世話をしたり、もの（こと）を与え、あるいは遊びを厳しく規制したり、それを干渉しているが、逆にそれに対する叱責は少ない。

この過剰な関与と甘さという特徴は、母親よりも父親において顕著であり、そして兄弟のある子どもあるいは長子以外の子どもより、ひとりっ子あるいは長子の親において目立っている。一方さらに、両親の属性に関していえば（個々の差異をひとまず置くと）、「都市団地」や「工業地域」の親、若い年代の親、「短大卒」、「大卒」の親、「管理的・専門的職業」や「事務的職業」の親、「主婦専業」の母親、そして成績が「上位」と思っている子どもの親、などでそれらの傾向が特に強くみられる。もっとも、過剰な授与と過剰な干渉という点では、「中卒」、若い父親、ブルーカラーの職業をもつ母親、「旧産炭地」などの親でそれぞれ際だっていることも特筆される。前者と後者は共に「過保護」というべきであるが、親自身の時間的余裕や職業的特性などの理由により、そのタイプがかなり異なっている。

また、子どもの遊びに対する親のかかわりという点では、他の側面として、「テレビ番組が始まった」ことを教えるかどうか、あるいは子どもたちが遊びすぎた時に、「宿題や勉強を忘れた場合」と、「手伝いなどきめられたことを忘れた場合」とではどちらを厳しく叱るか、などにみられたように、単な

る遊びに対する親の態度というより、親自身が何を考え、いかに行動しているかが、子どもの遊びに強く影響していることも見逃してはならないだろう。

はじめに指摘したように、今日の子どもは遊ぶこと自体が少なくなると共に、遊びの内容が変質してきている。その状況の中で、ここで明らかにされたように、親が子どもの世話をしすぎたり、物を与えすぎたり、あるいは干渉しすぎたりすることは、ますます子どもから遊びを奪い、遊べない子どもをつくりだすことになりかねない。子どもたちが元気に、安全に遊ぶためには、親のあたたかい支えと見守りが必要であるとしても、親の直接的な過剰な干渉は不必要であろう。

第３章　子どもの学習に対する親の養育態度・行動の実態

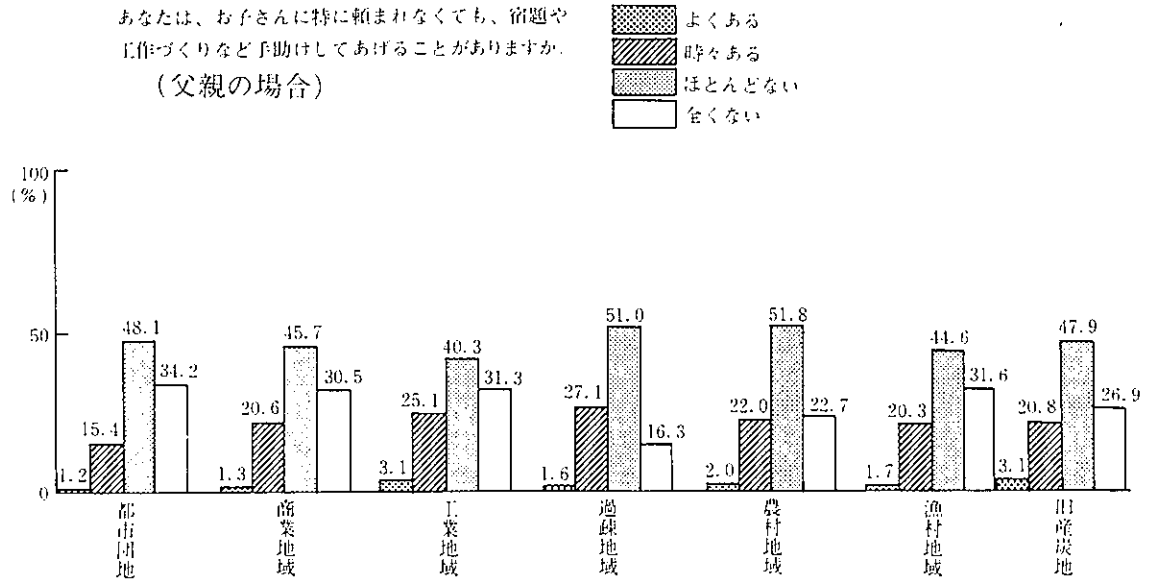
丈夫なからだをつくり、豊かな心を育て、あわせて知識や技術を磨くという、全人的成長を促す子育ての重要性が今日ほど強く訴えられている時代はあるまい。しかしその期待とは逆に実態はますます子どもたちの心身の健やかな発達が阻害される方向に進んでいるのである。学習は好むと好まざるとにかかわらず、親にとっても子どもにとっても最も重要な課題として毎月の生活におおいかぶさっているのである。本章ではこの学習領域に関して親がどのように子どもにかかわっているのか、その実態を地域、年代、職業、学歴、母親の職業の有無、子どもの成績の関係からみてみよう。

１．世話の実態

子どもの学習に対して最近の親はどの程度世話をしているのであろうか。「子どもに特に頼まれなくても宿題や工作づくりなど手助けしてあげている」親についてまずみてみよう。

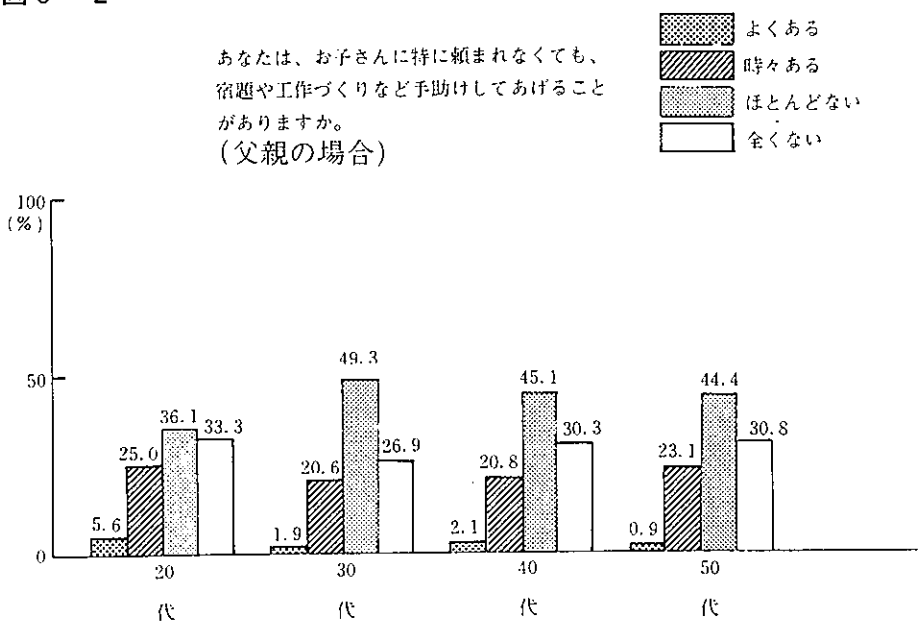
地域別では、父親の場合、「過疎地域」や「工業地域」の割合が「よくある」、「時々ある」を合わせそれぞれ28.7％、28.2％と高い。これに対して最も低いのは「都市団地」の16.6％である。母親では、「都市団地」の割合が15.1％と最も低く、父親の場合と変わらないが、逆に最も高いのは「旧産炭地」で、その割合は26.9％となっている。父親と母親の比較では、概して父親の方が世話をする傾向が強いようである。図３－１は、父親の場合を示したものである。

図３－１



次に親の年代別でこれをみてみると、まずどの年代も、父親の方が母親よりよく世話をしているという事実が指摘できる。また「20代」の父親では30.6％と他の年代に比較して割合が最も高いことが注目されよう（図３－２）。父親が子どもに特に頼まれなくても宿題や工作づくりなど手助けをしてやるというのは、子どもによい成績をと願う愛情の一つの表現と受けとれないこともない。しかし、安易にやってあげているとすれば、今日よく言われる「甘い父親」以外の何ものでもあるまい。可能な限り自分のことは自分でさせるのがしつけの基本である。ところで母親の場合はどうであろうか。この結果は父親と同じような傾向を示している。すなわち「30代」、「40代」の母親では「よくある」、「時々ある」を合わせてそれぞれ19.7％、19.1％であるのに対して、「20代」ではそれより高く25.7％となっている。

図３－２



学歴別でみると、「よくある」、「時々ある」を合わせた割合は、「短大卒」の父親が17.0％、「大卒」の父親が18.9％であるのに対し、「中卒」の父親では24.4％、「高卒」では23.4％となっている（図３－３）。「中卒」、「高卒」の父親の方がよく世話をする傾向があるといえよう。母親の場合もよく似た傾向を示している。すなわち「大卒」の母親では10.7％、「短大卒」では14.3％であるのに対し、「中卒」の母親では22.1％、「高卒」では20.0％と、「中卒」、「高卒」の母親の方がよく世話をする傾向がある（図３－４）。

図３－３

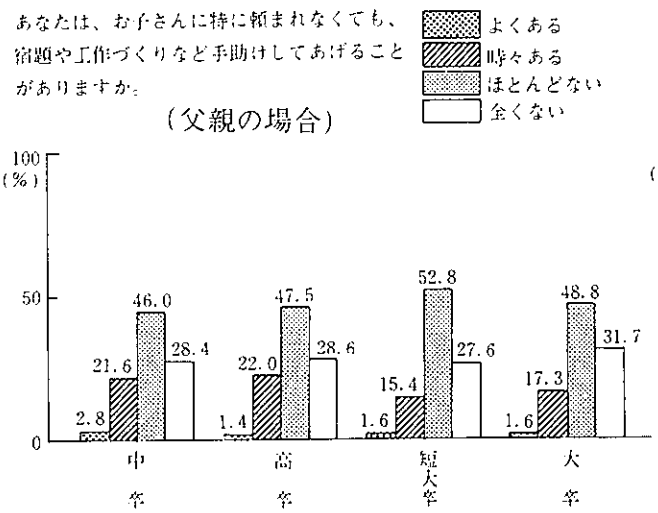
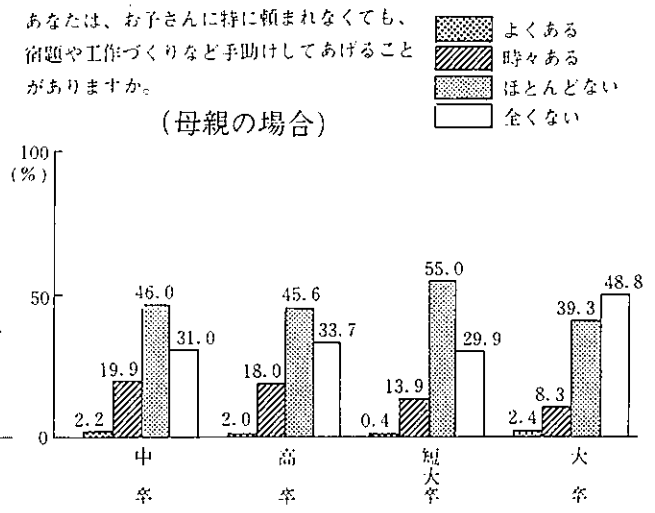
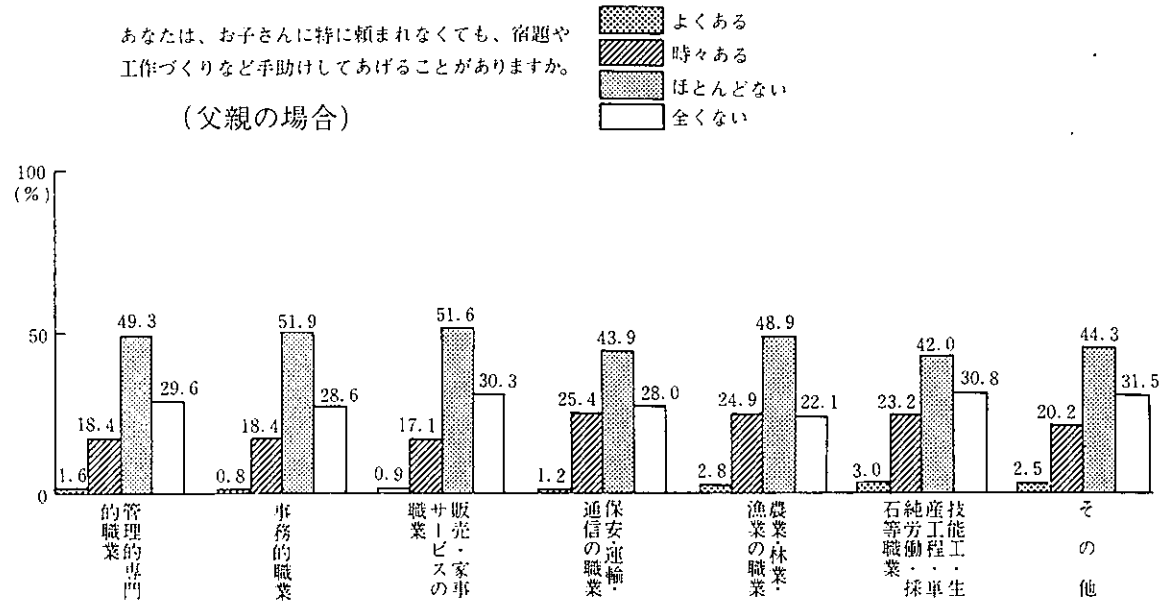


図３－４



職業別では、母親の場合ほとんど差がなく、割合は18.9％～23.3％の範囲にある。しかし、父親では若干違いが見られる（図３－５）。すなわち、「農業・林業・漁業の職業」「保安・運輸・通信の職業」、「技能工・生産工程単純労働・採石等職業」がいずれも26～27％台であるのに対して、「販売･家事サービスの職業」、「事務的職業」、「管理的・専門的職業」では18～20％台と前者よりいくらか低くなっている。

図３－５



父親と母親の比較では、概して父親の割合が高いが、その差は大きなものではない。母親の職業の有無別では、ほとんど差はなくいずれの場合も20%弱、つまり５人に１人が「よくある」、「時々ある」と回答している（図３－６）。

子どもの成績との関係でみた場合どうであろうか。図３－７はこれを母親についてみたものである。わが子の成績が「上位」であると思っている母親では、手助けする率が18.0%であるのに対し、「下位」であると思っている「母親」では29.9%となっており、明らかに後者の割合が高い。ここには子どもの学習に対する親の願いが表われているように思われる。

図３－６

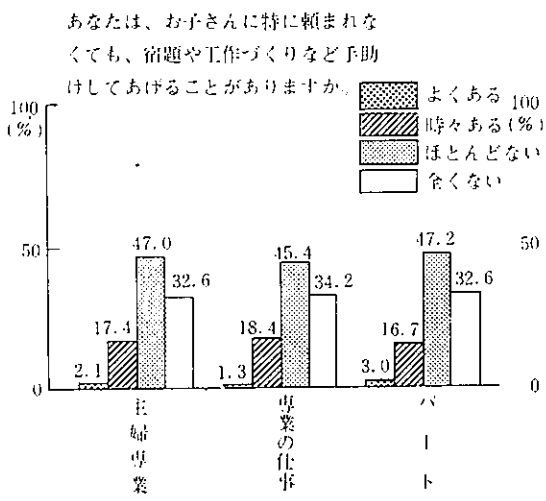
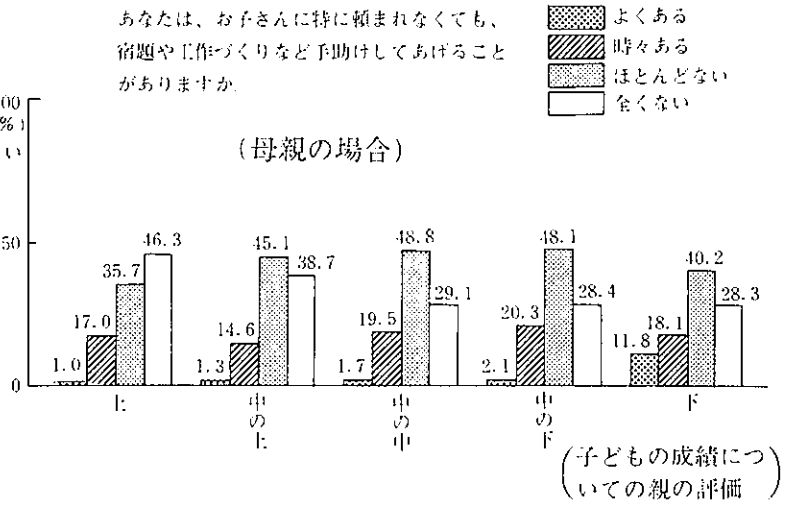
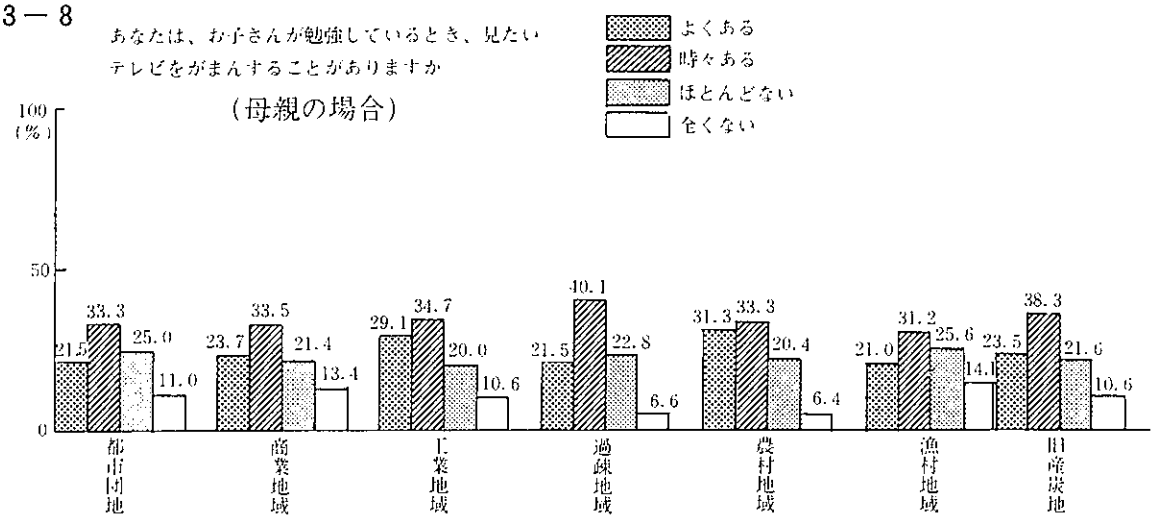


図３－７



ところで、直接世話の状態を問うものではないが、子どもの学習に対する親の配慮を調べる目的で、「子どもが勉強している時、見たいテレビ番組をがまんすることがあるか」という質問を用意した。地域別の実態をみると、「農村地域」では「父親」が59.5%、「母親」が64.6%とかなり高い割合を示しているものの、地域による大きな差は認められない（図３－８）。

図３－８



年代別に見るとどの年代でも母親の方が父親より割合が高い。これを最も割合の低い「20代」の父親と母親で比べると、「父親」27.8％であるのに対し、「母親」54.7％と母親は父親の２倍になっている。また年代が高くなるほど、父親、母親とも割合が高くなる傾向がある。すなわち父親の場合、「20代」で27.8％であるのに対し、「50代」では53.0％と最も高くなっている。母親の場合も同様に、「20代」が54.7％であるのに対し、年代順に少しずつがまんの割合が高くなり、「50代」では62.9％に達している（図３－９）。

図３－９

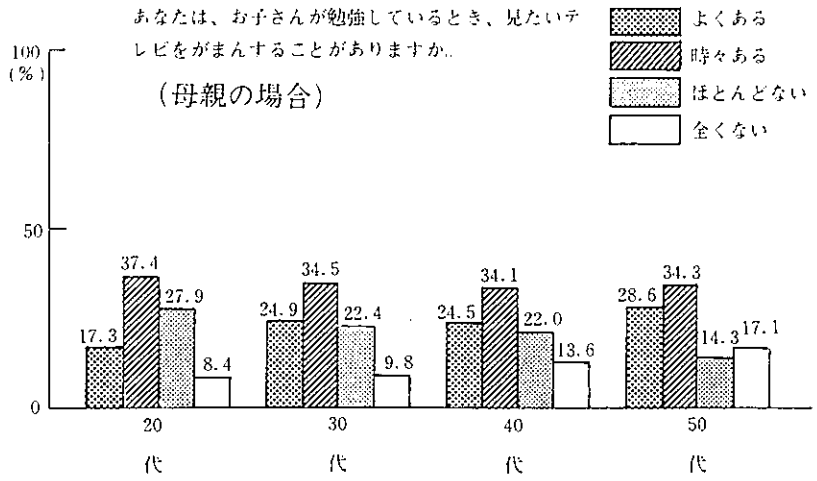


図３－10、図３－11は、これを親の学歴別でみたものである。全般に母親の方が父親に比べてがまんする割合が高いようである。また「大卒」の父親では「よくある」、「時々ある」を合わせた割合が44.6％であるのに対し、「高卒」の父親では52.7％となっている。がまんする割合はわずかではあるが、後者の方が高い。母親の場合も、「大卒」の母親が52.4％であるのに対し、他の学歴の方が割合は高くなっている。

図３－10

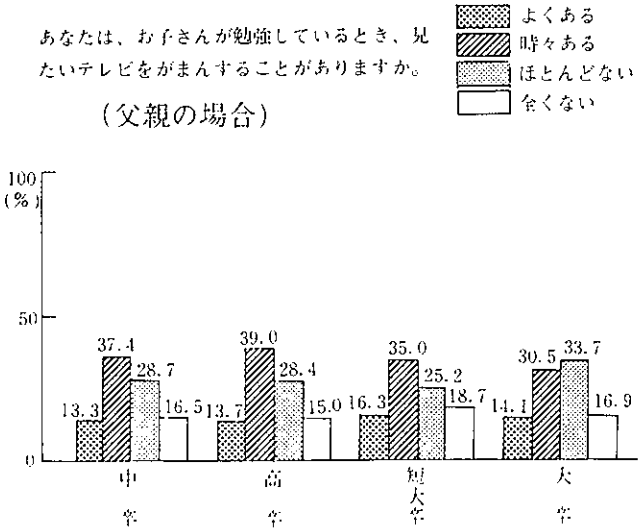


図３－11

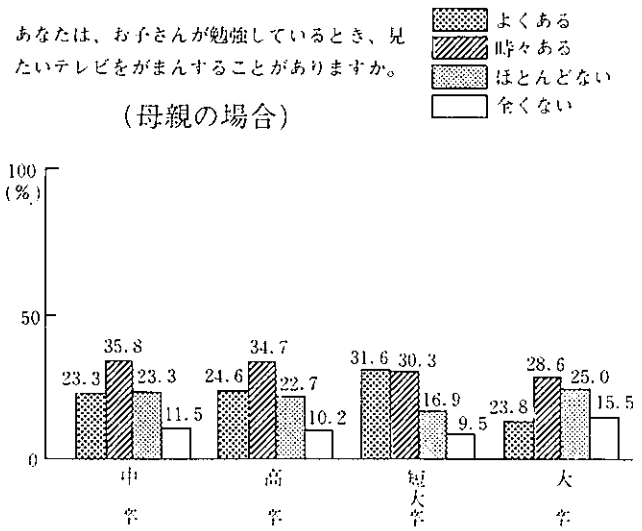


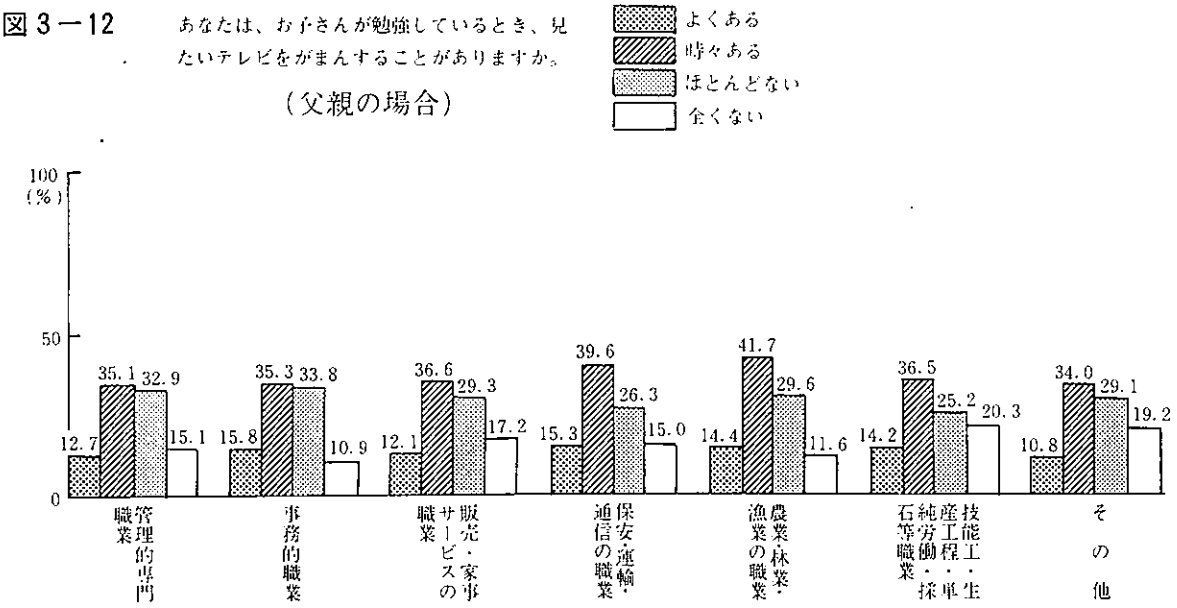
図３－12は父親の職業別でみたものである。どの職業の父親も２人に１人の割合でがまんしていることがわかる。しかし、そのなかでは、「保安・運輸・通信の職業」が54.9％と最も高い。

一方、母親では「保安・運輸・通信の職業」の48.0％を別とすれば、すべての職業において割合は54％以上で父親の割合よりはるかに高く、最高は「技能工・生産工程単純労働・採石等職業」の62.9％に達している。

母親の職業の有無別では「専業の仕事」を持つ母親が68.5％、「主婦専業」の母親が59.0％と後者の割合の方が低い。

図３－12　あなたは、お子さんが勉強しているとき、見たいテレビをがまんすることがありますか。

（父親の場合）



２．授与の実態

子どもの学習に関して親はどの程度もの（こと）を与えているのであろうか。この実態を調べるために３つの質問を用意した。

まず「あなたはお子さんの勉強に関係のあるものなら、お子さんに頼まれなくても買ってあげることがありますか」という質問についてみてみよう。地域別や母親の職業の有無別ではほとんど差が認められない。これを年代別でみると、父親、母親とも「50代」が他の年代に比べて最も高い割合を示している。例えば母親の場合、「50代」では62.9％である。これに対して逆に一番低いのは「40代」で41.9％となっている。また、両親を比較するとどの年代でも父親より母親の方の割合が高く、頼まれなくても与える傾向が強いようである。図３－13は母親の場合である。

学歴別では父親の場合、「よくある」、「時々ある」を合わせ、「中卒」が28.8％であるのに対し、「短大卒」43.1％、「大卒」38.9％と割合が高くなる傾向がある（図３－14)。母親の場合も、父親の場合とだいたい似た傾向にある。すなわち、「中卒」の母親40.9％に対し、「大卒」61.9％、「短大卒」51.9％となっている。父親と母親の割合を比べてみると、全般に母親の方がよく与えているといえよう。例えば、最も割合の低い「中卒」の場合で比べてみると、「父親」では28.8％であるのに対し、「母親」では40.9％となっている。

図３－13

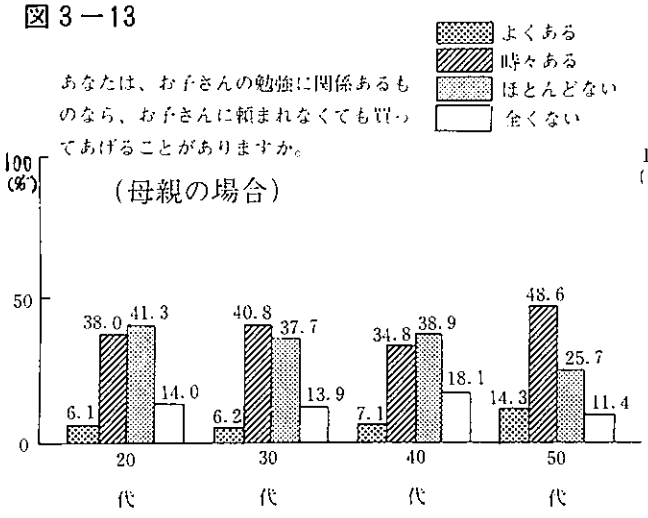


図３－14

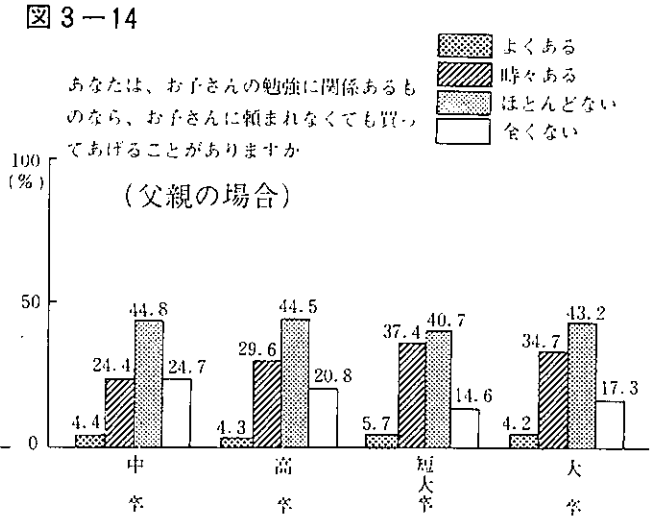
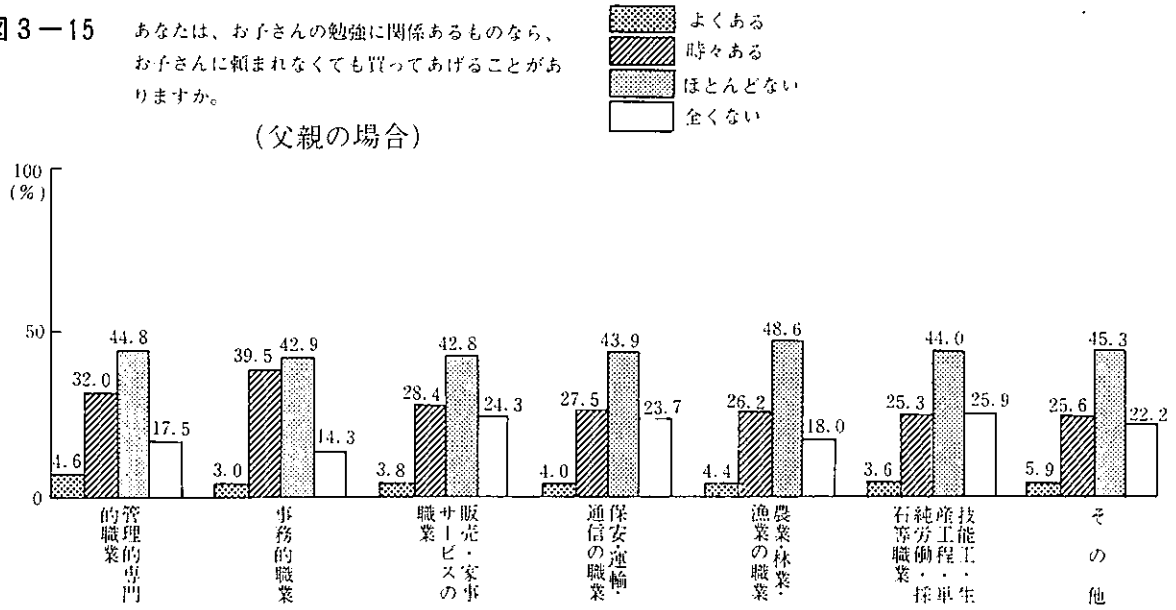


図３－15はは父親の職業別でみたものである。職業によってかなり違いがみられるが、特に「事務的職業」の父親の割合が42.5％となっており、他の職業に比べて、与える割合が顕著に高いことが注目される。このことは母親についても同様で、母親の場合その割合は50.4％を占めている。

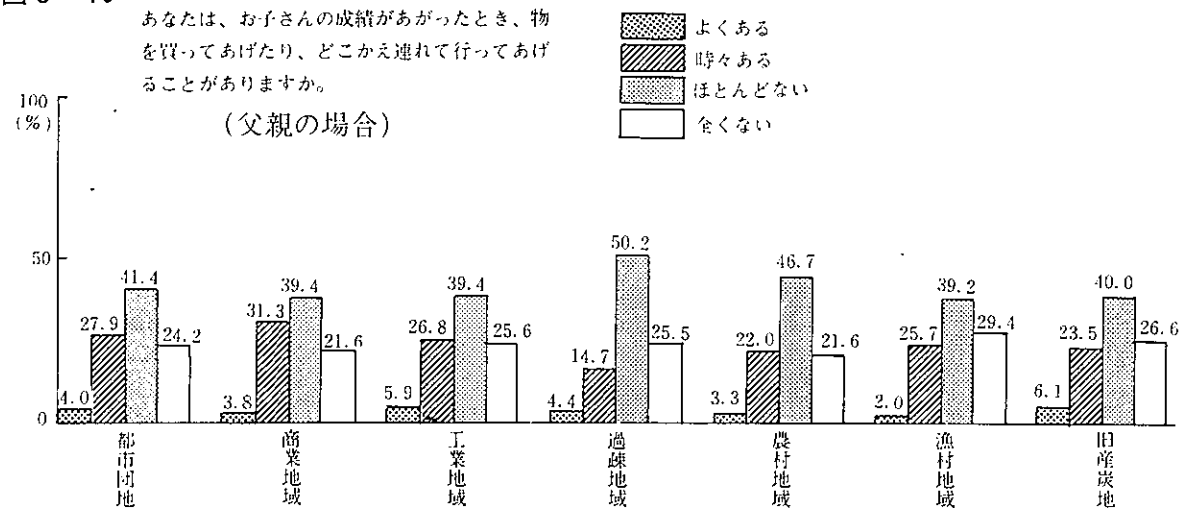
図３－15　あなたは、お子さんの勉強に関係あるものなら、お子さんに頼まれなくても買ってあげることがありますか。



次に「あなたはお子さんの成績があがったとき、物を買ってあげたり、どこかえ連れて行ってあげることがありますか」という質問に対する結果をみてみよう。

地域別では両親とも「商業地域」「工業地域」の割合が高く、「過疎地域」では低い。すなわち「商業地域」の父親では「よくある」、「時々ある」を合わせ35.1％、「工業地域」では32.7％であるのに対し、「過疎地域」では19.1％と10％以上も低くなっているのである（図３－16)。また母親の場合も、「商業地域」30.8％、「工業地域」29.1％であるのに対し、「過疎地域」17.3％というように父親の場合と同様、その割合はかなり低くなっている。

図３－16



年代別では、「50代」の父親が「よくある」、「時々ある」を合わせ35.9％、「母親」が28.6％で他のどの年代よりも割合が高くなっている。父親で最も低いのは「20代」の22.3％である。しかし、その後「30代」と「40代」ではそれぞれ30.0％、29.4％、さらに「50代」では35.9％というように年代の上昇にともなって割合が高くなる傾向がみられる（図３－17)。一方、母親ではいずれの場合も20％台で一貫した傾向は認められない（図３－18)。

図３－17

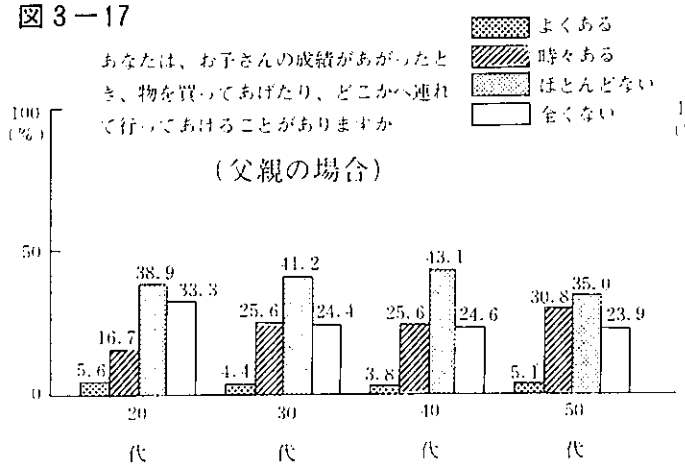
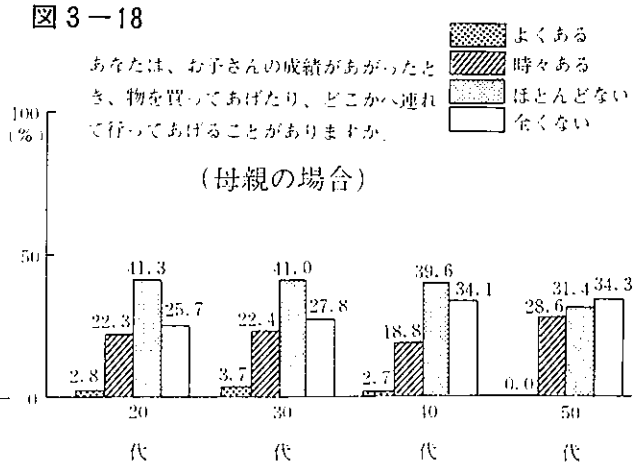


図３－18



次に図３－19は、学歴別の実態を示したものである。「よくある」、「時々ある」を合わせてみると、父親、母親とも「中卒」の割合が、他に比べてわずかに低くなっている。すなわち父親では「大卒」「短大卒」の場合32.5％であるのに対し、「中卒」では27.2％である。また母親の場合、「短大卒」では27.3％であるのに対し、「中卒」では22.4％と、これも父親同様後者がわずかではあるが低くなっている。両親の比較では母親より父親の方に与える傾向が強いようである。

図３－19

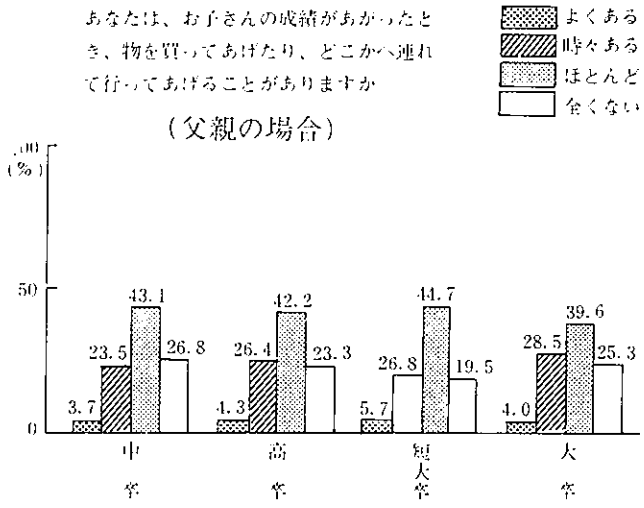
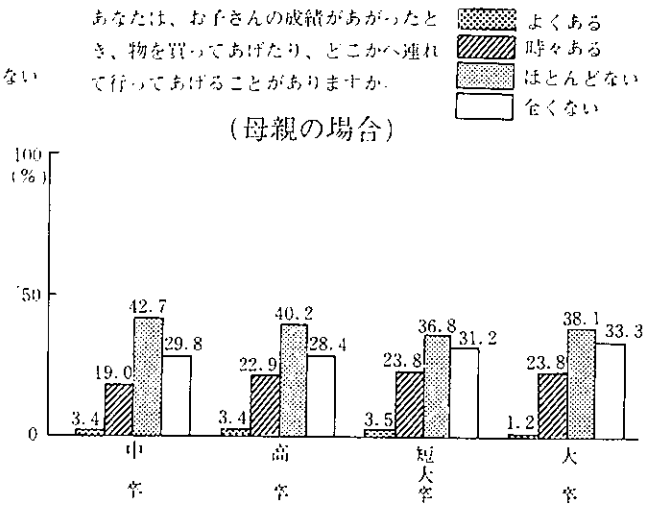
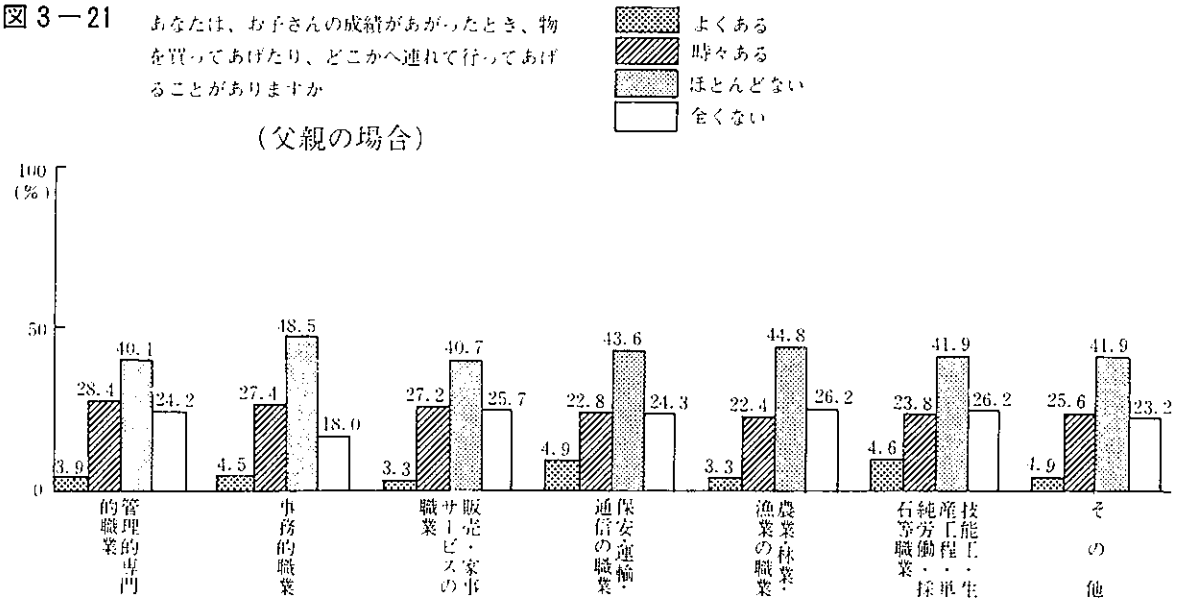


図３－20



さらに、職業別では父親、母親ともに大きな違いはなく、「農業・林業・漁業の職業」の「父親」が25.7％、「母親」が20.4％と他に比較し割合が低くなっていることが注目される。図３－21は父親の職業別である。

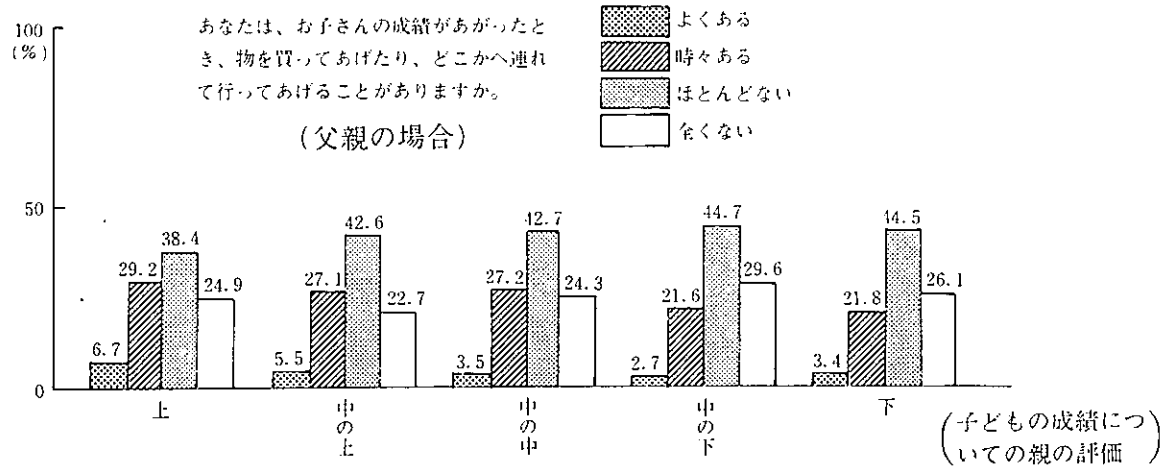
図３－21



母親の職業の有無別でみると、職業を持つ母親の方が「主婦専業」より割合が少し高いようである。

さらに子どもの成績でみると、母親の場合は成績が「上位」と思っている子どもとそうでない子どもで割合に大きな違いは見られない。しかし図３－22から明らかなように父親では成績が「上位」と思っている子どもに与える割合が36.0％と最も高くなっており、子どもの成績についての親の評価が「下位」になるにつれてその数値は次第に低くなる傾向がある。

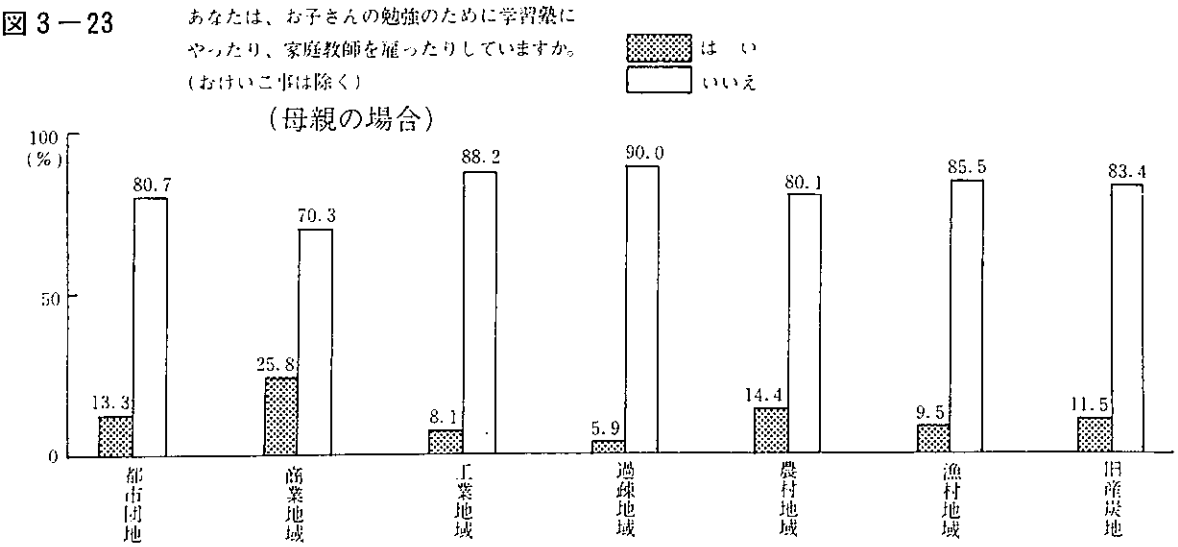
図３－22



次に、ものではないが、「子どもの勉強のために学習塾にやったり、家庭教師を雇ったりしている」親の割合はどうであろう。

「はい」と答えている割合を、まず地域別でみてみよう。結論的にいえば、父親、母親とも全く同じような傾向を示していて、全体としてかなり地域差が認められる。割合が高いのは「商業地域」で、父親27.5％、母親25.8％である。次が「農業地域」で、父親16.5％、母親14.4％となっている。「都市団地」、「旧産炭地」がこれにつづき、「過疎地域」、「工業地域」の割合は最も低い。すなわち「過疎地域」の「父親」では6.0％、「母親」では5.9％にすぎないのである（図３－23）。

図３－23



年代別でみると、年代があがるにつれて、「はい」と答える割合は父親、母親とも高くなっている。父親の場合「20代」では5.6％であるのに対し、「50代」では22.2％すなわち５人に１人強とかなり差がある（図３－24)。母親が、「20代」では7.3％であるのに対し、「50代」では20.0％まで上っている。これは、親の年代が高くなるほど、一般的には、子どもの学年が高くなるからとも考えられる。

図３－24

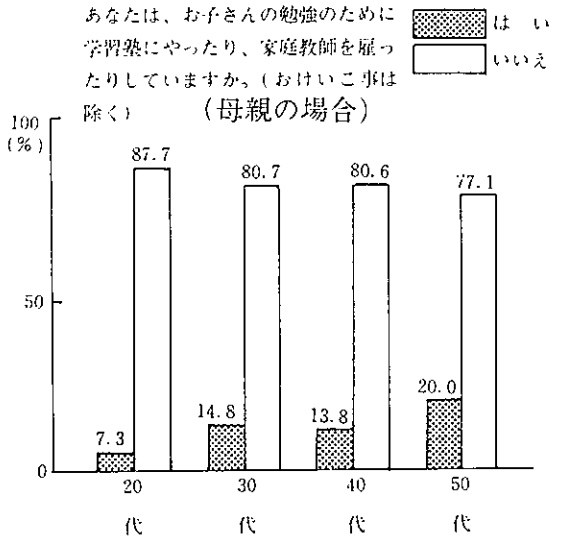
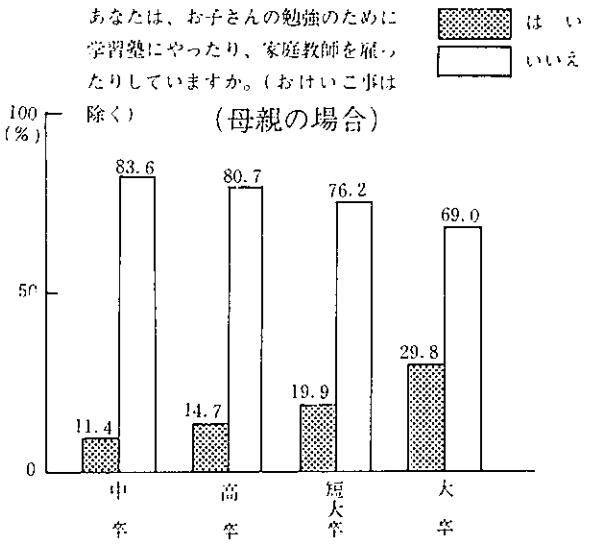


図３－25



学歴別では、父親と母親の傾向はほとんど変わらない。つまり、「短大卒」「大卒」の親の方が家庭教師を雇ったり、塾にやったりする割合が高く、「中卒」の父親が11.9％であるのに対し、「大卒」の父親では24.1％となっている。

母親では「中卒」が11.4％であるのに対し、「大卒」は29.8％が「はい」と答えている（図３－25)。

図３－26

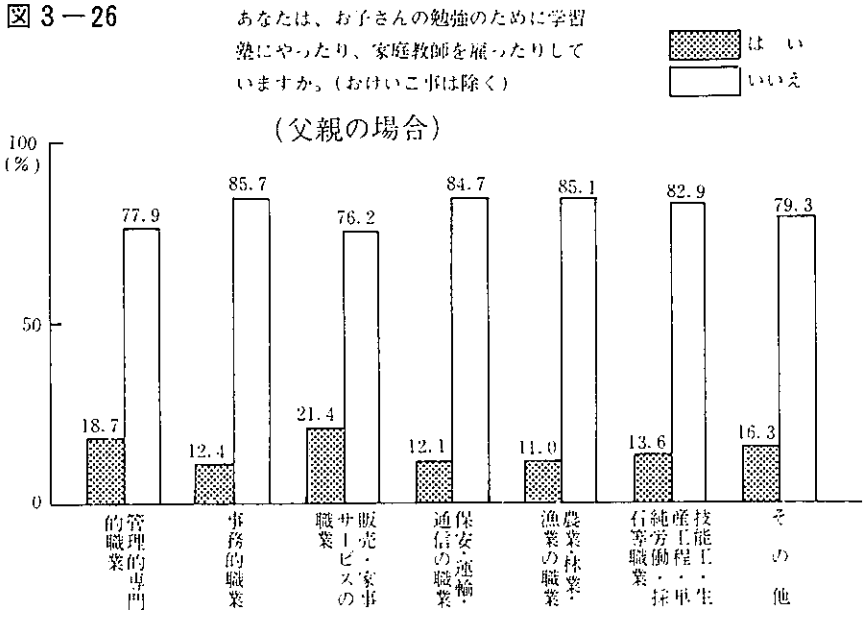
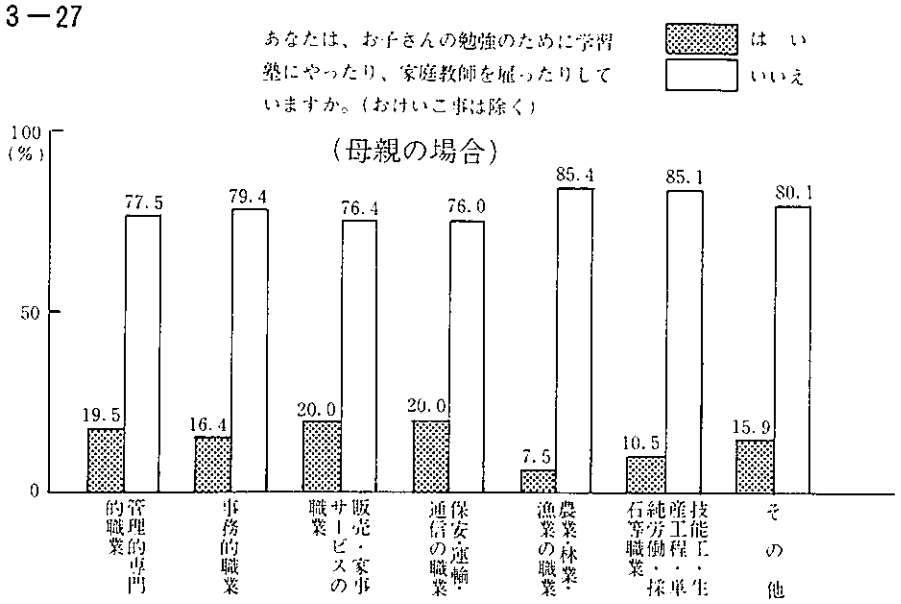


図３－27



職業別による実態はどうであろう。この結果には両親とも職業によってかなり違いが見られる。すなわち父親では、「販売・家事サービスの職業」が21.4％と高く、「農業・林業・漁業の職業」が11.0％と低くなっている（図３－26)。一方母親では、「販売・家事サービスの職業」と「保安・運輸・通信の職業」が20.0％と高く、「農業・林業・漁業の職業」が7.5％と低くなっている（図３－27)。父親、母親のどちらも「販売・家事サービスの職業」が高い割合を示しているのに対し、「農業・林業・漁業の職業」の割合の低いことが注目される。

母親の職業の有無別では、「専業の仕事」を持っている「母親」が16.7％とやや高い割合を示しているものの、「パート」11.3％、「主婦専業」12.2％で、あまり大きな差はない。

子どもの成績別では、成績が「下位」と思っている子どもの率が他の子どもに比べて低くなっている。ちなみに成績が「上位」から「中の下」と思っている子どもの場合14％～18％であるのに対し、「下位」と思っている子どもでは7.6％とほぼ前者の半分になっているのである。

３．干渉の実態

子どもが学習以外のことをしている時、親はこれに対しどの程度注意を与えているのであろうか。「子どもが遊んだり、テレビを見ている時、『勉強はすんだの』などと注意する」親の実態を地域別、職業別でみた結果にはあまり大きな差はなく、いずれも80％前後の高い割合を示している。

また、親の年代別でみた結果では、「20代」の「父親」では66.7％と少し低くなっているものの、他の年代は10人中８人までが「もう勉強はすんだの」と声をかけている。一方、母親は、どの年代でも10人中９人が「もう勉強はすんだの」と声をかけており、両親とも勉強への関心がいかに強いものであるかがこの結果からもうかがわれる。しかし、今日のように、子どもが遊ばず、遊べず、「無遊病」といわれる状況にあっては、親は遊びに対してもう少し寛容であることも必要なように思われる。

さらに、学歴別ではどうであろうか。「よくある」、「時々ある」を合わせてみると、父親も母親もかなり注意しているようである。父親では、「中卒」が82.8％と最も高い率を示している（図３－28）。

一方母親では、「高卒」が91.0％と最も高く、「中卒」、「短大卒」と少しずつ低くなり、「大卒」では79.8％まで下がっている（図３－29）。

図３－28

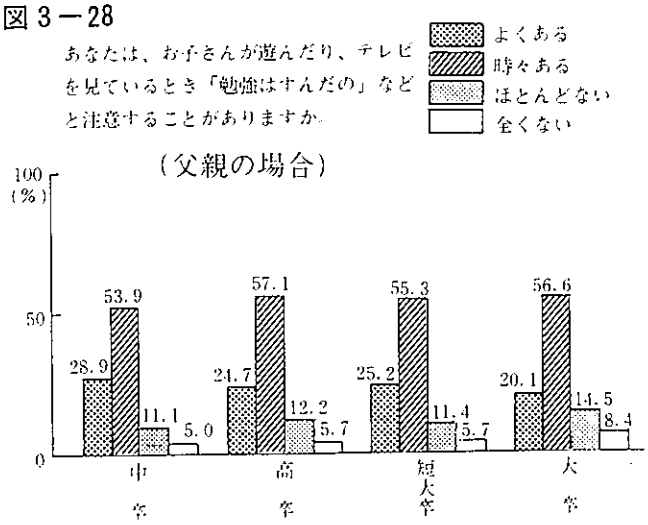
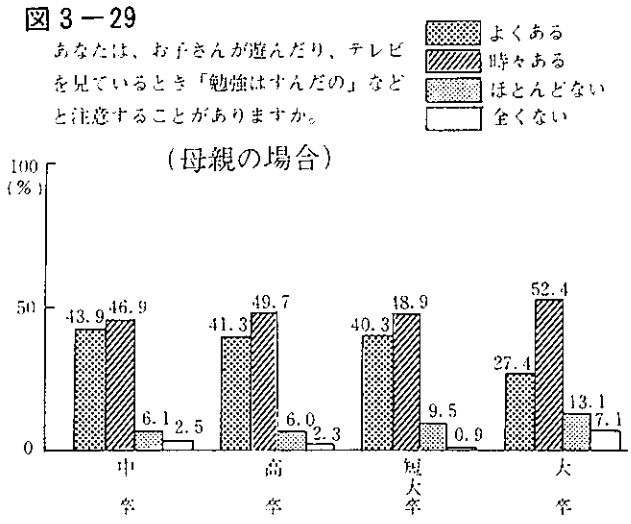


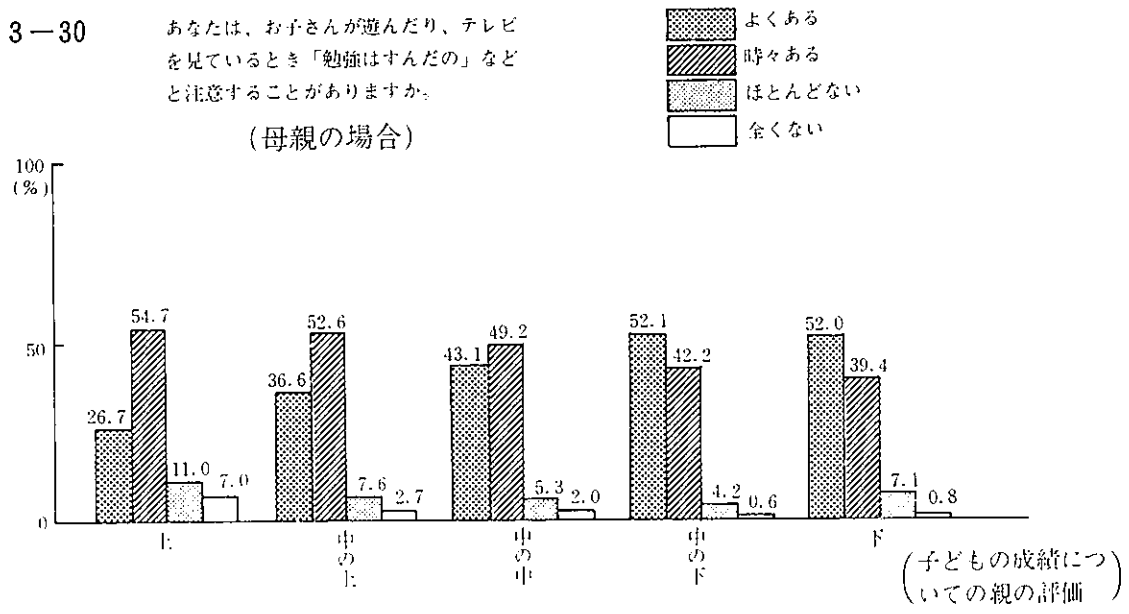
図３－29



母親の職業の有無別による注意する割合の違いはあまりない。どちらの場合も90％前後である。

また、この実態を子どもの成績別でみてみると、父親、母親とも成績が「上位」と思っている子どもより、「中位」と思っている子どもの親の方が注意する割合が高くなっている。父親では「上位」と思っている子どもの場合76.8％注意しているのに対し、「中の下」と思っている子どもでは84.0％が注意している。母親の場合も、「上位」と思っている子どもは、81.4％であるのに対し、「中の下」と思っている子どもは94.3％となっている。図３－30は母親の結果を示したものである。

図３－30



次に、学習に対する直接的な干渉というわけではないが、参考までに関連事項として「子どもが勉強している時、『ちょっと手をかして』などと手伝いを頼むことがあるか」どうかみてみよう。この質問の意図は、子どもの学習に対する親の姿勢をみるところにあった。

地域別では父親、母親とも大きな差はみられない。しかし、あえて指摘すれば、「過疎地域」の「父親」が30.7%、「母親」が34.6%と他に比較してわずかに高いことが注目される。

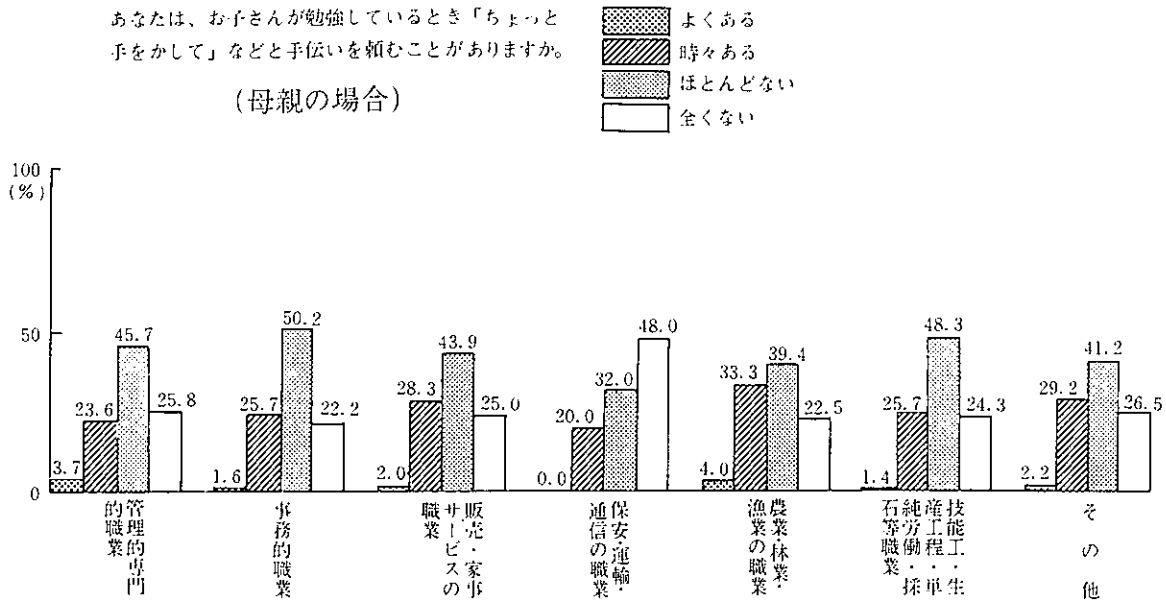
年代別に実態をみると、父親、母親とも「40代」の割合が最も高く、「父親」で22.5%、「母親」で30.0%である。また両親を比較すると、全体に母親の割合が高くなっているが、これには家事等との関係があるように思われる。

学歴別でみると、「よくある」、「時々ある」を合わせ、子どもの勉強中でも用事を頼む父親は学歴に関係なく5人のうち1人の割合である。母親はこれより少し多く、10人中3人である。子どもの学習は、むろん大切なことであり、子どもがそれに専心しているなら、できるだけこれを尊重すべきことはいうまでもない。しかし、家庭生活の中では、現実には、子どもが勉強している時でも、手伝いしてもらいたい場合は決して少なくないはずである。ところがこの結果は、「ほとんどない」、「全くない」を合わせると、「父親」77.8%、「母親」70.4%であり、いかに子どもの勉強に親が気を配っているかが示唆されよう。

職業別では、父親、母親とも「農業・林業・漁業の職業」の割合が高い。すなわち「農業・林業・漁業の職業」の「父親」は31.5%、「母親」は37.5%である。図3－31は、父親の場合である。

母親の職業別では、「パートの母親」が32.5%であるのに対し、「主婦専業」26.2%とわずかに前者の割合が高くなっている。

図3－31



4．本章のまとめ

学習に関して親の態度が学業成績最優先主義になり、子どもの勉強にあれこれ世話をやいたり干渉しすぎると、子どもに依頼心を持たせたり、子どもを勉強嫌いにしたり、時には親子の反目を招くことになりかねない。

学習は、本来自分の問題であり、自分のための活動である。家庭では、子どもが学校や地域で最も効果的に学習できるよう、子どもの心とからだの条件を整えることが一番大切である。たとえば自分のことは自分でするとか、規則正しい勉強の習慣をつけるとか、ものごとに生き生きとした好奇心をもつとか、少々のつらいことにはがまんする力をつけるなどである。つまり家庭における学習の指導は、勉強の習慣をつけるとか、子どもが行きづまって親に聞いた場合には当然必要であるが、頼まれもしないのに、「親が宿題や工作づくりなどを手伝ってやる」などというのは明らかに行き過ぎである。

しかしながら調査の結果は、かなり多くの父親、母親が子どもの学習に関していろいろ面倒をみているという事実を明らかにしている。「頼まれなくても宿題など手伝ってあげる」親は、さすがに少ないが、それでも「よくある」、「時々ある」を合わせると、両親ともほぼ5人に1人の割合でいる。授与は、もっと顕著である。しかも父親、母親とも高年代、「短大卒」、「大卒」ほどその傾向が強く現われている。すなわち、「頼まれなくても学習に関係のあるものなら買ってあげる」親は、「50代」の母親の場合5人に3人、「大卒」の母親の場合も同じく5人に3人であった。黙っていても買い与えるのであるから、要求すればどうなるかはおよそ見当がつくというものである。子どもの成績が上がった時、ほうびとしてものを買ってあげたりする親は「50代」の父親で5人にほぼ2人、「大卒」、「短大卒」の父親で10人中3人の割合であった。地域別、職業別でみると、商業の地域や職業を商業としている親に、与える傾向が強く見うけられる。しかし、この買い与える傾向は父母の学歴、年代、職業、地域、母親の職業の有無別、子どもの学業成績のいかんを問わず、基本的には今日かなり一般的であるといったほうがよいかもしれない。

確かに、小学校の段階では、親が子どもの学習の面倒をみてあげることによって、成績が一時的に上がる場合もある。しかし、長期的にみればマイナス面も少なくない。それは、学習の自立を妨げ、子どもの将来の知的発達に最も重要な、自分で考え、自分で問題を解決しようとする意欲を育てないからである。

第4章　子どものその他の生活領域に対する親のかかわり方

1．おこづかいの実態

おこづかいの額に地域的な差があるのであろうか。

調査結果によると、父母ともに「旧産炭地」で他地域に比べて与えすぎの傾向が見られるようである。「与えていない」親は「母親」で10.4％、「父親」で32.3％で他地域の親に比べて最も少なく、逆に1,000円−2,000円、2,000円以上の範囲では父母そろって与える傾向が強く見られる。この傾向は両親の共働き、カギッ子、親の養育態度などさまざまな事情が考えられるが、「旧産炭地」の親がおこづかいの与えすぎの傾向が強いことは同地域の親に授与過剰の警鐘を与えているといえよう。このほか、特徴的には、「都市団地」、「工業地域」では父母ともに与える金額がおおむね少なく、「農業地域」「漁業地域」では「与えていない」親が目立つ。

また父母の年代別での額の特徴を見ると、父母ともに比較的に若い世代に「与えていない」親が多い半面、高額授与の親が多いことがわかる。これは若い親の間では、親自身に金銭に対する意識の差や授与態度のズレといったものがあるといえないだろうか。

このほか、親の学歴別では、「大卒」の父母に額を押える傾向が見られるが、金額的にはさほど大きな特徴はない。また、父母の職業別でも著しい金額的な差異は見られない。だが、母親が働いている場合と働いていない場合では、かなりの差異が見られる。職業を持たない「主婦専業」の母親では、「与えていない」が24.5％と最も多い半面、「専業の仕事」を持つ母親は2,000円以上で10.3％、1,000円−2,000円の範囲では「パート」の母親で27.3％とかなり授与する傾向が強い特徴が見られる。このことは、日ごろ子どもに手をかけられない面をおこづかいで補っているものと考えられるが、職を持つ母親は「おこづかい（金額）では愛情は買えない」ことを十分わきまえて与えすぎないよう注意する必要があるだろう（表4−1、表4−2、表4−3）。

表4−1　母親の職業の有無別で見たおこづかいの額

職業／額	主婦専業	専業の仕事をもっている	パートの仕事をもっている	TOTAL
与えていない	24.5	21.2	14.6	22.1
500円まで	16.5	10.5	16.0	13.4
500円より多く1,000円まで	18.8	20.9	25.2	20.0
1,000円より多く2,000円まで	23.8	25.3	27.3	25.0
2,000円より多い	6.1	10.3	5.7	8.1
その他	5.8	7.2	4.7	6.3

表４－２　地域別（父親の場合）

額＼地域	都市団地	商　業	工　業	過　疎	農　村	漁　村	旧産炭地	TOTAL
与えていない	48.2	39.0	33.2	44.6	50.4	52.5	32.3	42.6
500円まで	16.5	7.4	10.0	4.8	10.4	10.3	6.6	9.7
500円より多く1,000円まで	13.9	11.0	20.5	10.8	12.0	12.7	11.5	12.9
1,000円より多く2,000円まで	7.6	19.2	17.5	18.4	10.8	8.9	26.4	15.7
2,000円より多い	2.2	10.5	2.6	5.2	2.0	3.8	10.8	5.6
その他	8.0	7.5	5.1	8.4	10.6	7.4	8.1	7.9

表４－３　地域別（母親の場合）

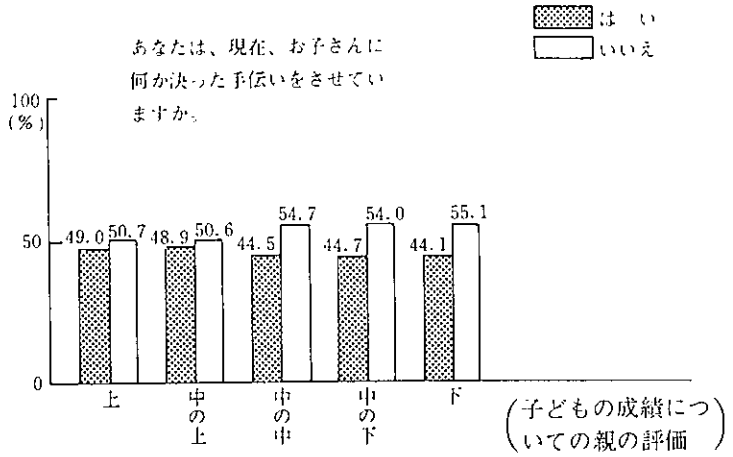
額＼地域	都市団地	商　業	工　業	過　疎	農　村	漁　村	旧産炭地	TOTAL
与えていない	24.8	17.8	10.3	29.1	34.5	33.4	10.4	22.1
500円まで	24.6	9.5	13.5	6.2	16.0	15.9	6.5	13.4
500円より多く1,000円まで	23.9	19.9	32.4	17.9	16.2	18.8	13.4	20.0
1,000円より多く2,000円まで	15.0	29.1	27.4	26.2	14.6	16.4	42.5	25.0
2,000円より多い	3.0	14.0	4.8	5.9	2.6	4.8	16.7	8.1
その他	3.2	5.7	5.4	9.7	9.4	6.5	6.5	6.3

２．手伝いの実態

子どもの手伝いは、心身の発達はもちろん、自主性や持久力、社会的な規範、自分の役割や義務の観念などを持たせうるうえで非常に大切な活動であるが、２人に１人の子どもが何ら決まった手伝いを与えられていないのである。

親がどの程度手伝いをやらせるかを見た質問項目に対する親の地域別、年代別、職業別の特徴は別段見られない。ただ、子どもの成績別で見るとわずかではあるが差が出ている。図４－１は母親がどの程度手伝いをさせているかを子どもの成績別に見たものである。子どもの成績が「上位」と思っている親ほど、手伝わせている傾向が出ている。これは手伝いが一面では、子どもの自学自習の姿勢を培っていることをうかがわせるものであろう。

図４－１



また、母親に対する「あなたは、お子さんに手伝いをさせたとき、いくらかおだちんを与えていますか」という問いについて子どもの成績別に考察してみた。その結果前述の成績が「上位」と思っている子どもに母親が手伝いをさせる傾向があるのとは全く逆に、成績が「下位」と思っている子どもは何らかのおだちんをもらっている傾向があることがわずかながらうかがわれる。父親の場合もこの傾向が見られる。

３．家庭における「きまり」の有無の実態

子どもに正しい生活習慣や態度をつけさせるために、家庭で一定の「きまり」を作る場合があるが、この実態を地域別に見てみると父親、母親ともに「過疎地域」で「きまり」を設ける傾向が少なく、「都市団地」、「工業地域」、「旧産炭地」、「漁村地域」などで何らかの「きまり」を設ける親が多いことがわかった（図４－２、図４－３）。

また、子どもに設けている「きまり」の有無を親の学歴別で見ると父親、母親ともに「短大卒」、「大卒」が「きまり」を設ける傾向も強くなっている。

このほか、親の年代別では、母親、父親ともに比較的若い世代の方が「きまり」を設ける傾向が強く、職業別でも「管理的・専門的職業」や「事務的職業」が比較的「きまり」を設けている度合いが高いのに対し、「農業・林業・漁業の職業」の父母が「きまり」を設けている度合いは低いという特徴が見られる。特に、母親の職業の有無別で見ると、職業を持たない「主婦専業」は68.0％が「きまり」を設けているのに対し、「専業の仕事」を持つ母親60.7％、「パート」の母親61.1％と、設けている親が少なくなっている。また、子どもの成績についての親の評価別では、母親、父親ともに成績が「上位」と思っている子どもの親の方が「下位」と思っている子どもの親に比べて「きまり」を設けている度合いが高い点も現われている。

図４－２

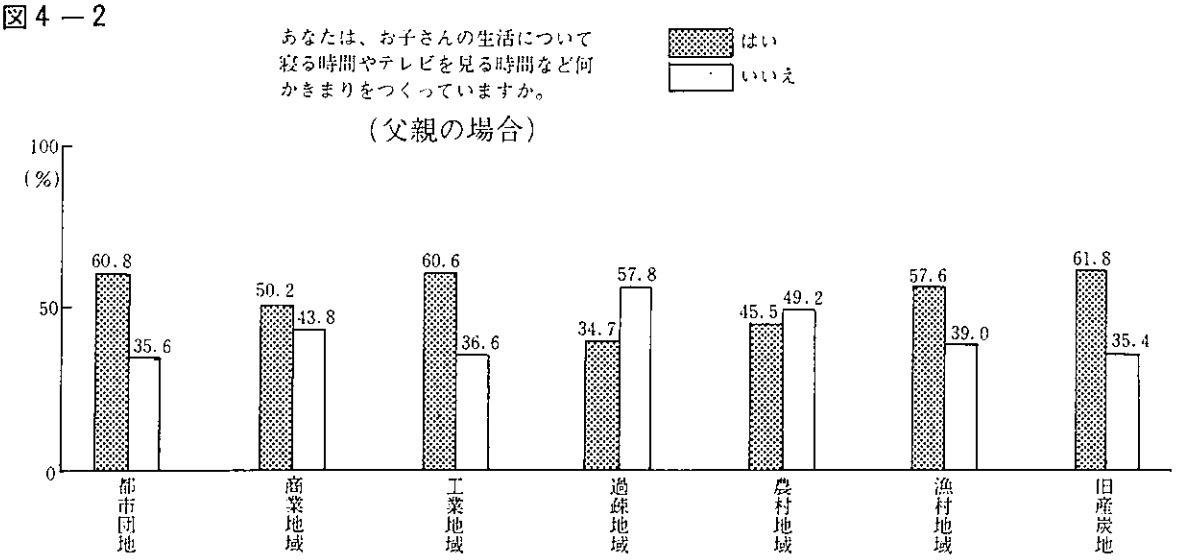
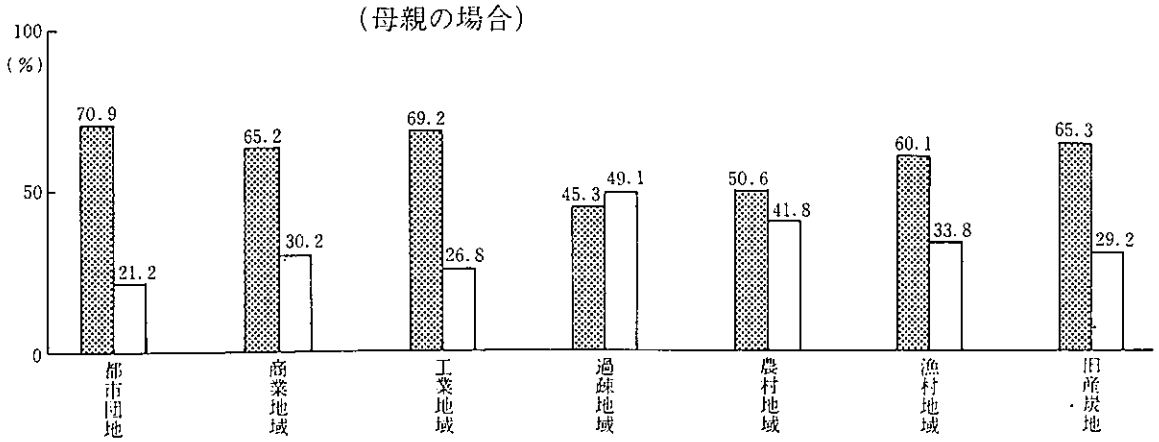


図４－３



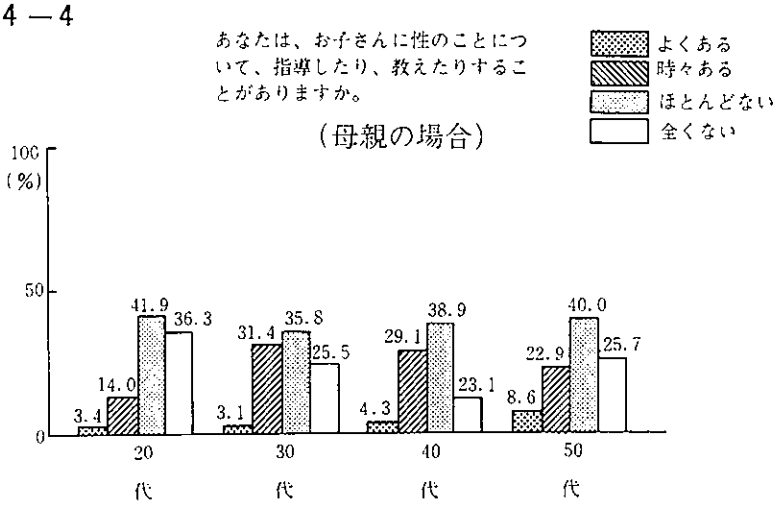
４．家庭における性教育の実態

性教育は、最近の性非行の氾濫ぶりから見てもますます重要な事がらになっているが、各家庭では、子どもの性について指導したり、教えたりする親は「よくある」、「時々ある」を合わせても「父親」で13.6％、「母親」で33.4％で、まだ極めて少ないという実態である。

性教育をするかとの質問項目では、地域別には母親、父親ともにあまり差異は見られない。

ちなみに、年代別で見た母親の性教育への係わりの度合いを示したのが、次の図４－４である。

図４－４



年代別に見ると、母親では「よくある」「時々ある」を合わせると「30代」34.5％で最も高く、次いで「40代」33.4％、「50代」31.5％の順である。「20代」の若い母親はわずか17.4％しかなく、性教育が不得手な母親像やその必要性を感じていない母親像が表われている。また、父親は逆に、若い父親が積極的に性教育をしている傾向が出ている。

また、親の学歴別では、母親では「短大卒」、「大卒」が積極的に性教育を行っている傾向がうかがえるが、父親の場合、必ずしもその傾向は見られない。また、子どもの成績についての親の評価別でも性教育のあり方に大きな差異は出ていない。

５．子どもの帰宅時における親の在宅の実態

全体的には子どもの４人に１人強が学校から帰っても母親が「ほとんど」ないし「全く」いない状況だが、地域的には差がかなり色濃く見られる。

次の図４－５、図４－６はそれを見たものである。

図４－５

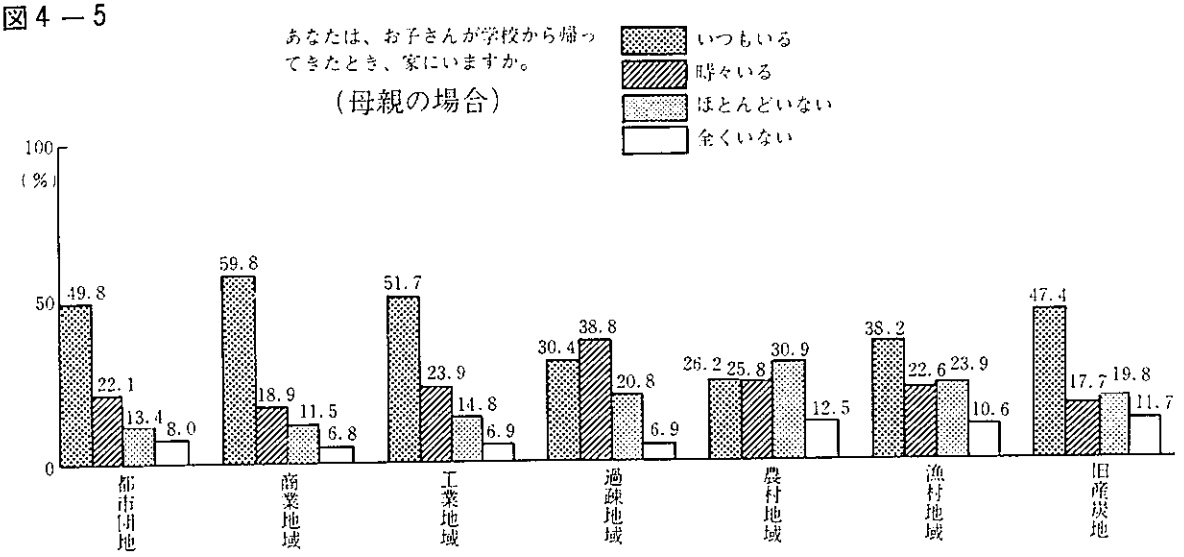
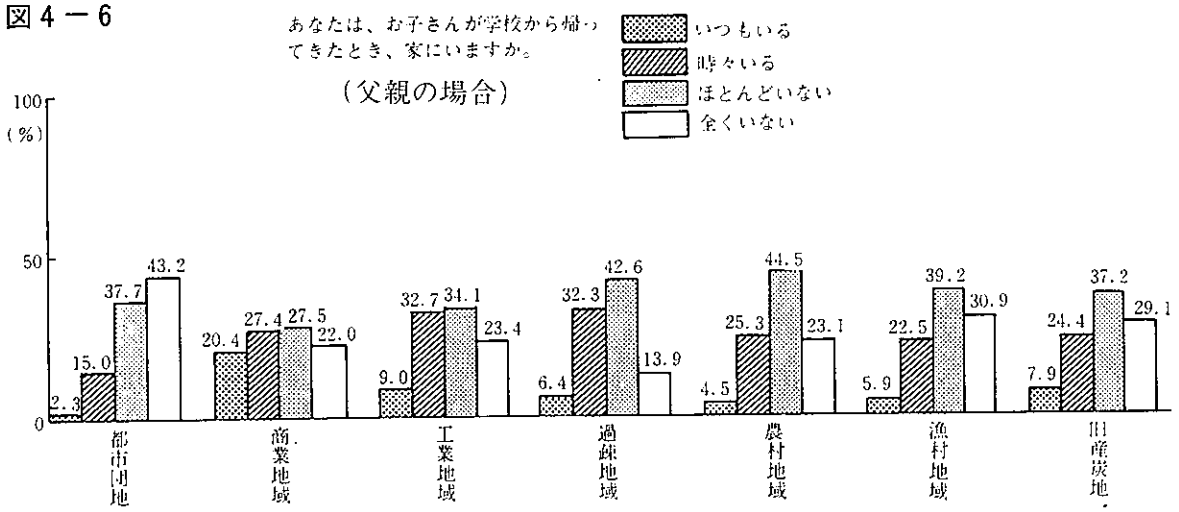


図４－６



母親で見ると「商業地域」、「工業地域」、「都市団地」では、かなり「いる」割合が高いが、「農村地域」、「漁村地域」では半数から４割強の子どもが「ほとんど」ないしは「全く」いない状況に置かれている。父親でも、この傾向はほぼ一致しており、「農村地域」、「漁村地域」に、やはり親不在が見られ注目したい。

さらに、父母の職業別でも、「販売・家事サービスの職業」は「いる」割合が高く、「事務的職業」や「技能工・生産工程・単純労働・採石等職業」、「農業・林業・漁業の職業」が不在の傾向が強い。また、母親の職業の有無別では、やはり仕事を持たない母親の92.6％が「いつも」「時々」いるのに対し、職業を持つ母親では２人に１人の子どもが「ほとんど」ないしは「全く」いない状況である。

このほか、父母の年代別、学歴別では著しい差異は見られない。また、子どもの成績別では、父親、母親ともに成績が「上位」と思っている子どもに「いる」割合が高いが、その差はさほど大きいものではない。

6．本章のまとめ

おこづかいの授与については、前年度の報告書のなかでふれたように、父親と母親をこみで考えると、子どもの４人のうち３人までが何らかのおこづかいをもらっている実態がある。金額的に見ても、月平均500円～2,000円程度が最も多い。衣食はもちろん、学用品や日用雑貨類を豊富に与えられているなかでの授与だけに、全般的にかなりの与えすぎの傾向があるのではないだろうか。

なかでも、今回の報告書で特筆したように、「旧産炭地」の場合のようにはっきりと与えすぎの傾向が見られる地域のあることはとくに注目したい。また、職業を持つ母親に高額のおこづかいの授与傾向が強いことも強調しておきたい。

「旧産炭地」に与えすぎの父母が多い背景は、さまざまな事情が考えられると思うが、その一つは、石炭なきあとの経済的理由に求められるだろう。例えば、男子雇用型の企業が依然として少なかったり、生活保護世帯なども著しく多いことや、母親が働く場合におこづかいの高額授与の傾向が強くなっていることを考えると、母親が就労せざるを得ない地域事情は、一方で、おこづかいの与えすぎを引き起こす要因をはらんでいるととらえられなくはないのである。

「旧産炭地」の筑豊で昨年春、高校２年生が強盗を働くという子を持つ親にとってはショッキングな事件がもち上った。事件発覚後、当該高校生の父母は「よい子に育てようと思うあまりに、子どもの欲求のままにこづかいを与え、好き勝手に育ててきた報いです」と涙を浮かべて反省するのだった。過剰な父母の期待があるあまりに、物や金銭を与えすぎ、結果的にはわが子の欲求や欲望を押さえる心のブレーキを育くんでいなかったのである。「遊ぶ金が欲しい」という欲望が事の善悪の判断さえ狂わせ、この高校生を強盗にまでかりたてていったと思われる。

おこづかいは与え方次第では、衣食住などの基本的な生活管理能力を向上させたり、金銭感覚を身につけさせたり、人間は何で生きているのかといった基本的な事がらを学ばせることにも役立つものである。だが、これも一定の節度と範囲を守って初めて教育的効果をもつものである。ルーズで過剰な与え方は、この強盗をした高校生のように、欲望をどんどん肥大化させ、最後にはお金のためなら何でもやるという誤った考えさえ生み出すものなのである。たとえ日ごろ、子どもの日常生活を見てやれない共働きの世帯であっても、親の愛情はおこづかいの額の多少で決まらないことを十分認識した上で、親自身が一定の節度とルールを守り、けじめをつけて与える姿勢こそ大切であろう。

お手伝いは、子どもの心身の発育、勤労体験、親との語らい、何かを創造していく喜び、自分の家庭での役割や義務分担などを与えたり、考えさせる大切な活動である。今の子どもたちが総じて責任感に乏しく、家族や他人に対する思いやりに欠けるところがあり、共同や協調の精神を忘れて自分勝手にふるまう傾向が強くなっている現実を見る時、そうした傾向に一つの歯止めをするという意味からも、親が積極的にお手伝いをさせることが望ましいのではないだろうか。

くしくも今回の報告書では、親が成績がいいと思っている子どもにはお手伝いをよくさせていると

いう傾向がでたのである。これは、お手伝いが子どもたちの自主性や主体性を引き出すきっかけになっており、学習面でも自学自習の姿勢を培っていることをうかがわせる材料にもなろう。また、逆におだちんや何らかの代償を与えてお手伝いをさせている親の姿勢が、成績がよくないと思われている子どもの親に見られる点は、親のかかわり方が極めて大切なことを物語っているといえよう。代償を与えてお手伝いをさせれば、教育上の効果は半減してしまうのである。無償であっても何かを最後までできちんとやりとげさせるという親の姿勢が大事なのである。

性教育は父母にとっては確かに難しい領域であるが、今日の性非行の低年齢化傾向や、街頭での性情報のはんらんの状況から見て、親がただ手をこまぬいていてよいはずはあるまい。

今回の分析でも、「20代」の若い母親が中年層の母親に比べて性教育を行っていない傾向が見られた。若い親が性教育をどうやってよいのか戸惑っている事情はよくわかるが、今日の性情報の氾濫ぶりを考えると、性について全く指導を放棄していることは問題であるといえよう。性教育の回避は、子どもたちに性はきたないものだと思わせ、陰ではとてつもない悩みや行為をさせる要因にもなりかねないのである。

最近の性非行は、マスコミ報道で見てもとくに女性徒の場合が深刻な様相を見せている。中学生が覚せい剤欲しさに売春したケースや、単なる好奇心から暴力団関係者と関係を結ぶケースなど目をおおいたくなるような事例が報道されているのである。しかし、このようなケースのほとんどに共通するのが、被害少女に罪悪感や被害者意識が希薄になっていることである。

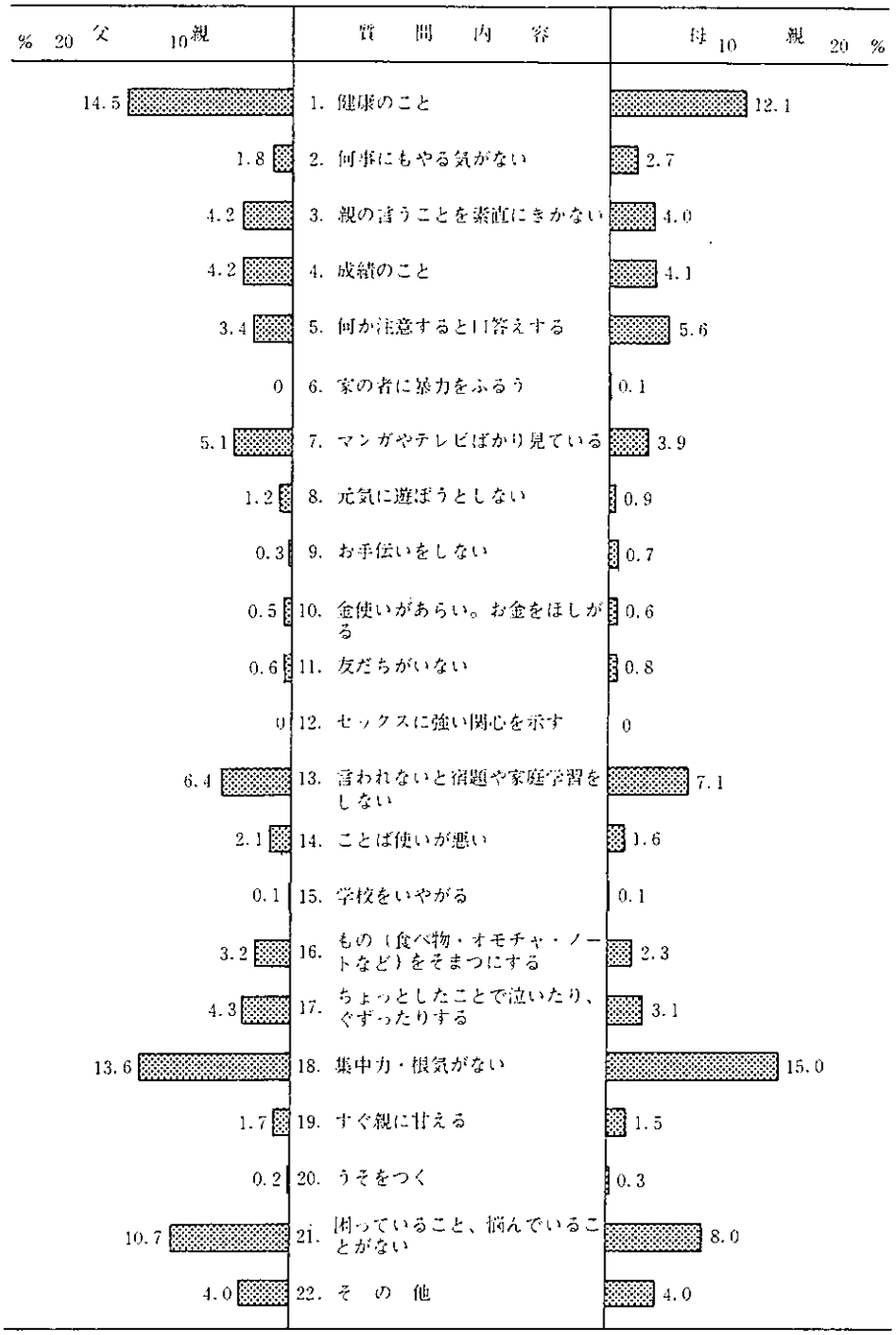
性教育はやはり両親のきちんとした日常生活、円満な家庭環境のなかで、夫婦愛、家族愛とは何か、人間愛とはどんなものかをまず押えさせることが基本である。その中で、率直に筋道をたてて性の問題を教える手だてを父母が手をたずさえて探ること以外に方法はあるまい。とくに女子の性非行の増加ぶりは、親の夫婦関係のあり方にその根本的な原因を求められると思うのである。

第5章　子どもの養育に対する親の意識の実態

1．子どものしつけに対する親の悩みの実態

子どものしつけについて、親がどのようなことで困ったり、悩んだりしているかについては前年度報告書でとり上げたが図5－1の示すとおりである。「集中力、根気がない」、「健康のこと」、「言われないと宿題や家庭学習をしない」などを上位にあげている。

図5－1　あなたが、お子さんのことについて、現在最も困っていること、悩んでいることは次のどれですか。あてはまるものを1つ選んでください。



まず、図５－２、図５－３は地域別にみた親の悩みを示したものである。

図５－２　あなたが、お子さんのことについて、現在最も困っていること、悩んでいることは次のどれですか
あてはまるものを、１つ選んでください。（父親の場合）

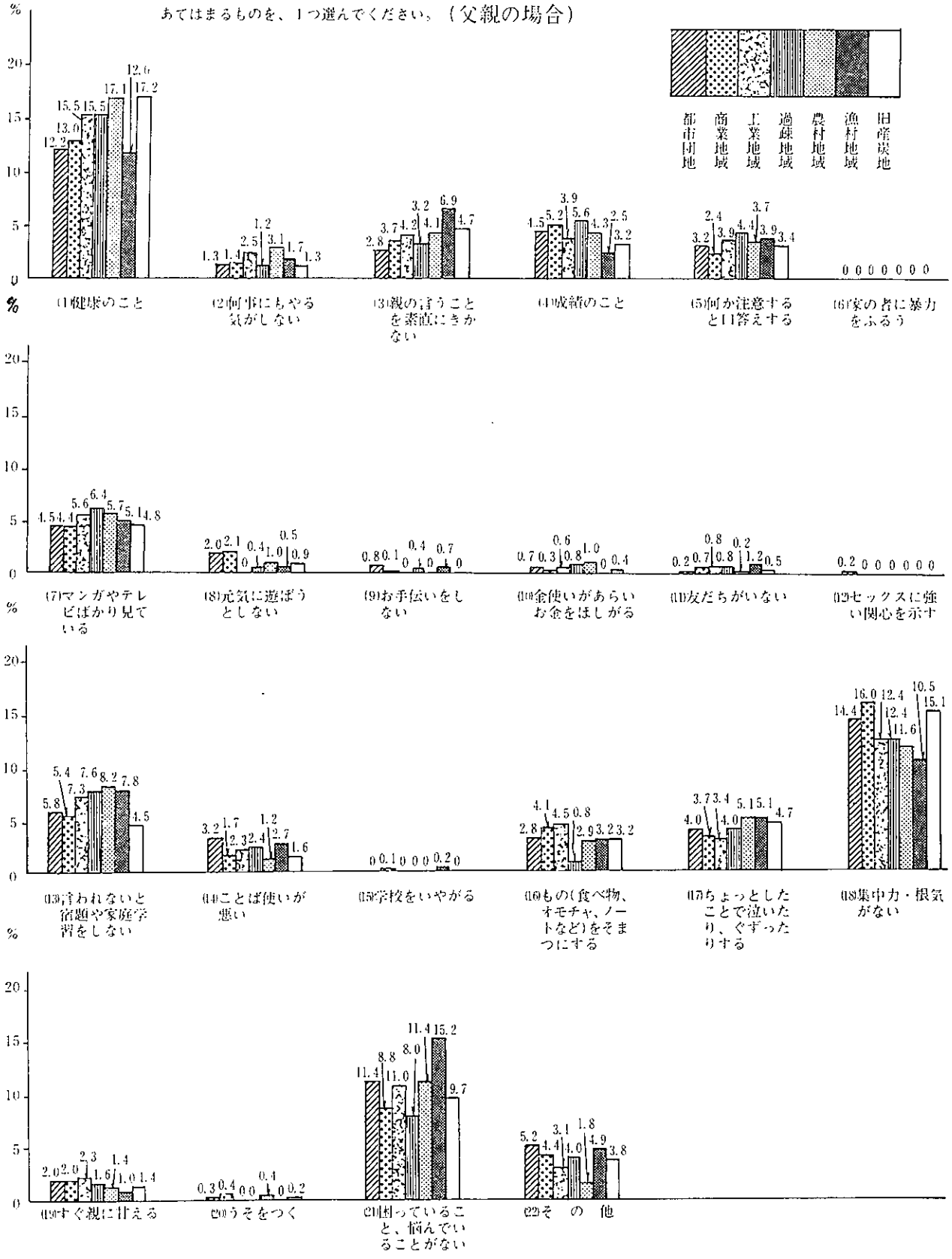
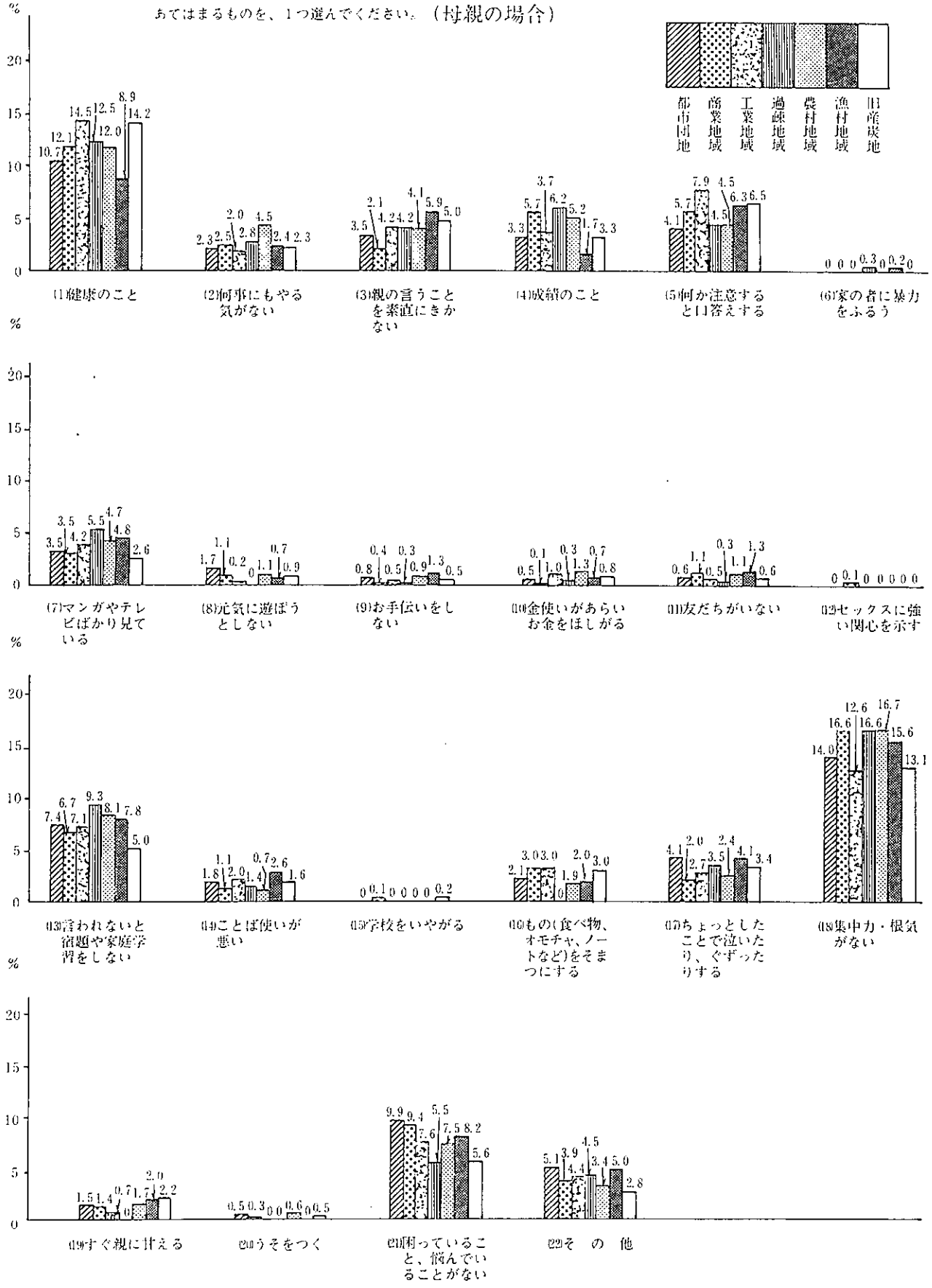


図５－３

あなたが、お子さんのことについて、現在最も困っていること、悩んでいることは次のどれですか
あてはまるものを、１つ選んでください。（母親の場合）



「健康のこと」については、どの地域の親も高い関心を示している。

「言われないと宿題や家庭学習をしない」という悩みをもっているのは、父親平均 6.4%、母親平均 7.1%であるのに、「旧産炭地」の親が「父親」4.5%、「母親」5.0%と平均を下回っている。「集中力、根気がない」については、「商業地域」の親が悩んでいる率が相対的に高い。また、同じ悩みでも「漁業地域・農業地域・過疎地域」では父親より母親の方が悩んでいるのは、子育ての母親への依存度が高いせいであろうか。

その他「元気に遊ぼうとしない」については、「都市団地」、「商業地域」の親が、他の地域の親より案じているようである。これは塾通いや遊び場不足で、「遊ばない」より「遊べない」でいるのではないだろうか。

また、数字的にみてあげるに足りないことかも分らないが、「セックスに強い関心をもつ」について、「都市団地」の父親が 0.2%、「商業地域」の母親が 0.1%と、わずかではあるが問題にしているのは、身体的発達の加速化現象が、性的な問題として小学生にまで及んできていることを示すとともに、それがまず「都市団地」、「商業地域」に現われたことは、環境とのかかわりの大きいことと、環境浄化活動の必要性を暗示しているといえるだろう。

次に両親の「年代別」による子どもに対する悩みをみてみよう。

子どもの「健康」については、父親は年代に関係なく（「50代」のみ突出）関心をみせているが、母親は年代が高くなるほど子どもの健康を案じ、「50代」では22.9%と、「20代」の8.9%の2.6倍もの高い関心を示している。「成績のこと」についても、母親は年代が高くなるほど関心が高い。

特に「50代」は、教育ママとはこの世代のための造語ではないかと思われるほど、他の世代の2倍から3倍強の関心度を示している。反対に年代の若い親ほど「親の言うことを素直にきかない」、「言われないと宿題や家庭学習をしない」、「ものをそまつにする」、「集中力、根気がない」など多様な悩みを訴えている。

また、親の「学歴」によって、悩みや困ったことの内容に相違があるのであろうか。父親の場合「健康のこと」、「親の言うことを素直にきかない」、「言われないと宿題や家庭学習をしない」などについては、「中卒」、「高卒」の親の悩みが多くなる傾向がある。

母親についてみると「言われないと宿題や家庭学習をしない」という悩みは、「短大卒」、「大卒」ほど少なく、逆に「友だちがいない」、「ものをそまつにする」という悩みは多いという結果が出ている。「短大卒」の母親が「成績のこと」については、他の学歴の母親より著しく少ない不安しか持っていないのに「健康のこと」や「集中力、根気がない」については、他のどの学歴の母親より多くの期待（不安）をもっていることは特異な傾向であろう。

さらに、親の「職業別」による悩みの実態はどうであろうか。

父親、母親ともに、職業による特徴的な傾向は見受けられない。強いてあげれば、ここでも「健康

のこと」、「集中力、根気がない」については、どの職種の父親、母親ともに平均的に関心が高い。「保安、運輸、通信等の職業」にかかわる母親が「親の言うことを素直にきかない」、「マンガやテレビばかり見ている」、「お手伝いをしない」ことについて、他の職業の母親より高い不安を持っているようである。特に「親の言うことを素直にきかない」については、母親全体の平均50%に対して12.5%と著しく高い。

父親、母親の間で対照的なのは「成績のこと」について、「技能工・生産工程・単純労働・採石等職業」の父親の関心が他の職種の父親に較べて低いのに、母親の方は、母親全体の平均5.0%に対し8.1%と高いことである。

図5－4は、母親の職業の有無別にみた子どもについての悩みを示したものである。

「健康のこと」、「集中力、根気がない」については、どの母親も同様に悩んでいることがうかがわれる。「成績のこと」についての悩みは、「主婦専業」2.5%に較べて、「専業の仕事」を持つ母親4.8%、「パート」の母親 4.9%と、仕事を持つ母親が成績についてより心配している傾向が出ている。

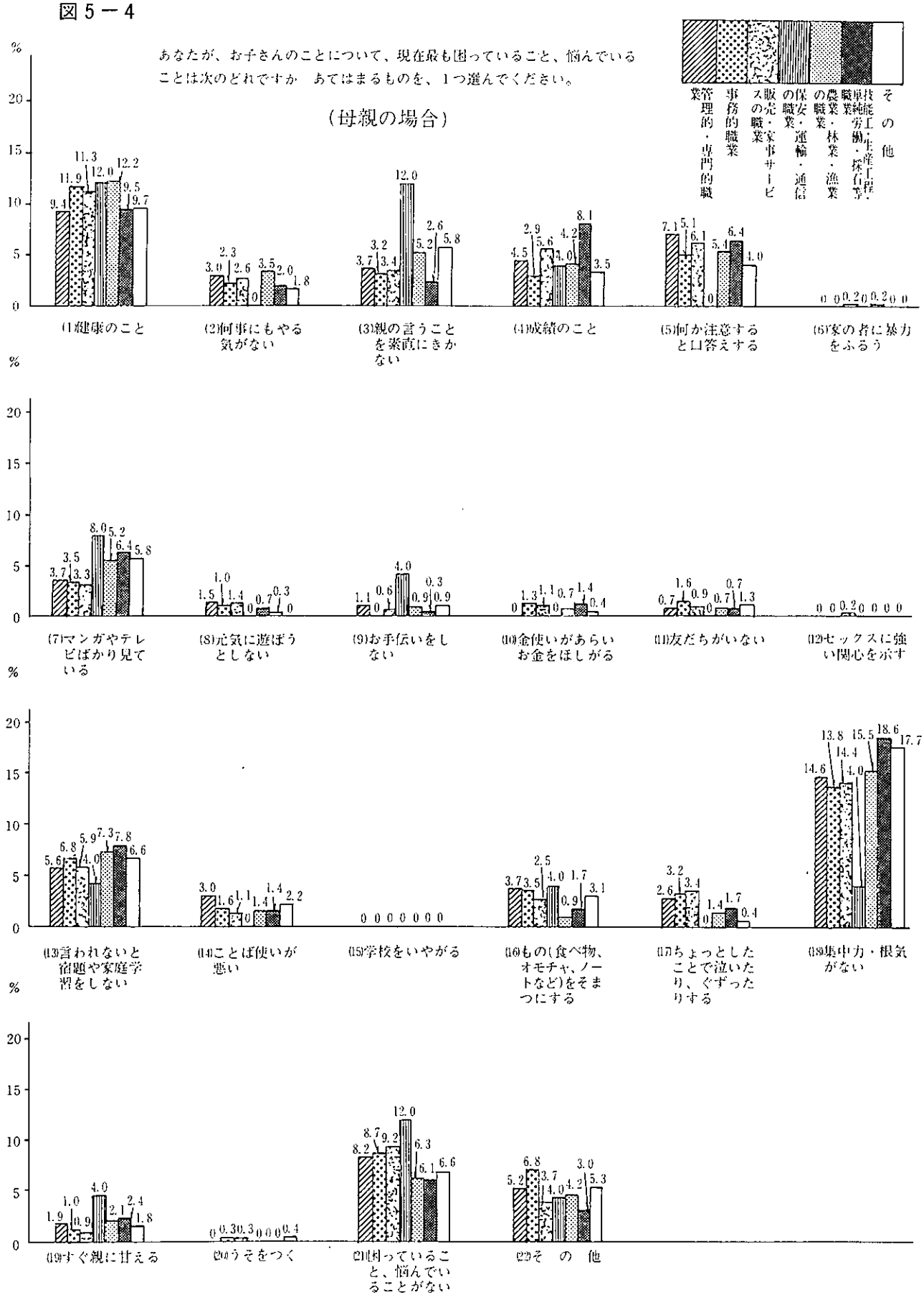
母親の留守中「マンガやテレビばかり見ている」とか「すぐ親に甘える」という不安を訴えているのも仕事を持つ母親に多い。

「言われないと宿題や家庭家習をしない」ことに心を痛めている母親は、「パート」9.4%、「主婦専業」7.6%であったのに対し、「専業の仕事」を持つ母親は5.9%であった。また、「金使いがあらい。お金をほしがる」ことの悩みが、「主婦専業」 0.5%、「パート」 0.3%なのに、「専業の仕事」を持つ母親が 0.9%とわずかでも高いのは、比較的金銭的にゆとりのある母親の姿が影響していると思われる。その他「友だちが少ない」、「ものをそまつにする」「ちょっとしたことで泣いたりぐずったりする」子どもについての悩みは、「主婦専業」に多いのは考えさせられる。

最後に自分の子どもの成績をどう思うかによって親の悩みの内容はちがっているだろうか。「健康のこと」については、子どもの成績のいかんにかかわらず親はいずれも高い関心を示している。子どもの成績が「上位」と思っている親ほど「何事にもやる気がない」、「成績のこと」「集中力、根気がない」等に対する悩みは少ないようである。これに対し「何か注意すると口答えする」、「ものをそまつにする」は、父親、母親とも成績が「上位」と思っている子どもに多いのはなぜだろうか。

現代っ子に特有ともいうべき親の悩みは「親の言うことを素直にきかない」、「マンガやテレビばかりみる」、「ことば使いが悪い」、「ちょっとしたことで泣いたりぐずったりする」、「すぐ親に甘える」などがあり、これらは成績にかかわりなく、父母ともにどの親も平均的に訴えている悩みである。

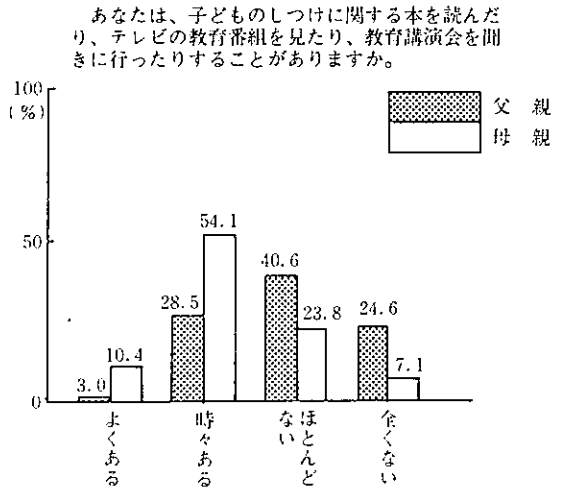
図５－４


あなたが、お子さんのことについて、現在最も困っていること、悩んでいることは次のどれですか　あてはまるものを、１つ選んでください。
（母親の場合）
管理的・専門的職業
事務的職業
販売・家事サービスの職業
保安・運輸・通信の職業
農業・林業・漁業の職業
技能工・生産工程・単純労働・採石等
その他
%
(1)健康のこと
(2)何事にもやる気がない
(3)親の言うことを素直にきかない
(4)成績のこと
(5)何か注意すると口答えする
(6)家の者に暴力をふるう
(7)マンガやテレビばかり見ている
(8)元気に遊ぼうとしない
(9)お手伝いをしない
(10)金使いがあらいお金をほしがる
(11)友だちがいない
(12)セックスに強い関心を示す
(13)言われないと宿題や家庭学習をしない
(14)ことば使いが悪い
(15)学校をいやがる
(16)もの(食べ物、オモチャ、ノートなど)をそまつにする
(17)ちょっとしたことで泣いたり、ぐずったりする
(18)集中力・根気がない
(19)すぐ親に甘える
(20)うそをつく
(21)困っていること、悩んでいることがない
(22)その他

2．子どものしつけについての親の学習の実態

子どものしつけについての親の熱意や関心度が、父親よりも母親の方が高いことは、次の図５－５の通りである。

図５－５



まず、子育てについての親の学習意欲を地域別にみると、若干ではあるが差のあることが認められた。例えば、「都市団地」、「工業地域」の母親は他の地域に比べて、より学習熱心である傾向がみられる。「都市団地」、「工業地域」の母親は学習への参加が「よくある」「時々ある」を合わせると、それぞれ70.9％、69.4％であり、「商業地域」62.0％、「農村地域」59.2％、「旧産炭地」61.0％の場合よりわずかながら高い。

これは、学習の機会の多寡、生活の多忙さ、地域の教育熱心など複数の要因が複合した結果であると想像される。

しかし、父親の方は「都市団地」が最低の27.9％になっており、子どものしつけは母親まかせというサラリーマン家庭の様子がうかがわれる。これに対し、「過疎地域」といわれる地域の父親は、他に較べて学習意欲が高いようであるが、それでも38.3％にすぎない。

次に子どもの家庭教育について、親の年代別にその関心度を調べたのが図５－６である。

図５－６

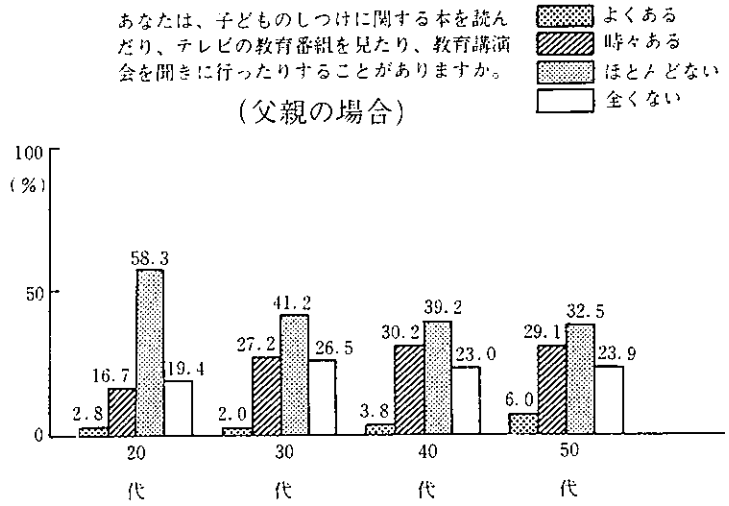
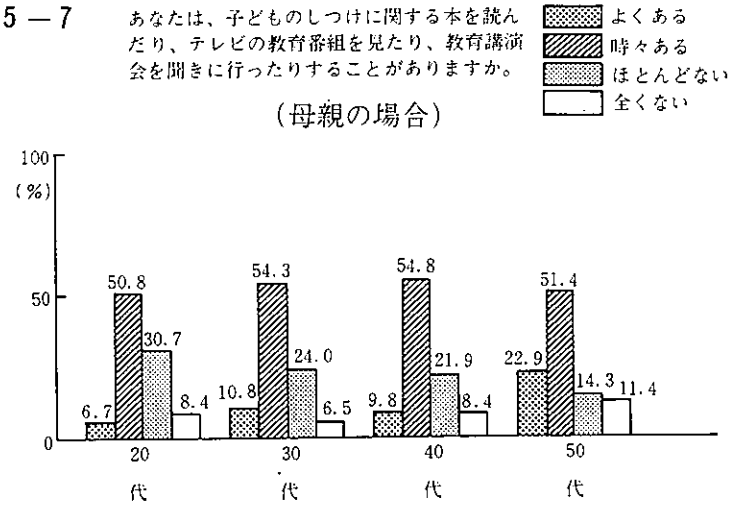


図５－７



両親とも年代があがるにつれて関心の度合及び学習への参加率が高くなっている。やはり、子どもが成長するにつれて親は無感心ではおられないということだろうか。しかし、20代の若い父親、母親こそ経験不足をカバーするためにも、もっと子どものしつけに対して気を配ってほしい気がする。

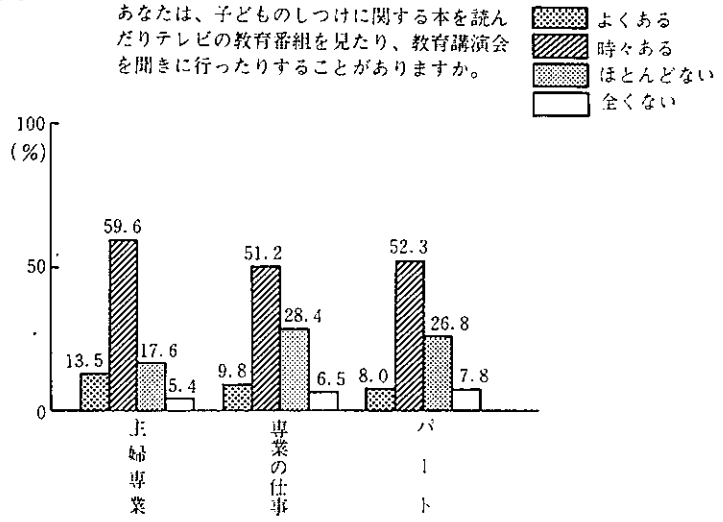
学歴別による親のしつけに関する学習意欲は、父親の場合にはあまり大きな差はないが、母親の場合は「中卒」58.3%、「高卒」66.9%、「大卒」78.5%と学習への参加率が高くなっている。しかし親の学習熱心さが生活の場で子どもの非行化防止など、子育てに果してどれ程役立っているかは考えさせられる問題でもある。

職業別にみた場合、父親、母親ともに、「管理的・専門的職業」の親が他の職業の親に比べて学習に参加する率が高いことが最も特徴的である。

さらに最近は家庭婦人の社会進出が目ざましく、今回の調査においても回答者の33.7%が「主婦専業」で、39.0%の母親は「専業の仕事」を持っており、「パート」の仕事を持つ母親も15.1%あった。つまり、主婦として家事に専念している母親は約$\frac{1}{3}$ということである。

では、子どものしつけや家庭教育について、その母親たちの学習意欲に差があるであろうか。図5－8のように「よくある」、「時々ある」合わせて73.1％と「主婦専業」が学習する率が高いのは当然としても、「専業の仕事」、「パート」の仕事を持って時間的に無理があるにもかかわらず、その6割以上の母親が学習していることは注目に価する。

図5－8



最後に子どもの成績と、親のしつけに関する学習との間にはかかわりをみてみよう。

父親、母親ともに子どもの成績が「上位」と思っている親ほど、しつけに関する学習もしている傾向がみられた。父親の場合あまり大きな差はないが、注目されるのは子どもの成績が「下位」だと思っている親が子どものしつけについての学習に高い熱意をみせていることである。

むしろ、成績が悪いだけに何とかして、という親の気持がよく出ているような気がする実態である。

3．子どものしつけについての親の自己評価

親自身が自分の養育態度・行動についてどのようにみているかについては、全般的にかなり多くの親、特に母親がよく子どもの「世話をしている」が、あまり「甘い方ではない」と自己評価している。また、「子どものしつけについて自信があるか」という質問項目に対しては、「父親」の32.9％（3人に1人）、「母親」の48.8％（2人に1人）が「自信がない」ことを表明している。

これを地域別にみると、しつけについて「大いに自信がある」「まあまあ自信がある」を合わせてもっとも高いのは、父親の場合、「工業地域」の68.7％、低いのは「過疎地域」の59.4％で若干の差が出ている。母親は父親に比べて総じて自信度は低いが、高いのは「工業地域」の56.4％、最低は「農

村地域」の39.7%で、かなりの地域差がみられる。

「子どもの世話をしているか」については、当然のことながら母親に比べて父親が低いが、これも、「工業地域」の父親が50.4%で、他に比べて子どもの世話をよくしていることがわかった。

母親では、「旧産炭地」が69.1%で高く、「漁村地域」56.4%で最も低い。しつけは「甘いか」については、「都市団地」、「商業地域」、「工業地域」、「旧産炭地」の父親が相対的に甘く、「漁村地域」、「過疎地域」の父親は甘いけれども、甘さの度合は他の地域に比べて低い。母親では「旧産炭地」が49.0%と高いが、最低の「漁村地域」は39.5%である。

親の年代ではどうだろうか。

父親の場合、「しつけ」に対する自信については、一般的に年代が高くなるほど、子育てに自信をもち、「50代」になると、「大いに自信がある」、「まあまあ自信がある」を合わせて75.2%もの数値を示している。それも「大いに自信がある」は「20代」では全くないのに、「30代」9.2%、「40代」10.2%、「50代」15.4%、と年代があがるとともに自信のほどをみせている。

「世話をしている」と思っているかどうかについては、「大変よく世話をしている」、「まあまあ世話をしている」を合わせて、「20代」が55.6%と他の年代に比べて高いのは、子育てを母親だけにまかせきりにせぬ、現代的父親の特徴を反映しているのだろうか。

自分のしつけが甘いかどうかということについては、「大変甘い」、「まあまあ甘い」を合わせて、「20代」44.5%から次第に高くなり、「50代」は55.5%となっている。

母親の場合、自分のしつけに対する自信については、父親に比べて一般的に自信度は低いようである。しかし、年代的には父親の場合と同じ傾向をみせ、経験を積むにつれ、「20代」で39.1%であるのに対し、「50代」では2倍近い68.5%となっている。また、自分のしつけを甘いと思っているかどうかでは「20代」が39.1%、「50代」が57.2%と、年代の高まりとともにその割合は高くなる傾向がある。このように年代が高くなるにつれて、自分のしつけを甘いと思っている親が多くなり、しかもしつけに対する自信度が増していく傾向が見られるのである。逆にいえば若い母親では、自分は子どもをよく世話していると思っているが、甘やかしているとは思わず、しかも自信はないということである。

親の「学歴」の別にみた場合の自己評価をみてみると、父親の場合、「しつけ」に対する自信は、「大いに自信がある」、「まあまあ自信がある」を合わせて「中卒」は59.9%であるのに、「大卒」は72.8%と高くなっている。

子どもの「世話」をしていると思っているかどうかについては、学歴による差異は見られない。しつけの「甘さ」についての自己評価は、「大変甘い」、「まあまあ甘い」を合わせて、「中卒」50.7%「高卒」51.2%、「短大卒」52.1%、「大卒」53.4%となっている。

一方、母親の場合では、しつけに対する自信は「中卒」45.4%、「大卒」56.0%である。また、自分のしつけを甘いと思っているかどうかでは、「中卒」47.4%、「高卒」41.5%、「短大卒」38.5%

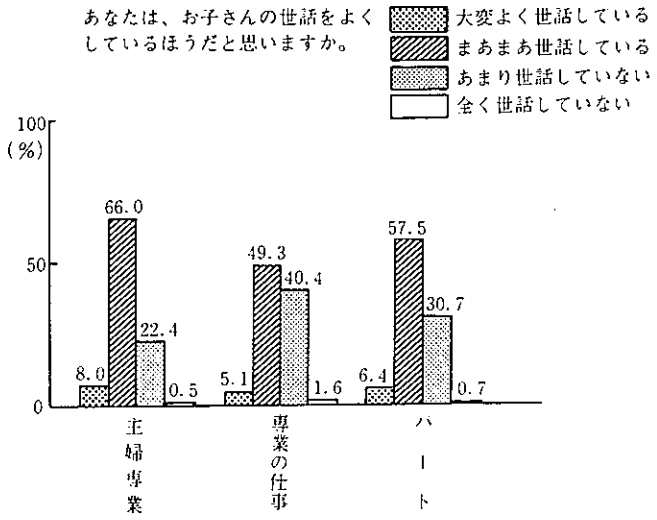
「大卒」37.0%となっている。

また、親の職業によって、子育ての仕方についての自己評価に違いがあるだろうか。大きな差ではないが、子どもに対して自分は「あまり甘くない」と答えているのは、父親、母親ともに「農業・林業・漁業の職業」の親である。また、子どもの世話をする度合いが他の職業の親よりも相対的に低いのも「農業・林業・漁業の職業」の親であった。そして、これら「農業・林業・漁業の職業」の親は他の職業の親に比べて、子育てについての自信が相対的に低くなっている。

特に母親の場合は、「大いに自信がある」、「まあまあ自信がある」では「管理的・専門的職業」の場合が50.2%と高いのに比べて、「農業・林業・漁業の職業」の場合は38.5%となっている。

さらに、母親が仕事を持っている場合と、そうでない場合の自己評価はどうであろうか。図5－9でわかるように、自分が子どもに対して、世話をしていると思っている度合いは、母親の職業の有無によって大きく異っている。すなわち「大変よく世話をしている」、「まあまあ世話をしている」と評価している割合は「主婦専業」の場合74.0%であるのに、「専業の仕事」を持つ母親では54.4%と、20%も低くなっている。

図5－9



子どもに対して「甘い」方だと思うか、という質問に対しては大差はないが、「パート」に出ている母親の割合がわずかに高い。また、しつけについて「大いに自信がある」、「まあまあ自信がある」という母親は、「主婦専業」では49.1%で、「専業の仕事」46.8%、「パート」45.5%である。

最後に子どもの成績と、子どもの「しつけ」についての親の自信との関係をみたのが図5－10、図5－11である。

図5－10

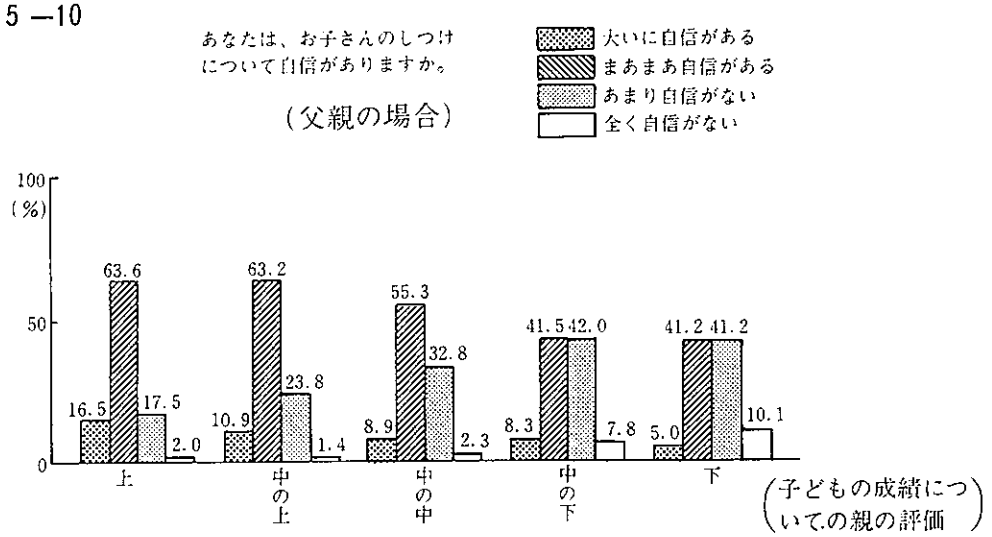
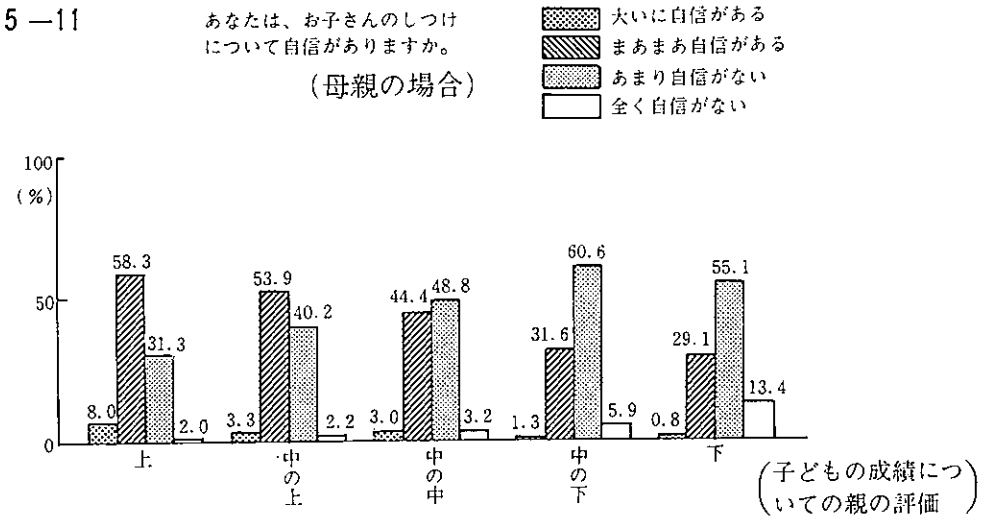


図5－11



子どもの成績が「上位」と思っている父親ほど、そのしつけについて自信のほどを示している。すなわち「上位」と思っている父親では「大いに自信がある」16.5%、「まあまあ自信がある」63.6%で、あわせて80.1%となっている。これに対して「下位」と思っている父親では46.2%である。

母親についても、父親と同じ傾向が顕著にみられる。しかし母親の方は成績は「上位」だと思っていても、子どものしつけに「大いに自信がある」8.0%、「まあまあ自信がある」58.3%と、父親に比べてやや割合が低くなっている。これは母親の場合、子どもの日常生活に接する場が多いだけに、成績だけでは……という思いがあるからではないだろうか。

自分のしつけを甘いと思っているかどうかについては特徴的な傾向はみられない。しかしどちらかといえば父親、母親ともに、成績が「下位」であると思っている子どもの親の方が、自分のしつけは甘いという評価をしているようである。

4．本章のまとめ

子どもの養育についての親の悩み、子どもの養育についての親の学習、養育態度についての親の自己評価、という三つの問題について、地域、年代、学歴、職業、母親の職業の有無別、子どもの成績の別にその実態を調べたのがこの章である。

どの地域の、どの年代の、どんな職業の親も、まず、子どもの「健康のこと」を一番心配しており、「集中力・根気がない」ことを悩んでいるようである。これは、人間として「生きる」ことについてこの二つのものがすべてのものの根幹にあることをわきまえてのことであろう。

子どもの養育について学習しているのは、いづれの場合も、母親の方が父親の約2倍と高いが、母親の年代があがるにつれてその熱意も高まっている。幼児期のしつけがきわめて大切な意味をもつと考えられるのに、若い母親の率が低かったのは気にかかることである。

また、最近はますます仕事を持つ主婦が多くなり、今後も増加する傾向にあるようだが、それに比例して少年非行が増えたとの声も聞かれる。

女性の社会進出、ひいては生きがいを持つことと、子育てについて、微妙なかかわりがあることも考えられる。しかし、今回の調査においては、約54％の母親が何らかの仕事を持ってはいるが、「主婦専業」に比べて養育態度や学習意欲について、そんなに劣っているとは思われず、かなり自信をもって子育てに当っているようである。子どもへの愛情は量よりも質であることを、なお一層心してほしいと思う。

第6章　結論と今後の課題

―「無意識の過保護」と「一部放任」―

昭和55年度の報告書でも指摘した通り、本県における子育ての実態を子どもの世話、子どもへのものの与え方（授与）、子どもの諸要求を受け入れる度合い（受容）などを親の行動からみてみると、そこには明らかに過保護と呼ぶべき傾向が存在していた。

ここでいう過保護傾向とは、要約すると次の5点がある。

1．子どもが本来自分でできること、あるいは自分ですべきことを先取りし、世話をする傾向がが強い。
2．安易に物を与える傾向が強い。
3．子どもの要求を安易に受け入れる傾向が強い。
4．しつけのために叱ったり、注意したりする親は決して少なくないが、その叱り方に一貫性のない傾向がある。
5．手伝いをあまりさせなていない。

昭和55年度は、子育ての実態を子どもの学年別、性別、兄弟の有無別、兄弟の位置別など、子どもの属性別によって検討してみたが、その結果、質問項目の内容によって若干の差異は認められたが、結論的には全体を通して上記に要約したような過保護傾向が共通していることが明らかになったのである。

本年、昭和56年度は、分析の視点を変えて、地域別、親の年代・学歴・職業の別・母親の職業の有無別、子どもの成績の別によって何らかの違いや、特徴がみられるかどうかについて検討を行った。

結果は、全体的には昨年と同様、上記の諸属性にかかわりなく、過保護傾向が指摘できるが、部分的にはいくつかの質問項目にわたって、見過ごすことのできない相違点が発見された。主な相違点を例示的に列挙すれば、およそ次のようなものになる。

○子どもの成績が「上位」と思っている親ほど、子どもに手伝いをさせている傾向がある。
○父母ともに、「短大卒」、「大卒」の親が子育てに関する「きまり」を設ける傾向が強くなる。
○「20代」の母親は他の世代の母親に比べて性教育へのかかわり方が消極的である。
○子どもの帰宅時における親の在宅の実態には、地域差及び母親の職業の有無別によって大きな差がでている。
○親の年代によって、子どものしつけについての親の悩みの内容が異なる傾向がみられる。
○母親の職業の有無によって、子どもに対する「世話」の度合いに大きな差が生じている。

さて、過去２年間の分析を通して注目すべき二つの傾向が明らかになった。

その第１は、親の属性にかかわりなく、極めて多くの親が過保護な傾向にあるにもかかわらず、一方ではかなりの親が子育てについては「全く世話をしていない」「あまり世話をしていない」及び「全く甘くない」「あまり甘くない」と自己評価しているという事実である。これは、親の具体的な子育ての「実態」と「意識」の間にズレがあり、「無意識の過保護」と呼ぶべき問題が存在することを意味している。すなわち、多くの親が実際生活においては、子育てについてかなり過保護な態度や行動をとっているにもかかわらず、本人の意識や考え方の中では、自分は過保護ではないと思い込んでいるということができる。

第２の傾向は、先の過保護傾向とは裏腹のしつけに関する「一部放任」が続いてきたということである。すなわち、一方で子どもの欲求や行為を先取りして、親がすべてやってしまうという第１の傾向があると同時に、他方では、親が当然子どもに教えたり、訓練しておくべき事がらが伝えられないまま、教えられないままに放置されてきたということである。

例えば、子どもに基本的な生活習慣が身についていないという状況は、親がやってしまっているから子どもに学ぶ機会がなかったという面と、親が教える努力を怠って放任してきたという面の二つの側面が存在するのである。一言でいえば「放任的過保護」とでも呼ぶべき事態である。親の過保護・過干渉傾向が、ある面では最少限のしつけすらも怠るという「一部放任」の態度と抱き合せになったとき、まさに子どもたちは学校生活・社会生活を営んで行く上での基本条件すらも身につけることができないのである。

当然のことながら「甘さ」や「厳しさ」の基準は時代により、環境によって揺れ動くものである。どういう子育てが「甘い」のか「厳しい」のか、あるいはどのようなしつけをどこまでやるのかについては、「世間」の大勢や風潮が大きく影響していることはいうまでもない。すなわち「みんなもやっている」ということが人々の基準になる傾向が強いのである。現在のように、父親までもが母性化したといわれ、世間一般の子どもの保護の度合いを強めている状況にあっては、子育ての基準も全体的に保護的になり、かつ甘くなることは、いわば時の勢いであるというべきかもしれない。

しかしながら、時代の風潮がどうであろうとも、子どもが一人前の社会人として育っていくためには、当然身につけておかなければならない習慣・技術・態度すらも、過保護や一部放任によってきちんと身についていないという状況は、すでに誤った子育てといわなければならない。

過保護とは、決して一部マスコミが話題にするような、母親が入社式にまでくっついていくというような現象のみをさすのではない。また、放任とは、これまた極端に取り沙汰されるように、子どもを一切かまわずに放っておくことのみをさすものでもない。日常の生活習慣すらも確立していず、社会生活上の基本的道徳が身についていないという状態は、まさに「過保護」であり、「一部放任」の結果であるといわなければならない。これら社会生活の基本条件は、子ども自身が自分でやってみなけ

れば身につかず、大人が教えなければ伝わらない事がらであるからである。

現代っ子は、一般に体が大きく、口もよくまわり、一見すると心身とも伸び伸びと育っているように見えるが、実際は必ずしもそうではなく、よくいわれるように、体力がなく、ちよっとしたことで疲れたり、倒れたり、骨折したりする子が少なくない。心の面でも自主性（やる気）がない、耐性（がまんすべきときにがまんする力）がない。集中力・根気がない、責任感がない、思いやりがないなどさまざまな問題性が各方面から指摘されているところである。こうした状況は、いくつかの要因が複雑にからみあって生じたものと思われるが、その中でも最も大きい原因は、両親の子どもに対する日ごろの接し方、養育態度・行動にあると考えられる。両親が子どもをどのように扱い、育てるかによって、意欲的な子どもにも、無気力な子どもにも、たくましい子どもにも、ひよわな子どもにも、優しい子どもにも、意地悪な子どもにもなるのである。

県教育委員会では、今回の実態調査をもとに、すでに「小学生をもつ――あなたの子育てのために」という小冊子の手引書を発刊したが、本報告書が子育ての原則及び個々の具体的な生活指導の研究資料として広く県下で活用していただくようお願いする次第である。

引　用　文　献

○稲村　　博　1979「ティーン・エイジャー」現代評論社

○Ｊ・Ａ・Ｌ・シング著　中野善達他訳　1977「狼に育てられた子」福村出版

○平井　信義　1979「家庭内暴力の疫学」―教育と医学―　第27巻　第７号

参　考　文　献

○福岡県教育委員会　1981「昭和55年度家庭教育総合セミナー報告書」

○福岡県教育委員会　1982「小学生をもつ―あなたの子育てのために」

本調査で使用した質問紙

お母さん用　　(注：お父さん用についても同様の質問紙を使用している。)

小学生のしつけについてのアンケート

◉記入の仕方についてのお願い

1．この調査用紙を持って帰られたお子さんについてお答えください。

2．この用紙は、お母さんがお答えください。もしお母さんがお答えできないときは、ふだん最もよくお子さんに接しておられる方でけっこうです。

3．各質問に対するお答えは回答項目のうち最もあてはまるものの番号（1．2．3など）を○でかこんでお答えください。

4．次の欄に必要事項を御記入くださるようお願いいたします。

お子さんの学校名	お子さんの学年	お子さんの性別	お子さんの兄弟の中での位置	御記入くださった方	御記入くださった方の年齢
_____小学校	_____年	1．男 2．女	1．ひとりっ子 2．_____人兄弟の___番目	1．父親　2．母親　3．祖父 4．祖母　5．兄　6．姉 7．その他（　　）	1．10代　2．20代　3．30代 4．40代　5．50代　6．60代 7．70代以上

1．あなたは、今朝お子さんのふとんをたたんだり、押入れにあげたり（ベットの場合はふとんのあとしまつ）してあげましたか。

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

2．あなたは、今朝お子さんを起こしてあげましたか。

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

3．あなたは、お子さんが「お風呂」に入っているとき、着がえを用意しておいてあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

4．あなたは、今朝お子さんが学校に出かける前、勉強道具や名札、チリ紙など持っていくものについて注意したり、手伝ってあげたりしましたか。

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

5．あなたは、昨日お子さんの部屋や机の上をかたづけてあげましたか。

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

6．あなたは、お子さんが食事の際、食べ物に文句を言ったら仕方がないと思い残させることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

7．あなたは、昨夜お子さんのふとんをしいてあげましたか。（ベットの場合は整える）

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

8．あなたは、お子さんが特に欲しがらなくても、お菓子や飲み物を買ってあけたり、おやつを用意してあげたりすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

9．あなたは、お子さんに、雨が降ったとき学校に「カサ」を持って行ってあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

10. あなたは、夕食のときお子さんの見たいテレビ番組がある場合、テレビを見ながら食事をするのを許してあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

11. あなたは、お子さんが食べ物をそまつにしたり、文句を言ったり、好き嫌いしたり、残したりしたときしかっていますか。

1．よくしかっている　2．時々しかっている　3．ほとんどしかっていない　4．全くしかっていない　5．その他（　　）

12. あなたは、お子さんがあいさつすべきときにあいさつしなかったら、しかることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

13. あなたは、お子さんの遊び相手をしてあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

14. あなたはお子さんが家に友だちを連れてきて遊んでいるとき、お菓子や飲み物を持って行ってあけますか。

1. 必らず持っていく　2. だいたい持っていく　3. ほとんど持っていかない　4. 全く持っていかない　5. その他（　　）

15. あなたは、お子さんがいつも見ているテレビ番組を忘れて遊んでいるとき、「○○が始まったよ」などと教えてやりますか。

1. 必らず教えてやる　2. 時々教えてやる　3. ほとんど教えてやらやい　4. 全く教えてやらない　5. その他（　　）

16. あなたは、お子さんに遊びの内容や遊び方について注意したり、指示することがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

17. あなたは、お子さんが誰と遊ぶかについて注意したり、指示することがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

18. あなたは、お子さんが見ているテレビ番組の内容について注意したり、指示したりするすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

19. あなたは、お子さんが友だちといさかい、口論、けんかなどしているとき仲裁（ちゅうさい）に入ったり、指示を与えることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

20. あなたは、お子さんが特に欲しがらなくても、オモチャやマンガの本などを買ってあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

21. あなたは、お子さんが特に要求しなくても遊園地などのレジャー施設やデパートなど、お子さんの喜びそうなところへ連れていってあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

22. あなたは、お子さんが遊びすぎて宿題など勉強を忘れてやらなかったとき、しかったり、強く注意したりすることがあります。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

23. あなたは、お子さんが遊びすぎて手伝いなどきめられたことを忘れてやらなかったとき、しかったり、強く注意したりすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

24. あなたは、お子さんに特に頼まれなくても、宿題や工作づくりなど手助けしてあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

25. あなたは、お子さんの勉強に関係あるものなら、お子さんに頼まれなくても買ってあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

26. あなたは、お子さんが勉強しているとき「ちょっと手をかして」などと手伝いを頼むことがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

27. あなたは、お子さんが勉強しているとき、見たいテレビをがまんすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

28. あなたは、お子さんが遊んだり、テレビを見ているとき「勉強はすんだの」などと注意することがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

29. あなたは、お子さんの成績があがったとき、物を買ってあげたり、どこかへ連れて行ってあげることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

30. あなたは、お子さんの勉強のために学習塾にやったり、家庭教師を雇ったりしていますか。（おけいこ事は除く）

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

31. あなたは　現在、お子さんに何か決った手伝いをさせていますか。

1．はい　　2．いいえ

32. あなたは、お子さんにおこづかいを、月平均いくら与えていますか。

1．月平均＿＿＿＿円　2．与えていない　3．その他（　　）

33. あなたは、お子さんに手伝いをさせたとき、いくらかおだちんを与えていますか。

1．はい　　2、いいえ

34. あなたは、お子さんの生活について寝る時間やテレビを見る時間など何かきまりをつくっていますか。

1．はい　2．いいえ　3．その他（　　）

35 あなたはお子さんに性のことについて、指導したり、教えたりすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

36. あなたは、お子さんのしつけについて自信がありますか。

1．大いに自信がある　2．まあまあ自信がある　3．あまり自信がない　4．全く自信がない

37. あなたは、お子さんの世話をよくしているほうだと思いますか。

1．大変よく世話しているほうだと思う　2．まあまあ世話しているほうだと思う　3．あまり世話していないほうだと思う

4．全く世話していないと思う。

38. あなたは、お子さんのしつけについて甘いほうだと思いますか。

1．大変甘いほうだと思う　2．まあまあ甘いほうだと思う　3．あまり甘いほうだとは思わない　4．全く甘くないと思う

39. あなたは、お子さんが学校から帰ってきたとき、家にいますか。

1．いつもいる　2．時々いる　3．ほとんどいない　4．全くいない

40. あなたは、お子さんのしつけに関して一番心をくばっていることはどんなことですか。自由に書いてください。

（　　）

41. あなたが、お子さんのことについて、現在最も困っていること、悩んでいることは次のどれですか。あてはまるものを1つ選んでください。

1．健康のこと　2．何事にもやる気がない　3．親の言うことを素直にきかない　4．成績のこと

5．何か注意すると口答えする　5．家の者に暴力をふるう　7．マンガやテレビばかり見ている　8．元気に遊ぼうとしない

9．お手伝いをしない　10．金使いがあらい。お金をほしがる　11．友だちがいない　12．セックスに強い関心を示す

13．言われないと宿題や家庭学習をしない　14．ことば使いが悪い　15．学校をいやがる

16．もの（食べ物・オモチャ・ノートなど）をそまつにする　17．ちょっとしたことで泣いたり、ぐずったりする

18．集中力、根気がない　19．すぐ親に甘える　20．うそをつく　21．困っていること、悩んでいることがない

22．その他（　　）

42. あなたは、子どものしつけに関する本を読んだり、テレビの教育番組を見たり、教育講演会を聞きに行ったりすることがありますか。

1．よくある　2．時々ある　3．ほとんどない　4．全くない　5．その他（　　）

43. あなたのお子さんの学校の成績はどのくらいですか。

1．上　　2．中の上　　3．中の中　　4．中の下　　5．下

44. あなたの最終卒業学校は次のどれですか。

1．中学校卒（義務教育学校卒）　2．高校卒（旧制中学校・新制高校を含む）

3．短大・高専卒　　4．大学以上卒（旧制高専を含む）

45. あなたの職業は何ですか。あてはまるものを1つ選んでください。

1．農業、林業及び類似の職業（農耕、養蚕、養蓄、林業の職業等）

2．漁業の職業

3．事務的職業（会計事務員、作業的事務員、運輸通信事務員、一般事務員、等）

4．専門的・技術的職業（技術者、教育の職業、医療保健の職業、芸術家、芸能家、等）

5．技能工、生産工程の職業（金属材料製造、加工、組立、印刷製本、飲食料品製造、建築業、等）

6．管理的職業（管理的公務員、会社、団体の役員、等）

7．単純労働の職業

8．保安の職業（自衛隊、警察官、海上保安官、鉄道公安職員、消防署、守衛、監視員、等）

9．採掘・採石の職業

10．運輸・通信・公益供給の職業（鉄道機関士、自動車運転手、通信の職業、等）

11．家事サービスの職業

15．販売及び類似の職業

13．無職

14．その他（　　）

※お母さんについては、次にも答えてください

1．主婦専業

2．専業の仕事をもっている

3．パートの仕事をもっている

調 査 協 力 校 名

学　　校　　名	学　　校　　名
福岡市　有田小学校	大島村　大島小学校
久留米市　青峰小学校	朝倉町　大福小学校
大野城市　大野南小学校	杷木町　久喜宮小学校
福岡市　冷泉小学校	黒木町　木屋小学校
〃　奈良屋小学校	二丈町　深江小学校
飯塚市　飯塚小学校	〃　福吉小学校
北九州市　枝光小学校	稲築町　稲築東小学校
星野村　星野小学校	方城町　伊方小学校
〃　仁田原小学校	計　19校
〃　椋谷小学校	
〃　小野小学校	